

教界の権利主義と自由主義
全

81

81

020392-000-4

81-81

教界の権利主義と自由主義

リギョル/著

M31

ABI-0199





教皇の權利義務

緒言

物質界に於て、大結果の一小原因より出で、大椿事の一小瑣事より起ることは、吾人の日常目撃耳聞する所、例せば彼の鬱然天を撐し、樹影數十人を覆ふ蒼木の如き、其初は一小椎子の土中に埋められたるもの外ならず、又彼の一朝豪華の都城を燒盡して、滿目蕭條たる赤土に化ける祝融の如き、其原因を究むれば、偶一小火片より起る。豈啻物質界のみならずや、人間界の事往々亦然り、古今東西の歴史を閲せよ、一國禍亂の源となり、一時流血川を成し、伏屍山を築ける大戦争の如きも、除るに其原因を探れば、適一強國の使節來るに際し、待遇其禮を失へりと云ふが如き一小瑣事に原由するの類例は一にして足らざるなり。

今は早や三百五十年前の昔、彼の歐洲全土に火と血の雨ふらしめたる



宗教騷乱の如きも亦此理に漏れず、同騷乱の結果として、百冗煩乱、禍害鬱結、殆ど百年の間歐洲の天地をして陰雲慘憺、悲風蕭條たらしめたる事は、人の普く知悉する所、然れども今詳に其原因を遡究すれば、其千袂萬禍は皆是れ一行者ルーナルなる者の嫉妬と憤怒とを出発点として出で來れるを見るなり、而して其餘弊餘毒は今仍掃蕩せられざるのみならず、愈出で、愈激甚を加ふるの勢あり、同行者の出發點としたる害毒主義は、彼と共に死せずして、世界に蔓延し、東西到る處に昔と同一の結果を呈出しつゝあり、同主義の影響する所は獨り宗教界のみならず、政治界にも波及するに至れり、蓋し人間は其性一、分離すべからず、其精神にして一たび或る主義の虜となるや、爾來同主義は其一生を支配して、四方八面に同一の言動云爲を企てしむるものなり、是を以て本書題して『教界の權利主義と自由主義』と稱するも、『政界

の權利主義と自由主義』として見るを妨げざるなり、教界と云ひ、政界と云ふ、語異なるのみ、聰明なる讀者は本書教界内の記事言論を心して讀まば、現時政界に出沒隱見する百の現象結果を解説するに難からざるべし、何となれを本書は幾多結果の遠きもの近きもの、眞原因を一目の下に瞭然たらしむる教界展覽會たると同時に政界反射鏡たらんを期するものなれをなり、蓋し政海波瀾の一起一伏は教海波瀾と同じく、畢竟二主義に原因す、二主義とは何ぞや、曰く權利主義と自由主義即是なり。

明治三十一年七月初一日

著 者 識

目次

序論	一
現時の狀勢	二
器械熱の時代	三
黃金熱の時代	四
眞理の勝利	六
本論(上) 公同一貫	八
眞正教會の特質論	八
キリスト教の分類	十三
加特力教及其教會	十四
東洋離教及其教會	十六
波羅士特教及其教會	十九
宗教騷亂の巨魁ルーテル	二十
英國に於ける波教の狀態	二十五
獨逸に於ける波教の狀態	二十八
キリスト教の二大區別	二十九
加波二教不一致の原因	三十
加教主義 權利主義	三十一

波敎主義——自由主義……………三十三頁

加波二敎信仰の異同……………三十五頁

波敎徒の一致合同論……………三十六頁

加敎徒聖書曲解の辨……………三十九頁

日本國体と加敎制度の類似……………四十八頁

自由主義の結果——乖離分裂……………四十九頁

波敎徒の聖書採否に於ける不一致……………五十一頁

加波二敎會爭論の性質……………五十四頁

加波二敎徒の優劣論……………五十五頁

ルーテルは真正なる宗敎改革者乎……………六十頁

波敎徒の窮策より出でたる一致論……………六十五頁

波敎徒一致の困難及其四分五裂……………六十七頁

本論(中) 常眼歴然……………七十五頁

真正敎會の可見的特質……………七十五頁

可見的特質の譬喩的解説……………八十頁

波敎徒の可見的特質に對する口實……………八十六頁

本論(下) 普遍常住……………九十一頁

昨是今非の譯論……………九十一頁

真理の特質……………九十二頁

敎會の天職……………九十六頁

加波二敎會の真理に對する態度……………九十八頁

加敎會は敎理を變更せず……………百一頁

式例の變更に敎理に關せず……………百三頁

祈禱文及禮儀的慣行増加の辨……………百七頁

加敎會の異敎離敎に對する處分……………百十一頁

加敎會は果して人を容るゝの雅量なき乎……………百十四頁

加敎會の國家民人に與ふる一大補益……………百二十頁

結論……………百二十四頁

改宗者の學徳及其運爲……………百二十四頁

ニウマンの性行及其改宗……………百三十三頁

マニングの性行及其改宗……………百三十三頁

教界の權利主義と自由主義

佛人リギヨル著

序論

昔猶太國にピラトと名ぐる知事あり、適々一種異様の人物を法庭に招致して裁判す、此人物や東西に隠れなき神的大物にして、當時不軌を謀り國亂を醸せりと云ふ嫌疑否口實を以て告訴せらる、ピラトは案して審問す、時に被告之に答て曰く「世の皇帝も王公も我に就て怒る、罪を以て我は政權剝奪の目的を以て世に出でたる者にあらず、聊か眞理を世界に發揮せんが爲なり云々」、ピラトは初より名利富貴をのみ志したれを、固より哲學を學ぶの進なし、否之を學ぶの心だもなかりし者、今眞理云々の言を聞き、被告の政權に意なきを曉りて安心しつゝも、傲然侮蔑の容を示して時の人民(原告)に語つて曰く、「本官は毫も被告に罪あるを認めず云々」、勿論ピラトの眼中には、此偉大なる神的人物も狂愚なる一貧兒と映せり、少くとも彼は之を目して時勢以外の空想家と見做したるや瞭かなり、何となれど當時羅馬の國狀は物皆商買的にして、金權政治滔々として天下を風靡し、國內到る

處に拜金宗の信徒充滿し、風教日に弛廢し、道義月に紊亂し、節操、節義、廉耻、廉潔等の高德は蕩然として地を拂ひ、社會の運命刻々危殆に奔りつゝ、あれども、時の政治家、哲學者は無能無力にして之を奈何ともすること能はず、前者は因循姑息、徒らに一日の安を貪り、後者は大言壯語、漫に空想をのみ畫けむなり、此際に當り真理の二字を叫ぶ、誰か信せんや、ピラトが被告を時勢以外の空想家と見做し、狂愚なる一貧兒と蔑視したるもの亦以なしとせず。

記して茲に到れを、ピラトの時代と現今の時代の相似たる、何ぞ其れ此の如く酷しきや、然れども余は今當代の歴史を引て現時の状態を一々照破するの意にあらざれを、此は閑日月ある讀者に委し、單に真理の問題に關する一點に就て語らんとす、今日の人々は總ての真理問題に對して如何なる態度を取れるやと云ふに、ピラト時代の人々と毫も異ならざるなり、真理の二字を聞て、傲然侮蔑の容を示すピラトは今日果して幾人ある、滔々たる天下皆ピラトにはあらざるか、今人の最も腹の虫に障る所は何なりやと云はれ、我は真理なりと答へん、今人の最も眼の上の瘤となる所のは何ぞやと言はれ、我亦真理なりと應へん、嗚呼真理は實に厄介物なり、到る處に排斥せられ、到る處に排撃せらる、人若し現世紀の歴史上に特筆大書すべきものありやと問はれ、我は先づ真理排斥運動を以て之を答へ

現時の狀態

んと欲す、現世紀の人は實に真理の影をも恐れつゝあるなり。

然らむ則ち真理の代りに如何なるものを歡迎尊重するに至りたるや、邦人の此點に就て變遷したる最近三十年間の事蹟を追想回記するは頗る興味ある事なり、歐米諸國の文物の始めて此國に入り來れるや、人々皆喫驚感嘆して、目眩し心奪はれ、人知の進歩茲に到るかと思ひ、直に其文明の利器を輸入して、茲に器械崇拜時代を現出したり、邦人の摸倣に巧なる直に手を下して器械製作に従事したり、和製の或物優に舶來のものを凌駕するに及んで、自負的喫驚と感嘆とは愈々其度を高め、一物發明せらるゝや、闔國舉つて拍手喝采したり、是よりして國民の心は物質的文明の一方に傾き、器械學を學ぶ者と器械の製造に従事する者陸續踵を接して起るに至り、文明の利器の下には、萬民跪て之を祭り、歲月をも、金錢をも、健康をも、生命をも其犠牲に供し、殆ど國民の萬事を賂して顧ざるに迫り、此時は實に邦人の神は文明の利器太明神にてありたり、然れども凡て過激なる者激甚なる者は、永く繼承するものにあらず、文明の利器太明神に對する熱心も亦然り、一時餘りに其熱度を高めたるが爲め、忽ち茲に反動を生じ、國狀と國民實際の生活等の語の下に、亦忽ち冷却するに至りたり、忽然として熱するものは忽然として冷む、理固より然るなり。邦人は無知の民にあらず、國民の幸福の爲には文明の利器のみにては足らずと云ふ事を實

器械熱の時代

險自覺するに至りたり、烟突高く天を衝くも、機關日夕室内に運轉するも、火船海波を蹴て東西比隣の如くなるも、汽車陸路を奔つて一瞬千里なるも、山谷海洋に架する電信機が聲に應じて音信を傳ふるも、市街邸宅に設くる瓦斯燈が夜を照して月星を欺くも、國民の心は決して此等によりて満足するものにあらず、蓋し人間には無限の欲望あり、此欲望や此等器具の充實なると共に充實せらるゝものにあらざるなり、否寧ろ此等器具が物質的文明によりて日に月に整備する丈けそれ丈け其欲望の度を高めて愈々益々飢渴を覺ゆしむるに至るものなり、邦人も亦實に此時代を經過し來りたるなり。

是を以て器械熱に繼ぐに黄金熱を以てし、知らんと欲する欲の代りに有せんと欲する欲の生ずるに至りたり、數年來此黄金熱非常に其度を高め、天下到る處此熱病流行し、今や實に一にも金、二にも金、地獄の制度も金次第の語は若々實にせられ、拜金宗の信徒は國內に充滿し、黄金萬能論者は陸續踵を接して起り、今迄國內を支配したる學問様まで黄金の奴隸となるに至り、忽ち茲に黄金大明神時代を現出するに及べり、國民は皆其尊前に跪坐し、一ドラニドラニドラの御名を以て亞孟の妙號を唱へ、彼の學者社會までも此流俗に支配せられて、今や知らんが爲に學ぶ者一人もなく、往々皆儲けんが爲に學ぶ者のみ、或人曰く日本には學問の爲に學問する者なし、滔々たる天下の學者皆是れ金の爲に學問する徒

のみと、吾人初め之を矯激の言となせり、然れども今や其言の適切なるを叫ぶの止むを得ざるに至れり、堂々たる天下の學者にして既に然り、彼の青年子弟が其知識、才幹、心志等を賭して成る可く多くの金になる學問を研究せんと欲するが如き、毫も怪むに足らざるなり、金權政治、黄金政略、現金主義、拜金宗旨等の流行する、亦何ぞ怪まんや、輿論は皆黄金に傾けり、黄金亦輿論を作るの時勢とはなりぬ、凡て算盤に上らざるものは空なり、虚なり、無なり、零なり、金錢の外天下更に有効有力の物なし、是れ實に今人の輿論にして、國民皆此黄金熱に浮されつゝあるなり、是を以て人々相會すれど、乃ち先づ曰く甘い話はなきやと、蓋し一攫千金の道はなきやの意なり、世人會談するに當り、開口第一に出るものは『金』の語なり、余は今後何々事業に従事すと云へど、曰く金になるやと、余は今回何々位地に昇級すと云へど、曰く俸給如何と、俸給金錢等の問題は造次顛沛にも語る者と問ふ者との思念を離れず、彼等は日夕之をのみ觀念し、之をのみ目的とす、其此が爲に言論し、此が爲に云爲し、又此が爲に生死するに至つてや、黄金熱も亦甚しと謂ふべきなり、何ぞや此が爲に生死すとば、曰く金ある者は溪壑飽くなきの心に、金なき者は羨望堪へざるの心に逼られて、日夕生死の境を辿る幾回なるかを知る能はざるの謂なり、若夫れ金の爲に言論行爲を左右するに至つては、常眼の事實、人皆之を知る、亦何ぞ余の詳説を待たんや。

然れども國民が如何に黄金熱に狂すと雖、決して黄金の爲に満足せらるゝものにあらずなり、貨殖の事たる人心を満足せしむる道にあらず、寧ろ欠陥を感せしむる道なるを見る、『金持と灰吹とは溜る程汚なくなる』の俚諺穿ち得て妙なりと謂ふべし、是を以て國民の心醒め、黄金の熱冷むるに當つて、今迄忽諸に附し、忘却に附し、雲煙過眼に附し去りたる真理は亦忽ち赫然として其眼前に顯はれ、爾等何故我を排斥したるや、何故我を侮辱したるやと詰問するに至つては、黄金崇拜者答ふに辭なく、掲ぐるに口實なく、進退谷に窮するに至るなり、真理は此時愈々其勢を得、之に逼り、之を叱して曰く、爾等金を溜めて果して満足し得たりや、過去の経験は爾等の教戒なり、譴責なり、今に當り、我れ爾等に問はんぞ、人は果して肉のみの者なるや、果して死すると同時に腐朽して土地を肥すまでの者なるや、請ふ最後の決答を爲せ云々と、國民は是非とも之が決答を爲さるべからず、人は肉のみ、金われを休すと答へんか、過去の實驗は之を容さるるなり、黄金熱は冷めたり、歡樂時代は去りたり、今や將來の世界眼前に逼れり、爾の爲には恐る可き將來なるか將た樂む可き將來なるか、爾此問題を避けんと欲するか、忘れんと欲するか、能はざるなり、之を避け之を忘るゝは今や爾の權内に在らず、爾は爾を造りたる者にあらず、如何ぞ之を避け忘るゝを得んや、此道に於ては休止するを容さず、人生の終局まで進行せざる可からず、

進行せよ、進行せよの聲は絶えず心の内より響けり、嗚呼如何なる處まで進行せざる可からざるか、嗚呼如何なる處まで進行せざる可からざるか、休息の點果して如何。

余は『事跡以前以後之歴史』を以て、此恐る可き問題を證論し、上天の神は此點に就き吾人人類に安心立命の道を教へたりと云ふ歴史的事實を精確明晰に記述したり。

次に『學理無能論』を以て、此歴史的事實を論理的に詳論し、上天の神にゆらすんぞ到底吾人々類を安心立命の地に置く能はざる理由道理を明瞭的確に説明したり。

今や本書に於て論せんと欲する所は、如何なる道によりて、此合理的歴史的事實を認識するを得るやと云ふ事是なり、安立問題に就ては、古來種々の異論異説あり、然れども真理は唯一、要は之を識別するに在り、固より神の授けたる安心立命の道は真理なるに相違なければども、古より安立問題を解釋するが爲に、幾多の哲學者宗教家起りて、異端邪説紛々囂々たるが故に、其中に就て孰れか是れ神の道にして、孰れか是れ人の道なるやを區別するは易からず、本書は乃ち如何なる特質徴候を以てせば、兩者を識別し得べきやを示さんとするものなり、故に『事跡以前以後之歴史』『學理無能論』の二書と須臾も相離る可からざるものとす。

本論(上)

公同一貫

上天の神が塵寰に降生し、人生必須の大真理(安心立命の道)を教へて、世界の人々の心に一大光明を垂れたり云ふと雖、今日の思潮界を視るときは、尙未だ混亂乖離して、異論異説の紛々藉々たる事、毫も基督降生以前に於けると異ならざるは奇と謂ふ可きなり、就中吾人の最も不思議に堪へざる事は、自ら稱して基督教徒と公言する者は、外教者よりも尙一層の異論異説を逞うしつゝある事なり、基督教を信せざる者、若くは之を排撃せんと力ひる者が、人生安立問題に就て、設令知らず識らず基督教の教理を採用して之を解釋しつゝありとは雖、尙未だ區々の議論を逞うして、明瞭精確、人をも満足せしめ己をも満足せしむる解説を爲す能はざる事、毫も基督降生以前の學者に異ならざるが如きは、敢て怪むに足らずと雖、彼の基督教を信じて自ら其教徒なりと公言する者にして、其心尙未だ天の光明に接せざるもの、如く、日夕是非の議論を戦はして、基督教其物に就てすらも意見相合はざるに至りては、是れ實に吾人の怪訝に堪へざる所なりとす、基督教なるものは其れ此の如く多岐多様に解釋せらるべきものなるや、此等自稱基督教者の解説に據ると

きは、基督教は唯一無二の教にはあらずして、天下に幾個もある教の如く思はるゝの感あり、豈奇怪の現象ならずや。

若し夫れ基督教なるものは、神が人間の本末歸終を明にして、天下の人々に人生最大の目的を得せしむる爲に制立したる所謂安心立命の大道なりとせむ、其所謂安心立命の大道は天下に一つ二あらずるべきは、申す迄もなき事ならずや、何となれと人々は世界の如何なる方面に住すと雖、其本源を異にし、其歸終を殊にし、又其造化主を別にするの理なきものなれとたり、東西國を隔つると雖、古今時を異にすと雖、寒暖氣候を別にすと雖、其人間たるに於て何を關せん、是非眞偽を識別する道に至つても亦二あるべき謂はれはなきものなり、勿論洋の東西、時の古今によりて往々法律習慣等を異にすと雖、其大極に至つては皆是れ東西一貫、萬古不磨の一大公法に原因せざるはなきなり、何れの邦國、何れの時代の法律と雖、皆此一大公法の解説應用に外ならざるはなし、而して世界の事は皆此一大公法によつて司配せられざるはなし、先人は之を天の命と言ひたり、立法者は之を性法とも稱するなり、吾人は之を人類の大道若くは天下の公法と言はんを欲するなり、蓋し世界萬民の依つて以て規畫せらるゝ所なれとたり、此點より觀察するときは、古今東西の人々皆一律せらる可き者たらざるはなし、若し夫れ未來の世界より立論するときは、東西如何な

る國土に住する者と雖、死後孰れも皆同一なる法官(神)の前に出で、公明正大なる裁判を受くべき者ならざるはなし、果して然りとせば、世界的宗教と稱せらるゝ基督教は何故此の如く多岐に分るゝや、又此基督教を保有弘布する天職ありと云ふ教會は何故此の如く多々なるや、基督教の分離、基督教會の分裂の因つて來る原因は如何、是れ實に吾人の解釋に苦む所なり、基督は二三の宗教を立てたるか、種々異様の教理を説きたるか、將又將來相敵視する千萬の教會を設立するを命じたるか、否々千遍萬回も否、勿論彼は其教其教會の時と場合によりて擴張せらるゝを欲したるに相違なしと雖、乖離分裂して多岐多端に涉る事は其意にあらざりしなり、試に先づ彼れの言動を視るに、彼は一生の間自家撞着し、前後矛盾するが如き行動に出でたる事は一回もなきなり、彼れの人に教ふるに當りても甲には斯く教へ乙には斯く教ふと云ふが如く、人によつて其説を二三にするが如き事蹟は一も指點するを得ず、例へて一方には信條十二ヶ條を説き、他の一方には八ヶ條若くは五ヶ條を説くが如き、或は或者には誠命十ありと云ひ、或者には五六誠のみに止まると云ふが如き事は一も之なし、寧ろ却て其門徒を世界に派して教を布かしむるに當り、『往て萬民に教へ、凡て我が爾等に命ずる所のものを守らしめよ』(マテオ傳二十八の十九、二十)と明言したるを見るなり、彼れの教會を創立せるを視るも、二三の相異なるものを立るが如き意は

毫も之なかりき、故に彼れの教會に就て語るや必ず『我教會』と單數を用ひて、『我等の教會』と云ふが如き複詞を使用したることはなし、(マテオ傳十六の十八參看)、其信徒に就て語るも亦然り、凡ての人々が相合して一牢一枚の如く成らん事は彼れの希望にてありたり、(ヨハネ傳十の十六)、彼れが晩年死に臨めるとき其信徒に反覆遺言したる所は、衆相合して一と爲らん事にてありたり、(ヨハネ傳十八章)、是を以て其教會の一大特質とも稱すべきものは、其創立の當時より、一心同体に在りしを見るなり、曰く『信者の衆一心一志云々』と、(使徒傳四の二十二)。

尋で使徒の代に至りても、其師基督の遺志を繼承して、教會の一致をのみ心に懸けたり、使徒パウロは教會の事を稱するに、往々『基督の体』の語を以てせり、而して体は一なり、二三あらず、之を分離するは乃ち是れ之を破却するなり云々(エフェソ人に送る書五の二十三、二十九、ローマ人に送る書十二の四、五參照)、是を以て時の信者に屢々同感の事を語りたり(ヒリッペンセス人に送る書二の二)、此の如き例證は聖書中處々に散見し、一々擧げて數ふるに遑あらざるなり、然れども以上列記したる所、引用したる所のみを以て見るも、今日千百の基督教會が地上に相分立するが如きは、決して基督及び使徒の遺志にあらざる事、隨て此等千百の基督教會が皆基督及び使徒の設立に係るものにあらざる事を知るに足るな

り、何となれを基督は二三の相異なる教會を創立する意を何處にも言顯はしたることなく、其使徒も亦正統の教會の多くあるべき筈なきを明に看取したれをなり、是故に基督教が千宗萬派に岐れて、教界の渾沌を來すが如きは、其原因全く人間に在るものなり、之を以て基督に歸する可からざるは勿論、道理にも歸す可らざるを見るなり、何となれを道理は多岐に分れて相互に衝突す可きものにあらざれをなり、去れを何れの方面より論ずるも、教會分裂の起原は人心の弱點に歸せざる可からざるや彰々乎として明なり、露骨に言へど、人間の傲慢、頑固、自由、我儘是なり、如何に美なる名目を以て之を包むも、外被を剥いで眼を内部の秘密に徹底すれば、剛愎と自由とに外ならざるものなり、試に今日本帝國四分五裂すと假定せよ、其分裂の原因果して何れに歸すべき、無論仁慈なる皇帝陛下の聖慮にはあらざる可し、二三臣子の野心所謂亂子賊子に其罪を嫁せざる可からざるや言を待たざるなり。

記して茲に到れど、人或は曰はん、若し果して基督教なるものは神來の教にして、又其教の活ける權化とも稱すべき基督教會なるものは、神の創立に係るものなりとせよ、何爲そ神は其教と教會とを祐護して、乖離分裂等の憂なからしめざるや云々と、答て曰く、神は人間の間に一の事業を行はんとするも、爲に人間の性質を變更するものにあらず、設令地上

に一の教會を創設して、永く人間の中に真理の受托者、解釋者、擁護者たらしめたりとするも、人間より自由の權を剝奪して、之に反抗し、之を攻撃し、又之より分離するを得ざらしめたるものにあらざるなり、教會の存立を以て人間自由の消滅の因と見做すが如きは、大なる誤なり、人間は自由の徳を萬古失はず、神も亦之を失はしむるを得ず、故に設令神立の教會世に在りとするも、之に出入し、其教を採否する等の自由は依然人間に在り、若し望まむ之に入りて其教を信奉せよ、望まずんを以て之を汚奴するも亦可なり、昔者基督の時代に當りて、時の人民之を信奉したる者もあれど、之を攻撃したる者もあり、其攻撃の甚しき遂に彼を死地に陥るに至りたり、今日に至りても亦之と異ならず、入つて之を主とするも、出で、之を奴とするも、开は人々の自由に委す、但だ茲に神の履行すべき事は、己と共に在らんことを欲する人々と共に世の終りまで在る事是のみ、蓋し『我爾等と共に世の終りまで在らん』と云ふ言は、神の約言なれをなり、斯く論じ來るときは、論者の疑問は自ら氷解するを見るなり。

世に基督教と稱するもの夥多あり、之を細別せよ、枚舉に遑あらざらんとす、今之を大別せば、三大宗となる、年代の順序を以て云へど、曰く加特力教（吾人之を公教と譯し、世人常に之を舊教と稱す）、其教會を羅馬加特力教會と通稱す、曰く東洋離教（自ら稱して正教

と云ふ、其教會は東洋離教會(自稱正教會)、東洋とはコンスタンチノープル、シリア、アルメニア、エジプト、ロシア(露西亞)等を謂ふ、曰く波羅士特教(世に之を新教と稱す)、其教會はプロテスタン教會若くは新教會、即是れ烏合の衆にして、千宗萬派の集合なり、相互には名目の外毫も一致なく、加特力教會に反抗する時にあらずんば、決して共同するものにあらざるなり、乃ち知る、全然統一を缺ける教會なるを、(讀者請ふ日本の新教のみを以て之を計る勿れ。)

加特力教及
其教會

加特力教、及其教會は是れ創立の最も古きものなり、故に世人は此意味に於ても舊教と稱す、連綿たる教統を以て使徒及び基督まで遡源するものは同教會一あるのみ、抑も此教會たるや、完全なる一の教社團體にして、首領あり、法制あり、位階あり、教職あり、教民あり、立法權あり、行政權あり、其整理、其統治等に至るまで、毫も國家の制度に異なるなし、異なる所は單だ其目的方道のみ、何となれを同教會は眞理の識認完行を方道として、永遠救靈の道を講ずるを以て目的とせむなり、別言せば、德行によりて安心立命の地に到達せしむる事是なり、現代の首領(教皇)は基督の選立して以て『爾は岩石なり、今後爾の名は岩石なるべし、我其岩石の上に我教會を建てん』と語りたるペトロ(岩石の意)より二百六十二代目に相當す、其間法統連綿として須臾も斷絶したることなきは、宛も日東國に於

ける皇統と同じ、其教權の世界全教會に到達することは、宛も日本皇帝陛下の權が日本全國に到達すると一般なり、嗚呼日本國團體と同教會制度の相似たる何ぞ其れ此の如くなるや、吾人は完全なる國家と完全なる教會の酷似する、宜しく此の如くならざる可からざるを承認するものなり、首領の下に一千六百人の司牧あり、各々一國の任を帯びて、其教區を管理し、其教民を牧畜すること、尙日本今日の縣知事の如し、蓋し斯くして以て同教會統治を補佐するものなり、全世界に彌滿散布する教會に於て永く一致を繼續維持せしむるが爲に、同一の大法あり、故に其信仰、其拜禮、其制度等全教會到る處同一なり、是を以て司牧となる者も首領の是認、裁可、派遣等なきときは、教區管理の任に當るを得ざるなり、司牧となる者は山海萬里の地に派遣せらるゝも、尊敬、服従の道によりて、中央教會に在る首領に附屬しつゝあるものなり、司牧の下に幾多の法教師あり、其權下に手となり口となりて言動す、國により法教師の下に尙傳導士なる者ありて、之を補翼す、此の如き階級方道によりて教民の最も微なる者まで到達するに至るなり、一致は同教會存立の一大要素、此一致の上に基立して以て其羽翼を宇内に伸張し、今や東西南北、如何なる邦國に到るも、同教會の設わらざるはなし、到る處に存在して、到る處に同一なるは、洵に偉觀なりとす、諸を大樹に譬ふるを得、根は基督、幹はペトロ以來二百六十二代に亘る歴代の

相續者(教皇)、司牧、法教師は其條枝、而して教民は則ち是れ其葉となり、花となり、實
 となるものなり、若し夫れ全教會に通ずる同一の信仰、全教民を連結する一貫の愛徳に至
 りては、根幹條枝を循環する津々たる液汁と見て可なり、同教會は世界到る處同一の事業
 に従事す、乃ち偏なく黨なく萬民に福音の道を告げ、苦楚艱險を嘗むる者を慰撫扶助し、貧
 窮微賤の者に同情を寄せ、不幸薄命の者の爲に萬斛の涙を漉ぎ、之と同時に世の學者に反
 抗して、眞誠の學問は決して信仰と衝突せざるを辨明し、又凡ての道德的、社會的大問題
 の明解は皆其教に在りと公言しつゝあるものなり。

東洋離教及其教會—通稱希臘教會若くは正教會と云ふ、元は加特力教會と異なりたるもの
 にあらず、又加特力教會の外に別個の教會として創立せられたるものにもあらず、蓋し一千
 年の間は二教會相分立し居たるにあらざるなり、彼の希臘教會と稱したるものは、加特力教
 會の東洋に於ける一部分にありたり、其首領なる者も他の司牧と同じく中央教會首領に隸
 屬して、同首領より裁定認可を受け、設合同首領より派遣せられざる者ありとするも、同
 首領より授任せられざる者は一人もなかりき、蓋し此の如くならざるときは、教會の一致
 は須臾も繼續するを得ざりけれむなり、然るに降て一千零五十四年に至り、コンスタンチ
 ノブル教會の首領は中央教會首領の權内を脱し、東洋諸國に於て中央教會首領と同一の尊

敬を得、同一の權利を逞うせんが爲に、公然茲に其獨立を宣言したるより、初めて東西兩
 教會相分立するに至りたるものなり、此時東西兩教民間の競争軋轢は一層兩教會の分立を
 易からしめたり、且一方よりすれば希臘教民は宗教上の知識尙未だ淺く、加ふるに國家的
 觀念(敢て虚傲、嫉忌とは言はず)に鼓動せられたるが爲め、其僭越を義にし、其分立を義
 にする口實多く見出されたり、而して他の一方よりは從來の拜禮、習慣、式例等を毫末も變
 更せざりしを以て、多くの信徒は其果して分立したるやを知る能はざりき、今日に至りて
 も之を知らざる信徒往々之あるを見ても知る可きなり、當時コンスタンチノブルは東洋の
 首都なりしが故に、同都の教會は勿論他の東洋諸教會の上に嶄然頭角を抜きたり、特に皇
 帝其傍に在りて之を保護したるが爲め、同教會の首領は一層其權勢を逞うするを得たり、是
 を以て他の東洋諸教會の首領も、皇帝の威力を憚りつゝ、首都教會の首領と共に中央教會
 首領の權内を離れて、爾來東洋教會を羅馬加特力教會と全然分立せしむるに至りたるもの
 は、乃ち是れ吾人の東洋離教會と稱し、自身彼等の希臘教會若くは正教會と稱する所のも
 のなり、コンスタンチノブル首都の存立したる間は、他の東洋諸教會は表面上皇帝の威權
 の下に服従したれども、其後土耳其人に陥落せられたるに當り、忽ち首領を代へて土耳其
 政府の保護の下に立つに至りたり、爾來土耳其政府の劍は東洋諸教會を統一し、又其教民

をも統一する一大勢力となりたり、然るに東洋諸國が相分れて各々獨立するに及び、此等諸國の教會も亦隨て獨立の地歩を占むるに至れりしが、首領の信徒に對する權利は非常に減少するに及び、蓋し此等諸教會は今後永く繼續することを得ざるべし。

若し夫れ露西亞に至りては、始めコンスタンチノブルより來れる宣教師より基督教を受けたるが故に、爾來兩國の交情頗る濃厚、隨て兩國教會の交渉も親密なりしかと、コンスタンチノブル教會が中央教會と分立するに當りて、無論コンスタンチノブル教會に附隨したり、故に同國教會も漸次離教に陥るに至りたるは瞭かなり、夫より皇帝の政略も之に加はり、宗教は國を治むるに一大勢力となるものなるを看取し、之を利用せんが爲に、國內に一の教會を新設し、之を以て民に奉教尊王の道を教へしめたり、而して皇帝の方よりは威力を以て信仰の一致と教會の制度とを保持することを力めたり、去れど露西亞に於ては教會と國家とは、二者須臾も相離る可からざるものにして、皇帝は教會を保護すと云ふ口實の下に、巧に其政略を行ひつゝあるものなり、退て同教會の方面より觀察するに、國家の元首兼教會の首領とも稱すべき皇帝の下に、威力の司配を受けつゝ、烏合の一致をなし居れども、種々異様の元素を以て成立つものなるが故に、早晚乖離分裂して、遂に渾沌無政の非運に遭遇すべき事、知者を待たずして知る可きなり。

余は東洋の離教會に就き、既に一書を著せり、題して、『希露離教論』と云ふ、同書中にはコンスタンチノブル教會を始め、露西亞教會に至るまで、其加特力教會と分離獨立するが爲に提供したる理由なるものは、往々皆取るに足らざる口實、見るに足らざる捏造説のみにして、重きを置く可き宗教上の理由の如きは絲毫もあらざる事を證明したり、蓋し東洋離教會は如何に其分離の原因を義にせんと力むるも、到底明者を欺く能はざる事、又其分離したる眞誠の原因なるものは、全く個人的利害、國家的觀念、政治的策畧に外ならざる事歴々指摘し得るなり、『希露離教論』は逐一之を指摘したる書なれど、余は今此事に就て詳論するの要を見ずと思考す。

波羅士特教
及其教會

波羅士特教及其教會 世人之を新教と稱す、加特力教會より破門せられたるものなり、當時歐洲諸國は、露西亞を除くの外、孰れも皆加特力教國にして、君民共に加特力教者たり、故に各國皆加特力教主義によりて成立統治せられ、同主義は各國の承認採用する所となり、歐洲諸國に取りては實に同教以前に開見したることなき國際法となりたり、事体此の如し、故に歐洲諸國は各々相獨立しつゝも、相互の間に同一の大法共通一貫したるが爲め、宛も聯邦主義を執りたるもの、如く思はれたり、同一の大法とは則ち基督教の十誠を取つて直に之を國際法に應用したるものにして、要は『人を殺す勿れ』、『偷盜する勿れ』、『虚言を

吐く勿れ』等の誠命に外ならざりき、此の如き誠命の下に、聯邦主義は立派に行はれ、安然に保せられて、直接教會の裁判權に係りたり、蓋し教會は基督教の信仰と誠律との擁護者にして且其解釋者たれとなり。

歐洲當時の國狀實に此の如くなりしを以て、世人の稱する所の宗教改革なるものは、其實宗教謀反にてありたり、但此時は政教一致なりしが爲め、直接教會の權利に反抗して起りたる運動も、勢ひ忽ち歐洲全社會に非常なる影響を及ぼしたるものなり、此時の謀反即ち世人の所謂宗教改革が、中世の史上に特筆大書せらるべき一大事變となりたるも、畢竟此が爲なり、若し當時の國狀にして政教分立の状態なりせば、此事變恐くは一小部分に止まりて、世人の注意を惹起すること此の如く甚しからざりしならん。

此謀反の巨魁世人の所謂宗教改革者は今や日本人民の普く知る所となれり、故に余は其詳細なる歴史(傳記)を綴らざるべし、今單に一言を費さんには、彼れルーテルは加特力教に教育せられたる者にして、同教會の司祭且行者にてありたり、彼れの反抗運動を企てたるは、當時教會にも社會にも幾多の弊害ありしと云ふを以てなり、然れども是れ無論口實なり、人間社會に於ては何れの時か弊害なからざらん、之を口實として己れの惡逆を包むが如きは卑劣の所爲のみ、勿論當時弊害ありしには相違なし、而かも何れの時代よりも多くの弊害

ありしならん、何となれを歴史に據りて考ふるに、當時心ある人々は多く改革刷新の必要を叫びたれとなり、故に改革刷新は早晩行はれざるべからざりき、彼れルーテルは乃ち之を機會となして起りたるが故に、其平民的の辨、其自由呼ぶりの聲は、如何に利己的の卑心より出でたりとするも、歐洲の天地には忽ち霹靂の一聲と響き、山河爲に震動するに至りたり、其結果より視察するときは、一朝にして歐洲全土を燒盡したる一大火害に比するを得べし、去れを彼れルーテルを目して真正改革者の首領にして、全く當時の弊害を矯正するの目的を以て奮起したりと思惟するが如きは、當時の國狀と實際の真相とを知らざる者の議論なり、彼れの初めて起りて羅馬教皇に反抗の聲を叫びたるや、改革矯正とは其夢寐にも想像せざりし所なり、其證據は彼れ先づ第一に大過大罪に陥りたるを見て知る可きなり、彼れの過罪は其矯正すべき弊害よりも多大なりしなり、真正の改革者なるものは、基督の如く一點間然する所なき人物ならざる可からず、少くとも世の所謂正人君子たらざる可からず、彼れルーテルの如く己れを矯正せずして、單に人のみを矯正せんと欲す、嗚呼亦艱ひ哉、然らば何故彼は改革者と呼ばれたるか、他莫し、有名なる當時の文豪エラスムスの語りたるが如く、彼は火を受くべき堆薪に第一の導火線となりたれとなり、狀勢此の如くなりしを以て、彼は忽ち四方より黨與を糾合するを得たり、之が應援をなす者は上下凡ての階級に

ありたり、君王も之を助け、臣民も之に應じたり、壓制殘逆等の弊害に反抗する自由の叫び聲は、何れの地何れの時に於ても多くの響應者を得るものなるを知らむ、彼が當時の君民朝野に親迎せられたるもの、毫も奇しむに足らざるなり、勿論當時改革の必要を唱道して、之が實行を希望せる善人の中にも、之に左袒したる者なきにしもあらざれども、往々は皆福音の道を完全に遵奉するを以て、堪へ忍れざる重荷の如く思惟したる徒輩のみ、此等徒輩の爲には、ルーテルの謀反は千歳一遇たりしなり、彼等がルーテルと共に奮然立つて反抗運動に奔走したるものは、爾來尙一層熱信なる基督教徒たるが爲にもあらざれど、尙一層國法に忠實なる臣民となるが爲にもあらずして、其實は尙一層自由我儘の民たらんが爲にてありたるなり、彼等の羈絆桎梏は教誡と國律とにてありたり、彼等は一日も早く此羈絆桎梏の下を離脱せんことを夢みつゝありたり、恰も好し彼れルーテルは之が率先者となりたり、彼等乃ち機乗すべしとなしたるものなり、豈他あらんや、世人は之を是れ顧みず、漫にルーテルの改革に快哉を叫ぶが如きは、思はざるの甚しきなり、眼あり識あるの人物はルーテルの口實に欺かれて直に改革者と叫ぶが如き愚はなざるものなり、日本の人士茲に省慮せずして可ならんや。

之を要するに、ルーテルは改革者にはあらざるなり、脱走者なり、排撃者なり、破却者なり

り、彼れの第一に排斥離脱したるは總ての教權是なり、彼は之に代ふるに『自己』を以てしたり、故に信仰の裁判官は自己なりと公言して憚らざりしなり、即ち彼は自ら以て基督教の絶体的解釋者となし、之が採否取捨全く己に在りとなし、隨て其信する所、其行ふ所の裁判は皆『自己』の權内に在りとなしたるものなり、世人は多く之を見て人知を發達せしめたりと云ふ、或人の如きは之を稱して自由の發展、人文の進歩に一大功勞ありたりと云ふ、吾人は其眞偽を知らず、又此の如き事は吾人の茲に論すべき所にあらず、但だ茲に争ふ可からざる事實として見る可きは、彼れが萬事を自己の研究裁斷に歸したる事はなり、人は之を『自由研究』と云ふ、是れ實にプロテスタン教の基礎的主義にして、此新主義の主唱者は彼れルーテルなり。

然りと雖ルーテルが此の如き新主義を發明して、世に一新教會若くは新教法を創設したりと思ふは誤なり、今日世人の新教と稱し、新教會と稱するものを以て全くルーテルの宗教、ルーテルの教會と見做すが如きは、其真相を知らざる者の言なり、勿論今日にても『ルテリアン』なる者はあり、然れどもルーテルと全く其意見を同する者に至つては、世界に一人もあらざるなり、眞個にルーテルの創設したる所ものは、宗教上の各インディビデュアル自主義なり、是れ實にルーテルの自己主義より出で來れる論理的結論とも謂ふ可し、蓋し勢ひ茲に

到らざる可からざれとなり、此主義を前提とするときは、必ず宗教問題に就き十人十色の結果を來さざる可からず、論理上止むを得ざる勢なり、是を以て實際に於ても自稱改革者の間に異論百出、是非紛々の現象は、ルーテル生存の當時に在りて早や既に之を見るを得たるなり、ルーテル自らも其黨與と意見を異にして相合ふ能はざりしなり、爾來今日に至るまで、紛々藉々、一は一非の議論は、須臾も底止せず、國により處によりては年々新稱の教の生れ出でざることなし、甚しきに至ては毎週産出するを見るに至る所あり、其教の千宗萬派に岐れ行く所以のもの、毫も怪むに足らざるなり、日本に於ては未だ此の如く甚しき現象を見ずと雖、之が類例に乏しとは謂ふべからず、今や或るプロテスタント教徒の如きは、終焉一致出來難きを看取して、信條に就ての議論は一切之を省き、單に聖書中より高崇なる真理、有益なる訓誡と認むるもののみを採用し、之を以て其文辭を潤色し、之を以て其説教を裝飾する等に止まり、此が爲に教外者の上に稍々勢力あるを以て得々満足す、其實行に至りても、聖書中より二三の徳行を選び、二三の事業を採りて、少しく之が實踐躬行を力め、此が爲に他人の眼に尊重せらる可き正人君子と見らるゝを以て足れりとす、去れを彼等の稱して以て教會と云ふものは、同好同志の人々が學問、虔信、友誼等の目的を以て相集する全然人爲的團體にして、一定不變の信條あるにもあらざれを、必然當

行の義務あるにもあらざるが故に、其實教會の名を以て稱する能はざるものなり、是を以て彼等は最早一の宗教を有するものにあらず、宗教の何物かを有して、之を或る程度まで自他の爲に利用するに過ぎざるなり、此の如き事を以て、我等は議論せず、殆ど相一致すと言ふが如きは、識者の聞て噴飯する所なり、然れども此は現時最も勢力あるプロテスタントなりとす、其他の片々たるものに至つては、言語同斷なり、然れども是れ一小國の事に屬す、請ふ一般の歴史を繼續せん。

彼の反抗運動の初めて起れるは獨逸なり、自由の名の下に起りたるが故に、直に國內に反響し、其餘勢又忽ち國外に波及し、滔々たる勢を以てメネス、ダンマルク、スエド、英吉利、佛蘭西をも風靡するに至りたり、去れを之を十六世紀の大革命と言ふも誣ならじ、之が詳細を語るは固より歴史家の事、吾人の喋々する所にあらざれども、茲に注目すべきは世人多く此時の事を以て近世文明の出發點の如く見做す事是なり、此は大なる誤解にして、當時の歴史は全く之が反對を證するものなり、歐洲の文明は此革命の爲に大に遲滞せられ、少くも百年の遲滞を來したるは明白なる事實なり、(ジャンセンヌの獨逸史を看よ)、距今十年前、米國の一富豪百萬の金を懸けて、ジャンセンヌの語れる事實の虚なるを證明する者を募れども、今日に至るまで之に應ずる者一人もなし、故に吾人は之が證明者が出るま

では、ルーテルの近世文明の父にあらざるを斷言するものなり、改革者中名ある者はカル
ウヰン、ズウイングル、メランクトン、アコラム、パード等にして、孰れも皆「自由研究」を
以て主義としたるが故に、相互には毫も其意見合はざりし者なり。

英國に於ける
波教の状況

英國に於ける波教は、少しく之と起源を異にす、其始祖は尋常の人にてはなく、同國の王
にてありたり、ヘンリ第八世即是なり、王始めルーテルの異教を駁撃するが爲に一書を著
はし、大に之が排撃に盡したるが爲め、羅馬教皇レオ第十世より「信仰の擁護者」と云ふ榮
名を得たりしが、(今日の女皇も今仍之を有す)、幾許ならずして女色に溺れ、后の侍女を
娶らんと欲せしが、正當の后を廢して其嬪を立てるが如きは、基督教の許さざる所なるが故
に、羅馬教皇は其離婚の沙汰に接したるも、斷乎として之を許さず、飽までも教會の一夫
一婦の制、終身不離の契を擁護して曰く、臣民にして此教義を尊重すべくんば、國王たる
者は尙更然りとす、何となれん王の一舉一動は皆是れ臣民の活ける標本鑑となるべきも
のなれんなり云々と、王之を聞て憤然として怒り、國內に令して加特力教會を離脱するを
命じ、同教會の信條誡律の中より己に都合好き箇條のみを抜て、茲に一のアングリカン教會
を立てたり、稱して之を「立教會」と云へり、而して王自ら之が首領となりたり、即ち自ら教
權をも握るに至りたるなり、國內に若し之が教權を承認せざる者あるときは、其の誰たる

に係らず、直に之を斷頭場に送りたり、同王及び其後嗣によりて、加特力教の宣言は堅く
禁せられ、若し其禁を犯す者あれば、死罪若くは財産の沒收を以て之を罰したり、嗚呼是
れ實に殘忍酷薄の處分にあらずや、同國の史家記者にして、憤然語氣を荒立て、羅馬教
皇及び加特力教徒の壓制殘逆等を語る者あるは、自國當時の歴史を忘れたる者と謂ふ可き
なり、悲む可きは此の如き徒の手に成りたる歴史が翻譯せられて、他國の教科書となり居
る事なり、眞理を愛する日本人たる者は少しく茲に注意すべきなり、事實を誤まりて人を
訴ふるが如き事あるときは、適々以て識者の嘲笑を招くなり、同教は此の如く自國に立て
られたるが故に、立教若くは「アングリカニスム」と稱せられ、三十九箇條を以て成立す、是
れ即ち立教會の信條たるなり、此信條を教ふるが爲には、職員を立て、之に爵祿を與ふ、蓋
し此等の事は王權の容易に出來得る所なり、然れども一千年來の基督教民に、此三十九箇
條の信條のみが眞正なる基督の教なりと信せしむるに至つては、全く不能の事に屬するも
のなり、或る一部の片々たる人民には或は出來得べきも、國民一般の心に此信仰を吹込む
ことは斷じて能はざる所なり、是を以て經る未だ幾許ならずして忽ち同國に二個の教を生
ずるに至りたり、一は公立教(官立の教)にして政府の保護の下に教へられ、一は私立教に
して各自個々の見解を以て教へらる、單に外容外觀のみを視るときは、アングリカニスム

は他の波教よりも加教に一層接近酷肖す、何となれば加教會の制度(階級、品秩、管理等)を全く保有すれどなり、然れども今其實際の真相を観察するときは、是れ亦波教の支流にして、其性毫も之と異ならず、王權は國教として之を維持規畫したるが故に、兎に角一の教會の觀をなし來れども、其精神は早や既に遠く消失し去りて、今や單だ死せる軀軀、冷たき外容のみとなりたり、一言以て之を蔽へて、曰く虚禮のみ、虚儀のみ、豈他あらんや、他の波教に於けるが如く、『自由研究』其主義となりて之を司配するが故に、早晚分裂頹敗の非運を見るに至らんか。

獨逸に於ける波教の狀態

獨逸に於ても或る波教の國王、就中プロシア國王の如き、國教を立て、王權を以て民に一定の信仰を興へんと力めたれども、一も茲に成效する者なかりき、蓋し論理は王權よりも強きものなり、波教の自由主義、個人主義が一たび人民の心に浸染したるときは、論理の勢は駸々として忽ち極端の結論に至らんとするものなり、王權亦之を奈何ともする能はず、波教に一の教權を置くが如きは、抑々其主義に反する所なり、自由研究主義は己れの上に教權を置くべき性質のものにあらざるなり、日本將來の爲に波教所謂新教を取つて以て國教となさんと欲する者あらざ、宜しく深く茲に注意すべきなり、勿論政府は一の教を採用する事、創立する事、又之を人民に強行する事は或は能せん、然れども總ての人民をして

キリスト教の二大區別

之に心服せしむることは、到底出來得べからざる所なり、人民の良心は直に飛び去り、逃げ去るべけれとなり、果して然りとせむ、新教を以て日本の國教となすが如きは、一の夢のみ。

此の如く、波教の支宗分派を一々捕捉して論ずるは、余の本志にあらず、區々たる教、片々たる教に就て喋々の言を費すが如きは、余り大人氣なき話なり、故に余は某國某土に於ける波教を一々研究するの煩勞を避け、波教と云ふ名の下には、世界各國に於ける千宗萬派を殘らず包含せしめて論せんと欲す、蓋し國により時によりて其名稱外觀等種々様々なりと雖、其内實を探るときは、皆是れ唯一の自由主義より生出したる論理的の結果に外ならざれど、一のプロテスタン教と云ふ名を以て、世界各國に散在する千差萬別の宗派を一打するも、其の孰れをも侮辱せざる事と思考すれどなり、彼等が高い教會と稱するも、低き教會と稱するも、又其中の教會と稱するも、畢竟皆是れ同じ父より産れ出でたる兄弟姉妹のみ、其本源皆同一なれどなり、余故に之を總稱して一波教と言はんと欲す、斯く論じ來るときは、世界に於ける基督教は大別して二となる、曰く加教、曰く波教。

今世界に於ける右二教の外觀を一見するときは、局外者に一種異様の感と與ふるものなり、局外者の多くは恐くは此現象を解釋する能はざるべし、否之が爲に嘖く者多く之あるべし、

何となれど加教と波教とは、二者均しく基督教と稱しながら、相互には吳越の觀を爲して相共に攻撃論難し、相共に競争軋轢して、須臾も休止せず、一時も合同する事なければなり、嗚呼此現象は抑々何に原因するや、余は先づ茲に兩者の間に一の區別を立て、一言せんと欲す。

加波二教不一致の原因

加教徒は常に防禦の地位に立ちて、波教徒を攻撃することは至つて稀なり、彼等の短所は實に茲に在るなり、彼等は進んで教敵と戦ふの勇氣なきもの、如し、若し加教徒に缺點ありとせむ、或はそれ此の如き事ならんか、且同教徒の戦ふに當りても、其教義と其良心は其口舌を司配して、決して虚言譏言等を吐くに至らしめず、教敵に對して議論するの際に、適々血熱し來りて意氣憤然たることありとするも、爲に人に對する尊敬を失するが如きは極めて少し、蓋し此點に就て過るときには、先づ第一教會の裁判によりて譴責せらるゝを以てなり、加特力教會は「其惡を惡んで其人を惡まず」と云ふ金言を言動の定規とす、此金言は同教會中最も眞理の爲に戦ひたる大人物聖オグスマヌスの口より出でたるものにして、爾來今日に至るまで同教徒の拳々服膺する格言金戒となり、故に此格言金戒を逸出することあるときは、愛徳を缺く罪なりとして痛く之を叱斥するものなり、余は漫に波教徒の心事を付度するものにあらずれども、詳に彼等言動の狀を察するときには、加特力教徒の如

き嚴格なる規定を有せざるもの、如し、非耶。

次に加教徒と波教徒の間には、全然宗教を以て目的とする事の外に、社會上、政治上、工業上、商業上に關する事多く之あり、此等の事柄に就ては兩教徒の一致合同すること宛も他教徒に於けると異ならず、蓋し此等の事柄は直接宗教の關する所にあらずれど、人の氣質、先入、教育、風俗、利害の觀念、國家的競争等によりて決するものなれどなり、故に余は此等の事に就ては辨せざるべし。

余の茲に語らんと欲する所は、全然宗教問題に關する事のみ、同問題に就て兩教徒の相合はざる所以のもの、今や之が解釋洵に易々たり、國土を異にする事、言語を別にする事、愛徳に缺くる事、友誼に乏しき事等は、無論兩教徒不一致の原因たるに相違なかるべし、其原因たるや遠因にして近因主因となるものにはあらずるなり、若しも此の如きもの、みなりとせむ、兩教徒の一致合同は容易に行はるべし、今や然らず、彼等兩教徒の一致合同を阻碍するもの、否全然之を絶体的不能に歸するものは、此の如き表面上の原因にはあらずして、深き内部の原因に屬するものなり、何ぞや、主義の相異なる事即是なり、兩教徒不一致の主因近因は則ち茲に在るなり。

然らば加教の主義は何邊に在るや曰く基督の教を有りの儘に受けて信奉するに在るなり、

加教主義即權利主義

詳言せむ、基督より教へられたる儘、傳へられたる儘、今日に至るまで毫末も變更改變することなく、釐絲も増減損益することなき基督教を信奉するに在るなり、何となれを變更損益せらるべきものは、人の説たるを表して神の教にはあらざるを證すれとなり、然らば此の如き教を認むるが爲には、何處に就て質すべき、加特力教の主義に據るときは、基督以來教統連綿として今日まで須臾も斷絶もたることなき活ける教會に就て質さるべからず、是故に人若し加教徒を捕へて、其何に基きて信仰するやと問ふときは、彼は同教の主義に據りて直に答て曰く、我は基督の爲に、教傳に基いて信するものなりと、人其信する所如何を問へむ、乃ち曰く我は基督より今日に至るまで、世界到る處に凡ての人々の信し來れる所のものを信すと、一議もなく研究せずして之を信するやと云へむ、否、信する前に先づ三事を研究す、曰く神果して存在するか、曰く神果して一の教會を創設したるか、曰く神の教へたる明瞭的確なる真理は果して何物なるや云々と、既に此三事を研究して明かに之を知了するに至りたるときは、同真理を教へたる基督の權利と、之を今日まで傳ふる教會の權利とによりて、直に之を信し、之に服するものなり、記して茲に到るときは、加教の主義は何ぞやと云ふに、一言以て之を蔽ふ可し、曰く權利主義……此主義によりて加教會の一致少くも教義に對する一致は最と立派に維持せらるゝものなり、何とな

れを教傳によりて基督の教を殘らず承認せざる者は、加教徒たるを得ざれとなり、加教徒の加教徒たる所以實に茲に在り。

然らむ則ち波教の主義は何ぞや、余は既に之を語れり、同教の主義は自由主義なり、基督より今日に至るまで教傳なるもの所在や否やは、同教徒の問ふ所にあらず、當初より信し來れる所、行ひ來れる所のものは何ぞやと云ふ事も、彼等の關する所にあらず、彼等は教傳をも放棄し、古來の信仰慣例をも放棄し、直に自ら聖書を取り、之を讀み、之を解し、之を採否する事皆一に『自己』に依る、是故に人若し同教徒に向つて其信する所、其行ふ所を問へむ、答て曰く我は我が真とする所を信じ、我が善とする所を行ふと、是れ蓋し論理なり、自由主義より出發するときは勢ひ此の如くならざるべからず、是を以て彼のルーテルは基督と自己との間に人間をも、天使をも、魔鬼をも、誰をも置かず、我直に飛んで基督を捉むと云ふ主義なり、中間の紹介者は彼れの爲に厄介物なり、焉ぞ之を承認せんや、其弟子は今日此の如き大膽を有せず、頗る軟化したるが如し、然れども宗教上の事を自由研究に歸す可しとは公言して憚らざるなり、此言や始祖ルーテルのに比すれば、其語氣大に平穩なるが如くなれども、尙未だ奇異の語調たるを免れざるなり、不幸にして此主義今の世に歡迎せられ、實に宗教界のみならず、政治界にも、學術界にも、殆ど凡ての社會に採用せら

るゝに至れるは、慟哭すべき現象と謂ふべきなり、今や此主義日本人の腦裡にも浸入し、若々奇怪なる現象を産み出さんとす、此趨勢を以て行かど、幾許ならずして我儘勝手なる新人民を出すに至るも測り難し、將來若し『我等は我等の誓約せざる法律には服従の義務なし』等と大聲絶叫する開化の民起るあらど、其罪無論波教の主義に嫁せざるべからず、吾人が同教の主義を危険なりと言ふは、蓋し此が爲なり。

斯の如く論じ來るときは、加教徒と波教徒の相合はざる所以は、彰々乎として瞭かなり、主義の異なる者如何にして一致するを得べき、是故に二者其一にして主義を改變せざる限は、兩教徒合同説は終焉行はるべきものにあらざるなり、設令今假りに加教徒が其主義を譲りて、波教徒と一致せんと欲するも、波教なるものは千宗萬派に岐れて、其説區々一定せざれど、其何れの教に於て一致す可きやを指示する事は極めて難かるべし、此點に就ては同教有名の神學者と雖、答ふるに困難を感ずる所なり、今又假りに一の教を提出して是れ真正の教なり、是れ基督の教なりと確保すとすも、固より同教には一定不變の信條なるものなければ、其何れの點に於て一致せしむべきやを指明するにも苦むなるべし、嗚呼波教なるものは、其主義によりて人を分岐せしむる而已ならず、其教をも分岐せしめて、到底満足ある一致を行はしめざるものなり、各自自由なる考を抱て、相互に一致せんと欲す、

加波二教信仰の異同

是れ猶ほ木に縁て魚を求むるが如く、盆を載て天を望むが如し、圓孔方木、吾固より其鉏鋤して入り難きを知るなり。

加教徒の信仰と波教徒の信仰の間に相似の點なしと謂ふにはあらず、理によりては寧ろ是非とも相似の點なかるべからざるなり、請ふ其理由を語らん、加教徒は基督の教を一も遺漏なく残らず保有すと公言す、又實際残らず保有しつゝあるなり、果して然りとせば、波教徒が基督の教の如何なる部分を採用すとすも、加教徒の保有する所の外に之を採用すること能はざる道理なり、是を以て其實際に於ても、教會の權利に就ての教義を除くの外、加教の教理の中、波教の何れかの宗派に承認せられざるもの一も之あらざるを見るなり、然らば則ち加教徒は少くとも波教派の何れにか一致合同し得べきが如く思はるゝなれど、仔細に之を檢覈するとき、此點に就ても兩教徒の一致し得べからざる理由を見るに難からざるなり、其故は何ぞや、加教徒と波教徒は設令教理其物を承認する點に於て相異なしとするも、之を承認する方道に於ては兩者大に相異なるを見るなり、何となれど加教徒は一たび理論によりて教會の誤る能はざるを認めたる上は、教傳によりて其信奉すべき教理を同教會より受けて、直に之を承認服膺するものなれども、彼の波教徒に至っては然らず、先づ第一教會を省き、次に其教傳をも省き、凡ての紹介者、相傳者を放棄して、直に聖書を手に取

りて、自ら之を研究し、自ら之を解釋し、斯くして其真と認め善と認めたる所を採用して、我は之を承認し、之を信奉すと公言す、然れども其承認信奉も何時まで繼續するやを知らず、自己の意見一變するときは又直に之を放棄抛擲して顧ざれとなり、此の如きの信仰は信仰にあらざるなり、信仰とは一の事柄を他人の權利若くは約言によりて真なり實なりと確認するの謂なり、自ら調へ自ら辨へて是れ真なり實なりと覺認するは識認と謂ふなり、識認は自覺なり、信仰は承服なり、二者の間に大なる區別あり、通俗の語を以て之を言へば、信すると知るとは大に異なり、前者は他人の權利に基き、後者は自己の理性に基き、彼の波教徒の如きは自由研究を以て知らんことを欲す、信せんことを欲するものにあらず、知りたるときは乃ち既に信するとは謂ふ能はざるなり、余故に曰く、波教徒には真成の信仰なし、識認のみ、自覺のみと、嗚呼彼等は日々信仰々々と喧叫す、口を開け乃ち信仰、筆を執れ即ち信仰、信仰の二字は須臾も彼等の筆舌を離れず、然れども其實は彼等毫も信仰を有せざるものなり、其所謂信仰なるものは前述の如く眞の信仰にはあらず、文典にも背ける信仰なり、能く言ふ者能く行はず、其餘りに叫ぶは、其無さを示すにあらずして何ぞや。

然れども彼等は答て曰ふ、吾人の信仰を指して識認と呼ぶも、自覺と呼ぶも、將た又個人

的の見解と呼ぶも、とは必ずしも吾人の關する所にあらず、但だ吾人は皆聖書を以て神の言なりと信するものなれど、少くも此點に就ては何れも皆同一の信仰を有せりと謂ふべし、去れを他の信仰箇條に就て一致合同し難しとするも、此大なる一點に就ては疑なく一致合同し得べき道理なりと、嗚呼彼等も亦理屈を好む徒なる哉、彼等は此一點を基礎として諸派の一致策を計りたることあり、而かも日本に於てありたり、距今十五六年前と思考す、同教徒總會のとき、明治會堂に相集り、盛んに一致合同策を畫したり、吾人も亦傍觀者の列に居りたり、場の光景頗る茶番的なりき、異論百出、是非紛然、或は天主教をも入るべしと云ひ、或は主義の異なるもの一致すべき謂はれなしと云ひ、議論囂々、駁論四出、遂に其立派なる目的を達することを得ざりき、人々之を見て如何なる觀念を懷きたるやは知らざれども、吾人は頗る奇異の感に打たれたり、吾人は先づ此光景に接して、先入習慣の勢と云ふものは大なりと云ふを驗したり、彼等波教徒より觀れど、『吾人は聖書を以て神の言なりと信す』と云ふ提案は立派なる名案なるべし、少くとも自然の事なるべし、然れども吾人の見を以てせむ、是れ實に譯の分らぬ話なり、彼等は如何にして聖書を神言と信することを得るや、吾人は如何にしても之を解する能はず、請ひ問ふ、誰か此事を確保したるや、同教の開祖たるルーテルより聖書記載せられたる時代(吾主基督の時代とは言はず)に

至るまで、其間幾ど一千五百年あり、去れルルーテルなる者は聖書の記者をも見たるにあらざれど、直接記者の手より其聖書を受け得たるにもあらざるや明けし、又基督及び其使徒の教へたる所と聖書に記されたる所とを比較して、同書は疑なく基督及び其使徒の教なりと明言することを得ざりしも亦疎かなり、一千五百年後に生れ出でたる者が、如何にして此書は使徒の書なり、同書には神の言載せられありと知ることを得るや、蓋し之を知らんが爲には、同書を使徒より受け得たる代々の相續者に依頼せざるべからず、吾人の所謂教傳に依頼せざるべからざるなり、此の如き相續者なきときは、一千五百年のルーテルは聖書を見ることも得ざるなり、況んや之を手にするをや、然れど其相傳者は何者ぞ、他莫し、加特力教會なり、同教會は連綿たる教統を遡て使徒、基督まで到達するものなり、波教の生れざる以前、上下一千五百年の間聖書を傳へ來りたる者は乃ち同教會なり、今日波教徒は聖書々々と叫べども、其聖書を授けたる先生を忘却するは否攻難するは果して何たる心ぞや、波教徒は其開祖ルーテルより基督に至る上下一千五百年間に加教會を認めずんば、系統なき私生兒たらざるべからず、亦焉ど聖書々々と我物顔に誇稱するの權利あらんや、茲に到つて吾人の解釋する能はざる事を發表せん、彼れ波教徒は加教會が聖書を使徒より受け、是れ其手に成りたる書なり、是れ神の言を記したる書なりと言ふときは、仰せ御尤なり

として其言を信じ、其書を打戴さつ、如何さま、神の言を戴せたる聖書なりと信用するに係はらず、同じ加教會が聖書中に記載せられある教理を掲げて、是れ神の言なり、是れ我の使徒より聞得きたる所なり、是れ我の今日まで行ひ來りたる所なりと、日々反覆しつゝあるに、同じ波教徒は此言を斷然放棄して願ざるは、抑々何たる矛盾ぞや、何たる我儘ぞや、要するに波教徒は聖書を受くるときは加教會を認め、其他の點に就ては加教會を無せんと欲す、教會と教傳とを放棄して願されをなり、是れ實に前後撞着の事にして、吾人の解釋し得ざる所實に茲にあり、余が先きに譯の分らぬ話と言ひたるは、決して誣言にあらざるなり。

然るに此點に就き彼等波教徒は答て曰く、加教會は聖書を傳授したりと雖、其意を曲解したり、誤解したり、聖書中になき事柄を教へたり、我等が奮然駁起して之が矯正に従事し、基督教をして當初三世紀間の純潔なる教に復せんことを欲するは、蓋し此か爲なり云々、茲に當初三世紀間を云々したるは、同教徒の説に據れど、爾來一千二百年間（一説には一千年間とも云ふ）基督教會は誤謬の暗界に失墜し、五里霧中に彷徨して、基督の正意を解する能はざりさぞ云へむなり、嗚呼果して此あるか、余は直に之に答へんと欲す、曰く若し果して此の如くなりせば、（基督教會が斯く永く誤謬に陥り居たりとせば）、所謂聖

書なるものも亦信用するに足らざるの書なり、何となれど同書中には明に基督の言を載せて曰く『我は日夕爾等(使徒)と共に在り』と、此は常に當初三世紀若くは五世紀間を指したるにあらざるべきは、左の言に徴して明なり、曰く『世の終りまで至らん』と、又曰く『地獄の門我教會に勝つ能はず』と、若夫れ誤謬が斯くも長さ歲月の間其教會を支配したりとせむ、彼の基督なる者は畢竟食言者なりと謂ふべし、隨て此の如き食言者の神にあらざるべきや言を待たず、若し果し神にあらざとせむ、其教を云々するには及むざるなり、真正なる基督教、純潔なる基督教の如き、初めより無き筈なり、食言者の教なれどなり、此の如くんを其教の爲に鞠躬盡瘁する者程愚なるはなきなり、食言者の爲に勞する事なれどなり、嗚呼今日の波教徒の中に基督を神と見做さず、單に一の學者若くは豪傑となし、隨て其教をも神の教と見做さず、單に世界を感化せんと欲したる人間的企圖の如く論ずる者あるは、職として皆此等の事に因由するなり、然れども波教徒は、其主義(矯正改革の主義)によるときは、如何にして之を排斥するを得べきや、吾人其意を知る能はざるなり。請ふ尙語を繼で辨明せん、波教徒の言に據るに、教會は一千二百年間誤謬の暗界に失墜し居たりと云へど、當初三百年間は真理の明界に在りたるや言を待たず、果して然りとせむ、當初三世紀間は教會の教ふる所、使徒の記載したる聖書と一致符合したるや必せり、然

らと則ち教會の誤謬中に陥りて、聖書と異なりたる事を教へ初めたるは三世紀以後の事と謂はざるべからず、請ひ問ふ、其時教會は使徒の記載したる聖書を如何にしたるや、之に反對なる異説を教へて天下後世の叱責を避くるには、道唯だ一のみ、聖書を滅却し、之に就て一言をも挾むを得ざるに至らしめ、已も亦沈黙して之を語らざる事即是なり、然らむ則ち教會は此事を企圖したるや、否々、教會は依然聖書を衆人稠座の前に公誦し、教民諸子の前に解釋したる事、毫も當初三世紀間に於けると異ならざるなり、公衆の普く知る如く、當初第五世紀間には學徳を以て一世に鳴りたる偉大なる人物陸續踵を接して教會内に輩出したり、例せばアマナジウス、アンブロジウス、オグスタヌス、ハジリウス、ヒエロニムス、ヒラリウス、キリグストムス等其他枚擧に遑あらず、而して此等の大人物は日夕聖書就中新約書を説明して之を教民に傳へたり、其遺書は今仍存すれど、何時にても就て見るべきなり、否今仍世界到る處に誦讀せられ、傳説せられつゝあるを以て、之を聞見することは極めて易々たるなり、茲に於て乎余は問はんとす、教會にして若し聖書の意を曲解したりとせむ、何時又如何にして之を曲解したるや、願はくは其證據を示されんことを、波教徒は之に答ふるに極めて困難なるべしと思ふ、何となれど教會の解説する所、右等大人物の遺書に就て仔細に之を檢するに、秋毫も使徒の教へたる所と異ならざら

心なり、蓋し教會の第一に銳意盡瘁したる所は、使徒の記載したる聖書を確認して、精密に之が目錄を編成したる事即是なり、何と云ふに聖書は實に教會の寶なれをなり、當時編成したる目錄は今仍存して、凡ての聖書の卷頭に置かる、就て之を見るに其中より一書も缺本したるものなし、目錄編成の後教會の最も注意着目したる所は、聖書中に毫末も改變を加へざる事是なり、之を増減し、之を損益したる者あるときは、直に之を教會より破門するに至れるを見む、其如何程茲に留意したるかを知るべきなり、若しも教會の意聖書に相反したる事を教ふるに在りてせば、必ずや其所爲此の如くならざるべし、教會の聖書保存に於ける行動を見るときは、其之に反對なる教を布くの意にあらざることを日星炳焉たり、教會が長き歲月の間、活版事業の未だ開けざるが爲に、修院に於て絶らず聖書を寫さしめ、一書をも多く世に出さんことを務めたるもの、豈是れ其意聖書に相反したることを教へんが爲なりと謂ふべけんや、教會如何に狂愚なりとするも、自ら其教の反證ともなるべき書冊の多々ならんことを務むるものならんや、一方に反對を教へて、一方に其教を反證する書を寫さしむ、是れ豈狂愚の至ならずや、然れども教會の斯く絶らず寫本に従事したるは、乃ち是れ聖書を改變するの意なりと謂ふべきや、或は設令其意なくも、寫本の際知らず識らず取捨増減の事行はれたりと謂ふべきや、之に答ふるは寧ろ波教學者の業なり、彼等は教會の誤謬虛

偽を訴へんが爲に、上は四世紀より下は十五世紀に至るまでの寫本を殘らず蒐集研鑽したり、嘗に古今時を異にせる寫本のみならず、東西異域、山河懸絶の地にまで至りて、有ると有ふる寫本を殘らず集合比較したり、去れを四世紀時代に寫されたる希臘の寫本もあれど、十世紀時代に寫されたる他國の寫本もありて、種々様々、其數實に千を以て數ふるに至れり、此等古今東西の寫本を悉く一場に相集めて、句々相比し、字々相較し、周到綿密に研究調査したるに、不思議にも教理上相異なる所は一箇條もなく、古今東西全く符節を合せたるが如くなりき、偶一字一書の増減ありたりとするも、大体の意に於ては絲毫も闕せず、同一の教義、同一の眞理は何れの寫本にも炳焉日星の如く輝けり、時に或は一句程の脱陥ありしとするも(此は極めて稀なり)、他に明に記載されあるものと較するときは、之が證明の必要なきに至るなり、是を以て波教徒の此點に就て加教會を攻撃したる事は、毫も同教會に損害を加へざる而已ならず、寧ろ却て同教會の聖書保存に銳意盡瘁したる忠實を一層明かに世に發表したるなり、嗚呼加教會は斯く長日月の間、斯く純全完潔に聖書を保有し來れるは驚く可しと云ふ事は、彼等此點に對する研究より明確精密に證明せられたり、此證明をして一層完全ならしめ、一層通俗ならしめて、天下萬衆に示したる者は、是れ亦波教徒にして、彼等は十九世紀に至り、畢生の知慮を傾けて、聖書を新たに翻譯したり、此翻

譯たるや古來の原寫本を周到綿密に参照比較したる上行はれたるものにして、其精密驚く可く、其明確感するに餘あり、眞個に是れ斯道の蘊奥を極め、巧妙を極めたるものと謂ふべし、歴史、哲學、評論等皆茲に相集まりて、學術の光明赫然として備はれり、蓋し是より完作はなかるべしと信ず、他の一方に於て加教會は爾來何事をなしたるや、同教會の行動は毫も當初に異ならず、無論活版事業開けたるが故に、昔の如く寫本に従事するが如き事はなされども、其刊書と譯書に就て銳意注目しつゝあることは、昔より一層周密を加ふと云ふも謬ならず、其刊書譯書の中に一字一句も古來の傳説に相反する意なからしめんことを務む、是を以て加教會自らはルーテル以前より羅甸の舊譯書を手にし、今仍之を保持して須臾も其手を離さず、蓋し之を以て新譯書の誤謬を照らさんとなり、同書は二世紀に當り、希臘原本に基で翻譯せられ、五世紀に至り聖ヒエロニムスを以て再校せられたるものなり、教會は深く之を珍重し、忠實に之を寶藏して、文法の誤謬にも手を入れず、蓋し一層原本の意に接近すと認めれをなり、些少の相違なきにしもあらざるも、其譯最も使徒の時代に接近し、殆ど原本と同一の權利を有するが故に、茲にも亦敢て手を觸れず、蓋し原本と譯書と兩々相参照するときは、相待ち、相扶け、其相違までも教理上毫も改變はなかりきと云ふ證據となれたるなり、讀者若し意あらむ、日本に於ても之を較する

を得べし、波教徒の手によりて新約書の翻譯は前記英譯書に基て行はれたり、加教徒の手によりては兎に角四福音書丈け舊羅甸譯書に基て翻譯せられあり、兩々比して参照する亦可ならずや。

記して茲に到れを、教會が聖書の意を曲解して信徒を欺きたりと云ふが如き事は、詳論せずして眞偽自ら瞭かなり、教を曲げ人を欺かんと欲する者、誰か此の如く爲さんや、教會の昔に於て爲し、今に於て爲しつゝある所は、教を曲げ人を欺く道と全く相反する所爲なり、今や一事を斯く反覆絮説して辨明するの要を見ず、請ふ左の一言を以て此問題の終局を結むん、抑々教會は今日に至るまで聖書に如何なる解説を加へたるや、同教會の教ふる所は公明正大なり、光風晴月なり、隱秘に爲る所一もなく、秘密に行ふ所一もなし、其布教や公然なり、其説教や明快なり、今日教ふる所は千百年前より教へ來りたる所なり、而して其教へたる所は當初より皆書に記載せられたり、教會博士、聖人、神學者、雄辯家、及び其他種々の記者作家の遺書は汗牛充棟管ならず、同遺書中には聖書の句、聖書の文處々方々に引證せられ、取つて之を蒐集せむ、聖書を失ふも、聖書を作ることを得るなり、蓋し引證の斯くまで過多なるを謂ふなり、若夫れ教會が初より聖書の意を如何に解釋したるやを知らんと欲せむ、事易々たり、此等學聖の遺書を一見するに在り、之を見るの法亦極め

て易事なり、教會學者の遺書には其卷末に一々目録ありて、本文の記事引證等逐一略記せらる、同目録を一瞥するときは、如何なる處に、如何なる意味にて解説せられあるかを知るに足るなり、是れ豈難き事業ならんや、目を注げと乃ち足る、斯の如く代々の學者の遺書を涉獵するときは、一の長大なる教傳を得べし、此教傳を遡究して、時代々々に於て一々比較参照せよ、加教會が聖書の意を解釋する、古來果して如何なりしや一目瞭然たらん、此事を見心管に聖書解説に於ける教會の意を知るに足るのみならず、加教會は古來如何なる問題を如何なる意味にて論じ來りたるやをも知るを得るが故に、一目して萬事を學ぶの便あると同時に、教會の世の學問に疎ならざりし證を得るの益あるなり、世の論者往々言ふあり、曰く基督教には深遠の哲學なしと、又曰く加教會には偉大なる學者なしと、余は此の如き公然の嘘に嗷々の辨を費すを欲せず、請ふ前記遺書の卷末を一瞥せよ、答は其中に在るなり。今又此等個人的の學者より眼を轉じて、教會其物の公然たる教義所謂教會の公會議を以て議決する所の教義に就て之を檢するに、其中にも基督及び使徒の教に反對撞突する事は一も認むる能はずして、寧ろ此點に就ては教會の用意極めて周到なるを見るならん、其受托せられたる教理は秋毫も損益せず、其傳授せられたる真理は一も改變せず、基督の口より出でたる純潔なる教訓には人間的な新説を混入せざらんが爲め、注意に注意を加へて用心警護し

つゝあるものは則ち加教會なり、去れど教會創立の當時より一千八百九十有餘年後の今日に至るまで、世の主義、人の言語、天下の形勢事局等千變萬化したるにも係らず、教會のみは其中に立つて依然同一の道を歩し、萬邦萬代の人々に、必要缺く可からざる萬世不易の大真理を教へ來りたるものなり、時運の變、桑海の變ある世の中に此奇觀を見る、豈亦偉ならずや、此點より觀察するときは、教會は眞個に萬古不磨の天理の權化と謂ふべきなり、天意視ぬす、教會によりて視るを得るなり、天意の世に發顯したるものと言ふ、豈輕ならんや、物質界に於ても天地の大法、萬物の法則は萬古同一、其秩序、其和平、其偉觀等、吾人感驚の外なし、精神界に於ても亦然り、教會の世に在る、乃ち是れ精神界の偉觀にあらざるや、其教義、其制度、其法規等東西一貫、萬古同一なり、蓋し此統一的偉觀は加教會の因つて以て屹立する一大主義の論理的結果なり、由來加教會は權利主義の上に基立せり、當初に於て同教會は何をも發見せず、物皆之を基督より受け得たり、爾來今日に至るまで亦何をも創作せず、蓋し創作するの權なきものなり、但だ之を傳ふるのみ、同教會の教ふるや自己の權利を以てするにあらず、連綿たる教傳中に生存活動せる基督及び使徒の權利に基て之を教ふるなり、創立の當時より今日に至るまで、基督及び使徒の外他の權利、他の出發點となりたるものありたるにあらず、其一舉一動皆此に於てし、此基本の外には何事をも命じ

たることなし、若し一たびにても此道を逸したるときは、直に人に教へ、人に命ずるの権利を失ふものなり、蓋し神と云ふ一大本尊に基かざるときは、如何なる人間も他人に其意其説を命ずるの權なきものなれどなり。

記して茲に到れど、東洋君子國の組織と加教會の制度の相似たる、愈益明瞭なる事實となり、吾人は常に日本國体の鞏固なるを感嘆するものなり、故に之に酷似する加教會の制度にも感驚を同らせざるべからざるなり、日本國體と同教會の教礎と何を其れ此の如く相似たるや、出發點となる基礎に於て相似たるときは、其結果に於ても亦相酷似するは自然の數なり、宜なる哉建國以來皇統連綿として二千五百五十七年間の統一的國家を日本帝國に於て見るが如く、創立以來教統連綿として一千八百九十七年間の統一的教會を加教會に於て見るを得るや、主義同じけれど、結論も亦同じ、原因同じけれど、其結果も亦同じき道理、誰か之を否定せんや、否定せんと欲するも、實際の眞相此の如く歴々たるを奈何せん、日本が乃ち是れ當眼の事實なり、古來此國には國亂不軌屢起りたりと雖、一定不變の鞏固なる國体は秋毫も動搖せずして、今日にまで立派に特續したり、加教會も亦然り、時により國によりて異端邪説の其中より起りたることあれども、確立不動の教礎は此が爲に絲毫も動搖したることなし、世人は日本國の鞏固なるを見て、一種特別の國と言ふ、

日本國体と
加教會の
類似

然れども其何故に一種特別の國なるやを究めざるべからず、天下の事は偶然に行はるゝものにあらず、其治まる因あり、其亂る、亦因あり、吾人は日本國家統一の原因を以て、加教會統一の原因と異ならざるを認むるものなり、加教會統一の原因は何ぞや、余は既に語り、權利主義即是なり、即是れ波教の自由主義と全然反對なるものなり、今や自由主義は着々此國にも入り來れり、否駁々として其歩を進めつゝあり、而かも社會百般の事物の上には……嗚呼是れ快は快なりと雖、國家百年の計を畫する者は、茲に一考を要すべきなり、余は政治家にあらず、天下國家の事を私議するの權利なし、但だ加教會の主義と波教の主義を兩々相比して論究する事は、國家要路の人にも有益なる教訓を與ふるものと信するなり、將來權利主義が全く日本臣民の腦裡を脱して、自由主義之に代り、臣民の頭腦悉く此自由主義に熱し來りて、自由主義の腦充血を起すに至らば、噫嗟嗚呼三百五十年來波教界に行はれたる結果は、此東洋の美國にも行はれんかな、是れ亦論理なり、自由主義を出發點とするもの、何物か波教界と結果を同らせざるものあらんや。

然らば則ち波教界の結果(自由主義より來れる結果)は如何、彼のルーテルが教界の自由不羈を絶叫して、基督と自己の間に有權の相傳者一人をも承認せざりしや、彼れ自身直ち困

自由主義の
結果

難なる結果を食むに至れり、何となれを彼が他の人々を教へんと欲して、其言動の道を傳へんとするや、人々は皆同一の主義を以て之に答て曰く『我等も亦君の如く自由なり、不羈なり、獨立なり、我等も亦君の如く聖書を讀むことを知れり、何故君は聖書と我等の中間に立たんとするや、君は基督と君の間に一切の紹介者を省きたるにわらずや、我等も亦聖書と我等の間に君を省くの權利なからずや、君請ふ手を引き給へ、餘計な御世話なり云々』是れ實にルーテル自身が語らしめたる所なり、之が備を作りたる者は餘人ならず、ルーテル自身なり、是に於て乎議論紛々、異論百出、遂に其底止する所を知らざるに至れり、忽にして其弟子は同一の主義自由主義より出發して、先生よりも一層熾激なる結論に到達し、基督教義の中先生の保有せんと欲するものをも放擲せんと欲したり、此時師弟の關係は忽ち變じて仇敵となり、彼れルーテルは自己の主唱したる自由主義を全く打忘れ、其教敵に對して難じて曰く『此教理は使徒以來今日まで絶えず信奉せられたるものなり、諸子は何の權利を以て之を放擲せんとするや、諸子は誰より遣はされて祖先傳來の信仰を變更せんとするや、若し人なりとせむ、其委任狀を示せ、若し神なりとせむ、奇蹟を行て之を證せよ』と、嗚呼自由主義の父にして、加教學者の譽に倣ひ、其教敵の言動を難せんが爲に、一千五百年來の教傳を掲ぐ、矛盾撞突焉より甚しきはなし、何等の狂態ぞや、是

波教徒の聖
書に於て
探るに
致すに
不一

を以て其教敵は之を破するに何等の困難をも感せざりき、一言の下に破して曰く『若し過去の教傳にして信仰の法則たらむ、君は何故之を省きたるや、自己の爲に之を省きたらむ、何故他人の爲にも之を省かざるや、君の我等に對して教傳を掲ぐる、我等其理由を知らざるなり、君は新信仰を創作するが爲に遣はされたるものなるや、君獨り新宗教の預言者なるか云々』、教敵は尙一々ルーテルの言を取り、同一の論鋒を執て曰く『若し遣はされたらむ、誰より遣はされたる、人か、其委任狀を示せ、神か、奇蹟を行つて之を證明せよ云々』、ルーテル是に於て辭窮せり、一言の以て之に抗すべきものなし、狂乱憤怒したり、漫罵嘲倒したり、然れども真正有力の理由は一も掲ぐることを能はざりき、是より乖離分裂は一層甚しく、日一日に拾收す可からざるに至れり、今日に至りても未だ絶えず、蓋し是れ論理なり、必然の結果止むなし、吾人の恐る、所は乃ち之と同一の結果の國家の上に呈出せらるゝ事是なり、爲政者豈猛省せずして可ならんや。

波教徒は常に聖書を解釋するに一致せざる而已ならず、聖書其物を選択するに於ても亦一致せざるなり、其如何なる書が聖書にして、如何なる書が聖書ならざるやと云ふ點に於ては、異論百出、忽ち分離分裂を來すものなり、ルーテルは此點に就て一の例を作れり、後人多く之に倣へり、嗚呼奇怪なる哉、人一人たび私情私慾の念に支配せらるゝときは、如何

なる不條理、如何なる不合理の事を逞うしても願ざるに至ると云ふことを承認せずんば、恐くは此事を以て信なりと思ふ者なからん、彼等大膽なる波教徒は、一方に於て加教會が聖書の意を誤解したりとて痛く之を罵倒叱責しながら、他の一方に於て彼等自身が私意私見を以て之を解釋せんとするや、自由研究の名の下に、我儘勝手に之を曲解し、無暗矢鏢に之を翻譯し、自由自在に章句を省略し、否其説と相合はざるときは、聖書の全文を放擲して願ざるに至るなり、例せば彼のルーテルは主唱して曰く、人は基督に對して信仰さへあれど、徳行なくも救靈を得ど、乃ち是れ善を行ふも、惡を行ふも、基督をさへ信ずれば助かるとの意にして、南無阿彌陀佛をさへ一心不亂に唱ふれば、極樂往生疑なしと云ふと何ぞ異ならんや、聖書中より此の如き主義を釣出し得とは、洵に都合好過ぎる話にはあらずや、此の如きは普通の常識にも明に反背する事なり、然れども彼れルーテルは之を人に信せしめんが爲に、聖書を以て之を證せんことを務めたり、即ち先づ新約書を取り、聖パウロの『外部の行業は基督に對する信仰なきときは人を救ふものにあらず』と云ふ章句を曲解し、自ら翻譯したる書中に、パウロの意は人を救ふものは信仰のみ、徳行の如き毫も關せずと云ふ意を寓したるが如き、誣問の甚しきなり、聖パウロは其書中處々方々に善徳善業の必要を時の信者に語りたる者、其意焉を此の如くならんや、加之ならず、他の使徒ジャ

コブの如きは明にルーテルの言に反して語れり、曰く『信仰も徳行の随伴するなくんば死信仰なり』と此言痛くルーテルの説に反せるを以て、彼は痛く之を攻撃し、是れサヤンの書きたる藁の書なり、宜く火に投じて焼くべきものと、彼は遂に其我儘勝手なる私權を以て之を聖書の目錄中より省きたり、他の波教徒も自己の説に相合はざることあれば、皆ルーテルの爲に倣ひ、章句のみならず、聖書の全文をも棄て、願ざるなり、是れも自由研究にて聖書と見做されざりしことなれど是非もなし、噫。距今數年前、聖書と私見のみを信仰の法則となせる波教徒は、如何なる書は是れ聖書なるやと云ふ點に就て、種々怪々の異説を唱へ、毎度ながら紛々たる議論を戦はし、甲論乙駁、一是一非、遂に其底止する所を知らざりき、獨逸の一記者ヘニングハウスは其著『新教對新教論』の中に新約書に對する有名なる波教徒の意見を一々記載せるを見るに、聖書二十七書の中、彼等的一致したる所のもの僅か二書に止せり、此の如き異論界に於ては果して如何すべき、其説其派の異なるによりて、聖書の翻譯目錄等を一々異にするは、餘りに笑止の極なり、是を以て彼等は巧猾なる策を取り、自家異論の攻撃を避けんが爲に、新約書を殘らず使用することに決したり、即ち加教會より保有傳授せられたる儘に殘らず之を使用しながら、信不信の事は一に讀者の意に任せ、各自其意に適したるものあらせ、聖書なり、天啓の書なり、信仰

の基礎なりとなすべし云々と、勿論此點に就ても一致すべき謂はれなければ、兎に角凡ての人々は皆其手中に同一の書を有することを得るに至りたり、乃ち是れ今より三百五十年前加教會より取りたるものと異ならずして、今日日本に於て翻譯されあるもの即是なり、彼等は此點に於て其元に復りたり、是れ亦「何か」なりとして稱賛すべき事なりと思考す。

然りと雖波教會と加教會間の議論争闘は茲に終決したるものにあらず、蓋し波教徒の世に在る間は永く終結するの期なかるべし、波教徒にして議論するを止むるは乃ち是れ其存在するを失ふなり、何となれど波教徒の存在する所以は、加教會の保有する全き基督教理に對して、今日此部を排斥し、明日彼部を攻撃せんが爲めなれどなり、而して其排斥攻撃する理由は三百年來同一轍に出づ、加教會の愚暗、迷信即是なり、然れども加教徒の之に答ふる所も亦古今同一なり、曰く所謂愚暗迷信とは如何なるものを指すや、加教會は創立以來幾ど二千年の今日に至るまで世界到る處に人々の愚暗迷信を號泣しつゝ、攻撃するにはあらずや、同教會は先づ初に羅馬の愚暗迷信を驅逐したり、次に野蠻國の愚暗迷信を照破したり、今日同教會の世に存する所以、是れ亦人生必須の大真理を知らざる愚暗と古來種々の名稱の下に行はれ居る迷信とを攻撃するが爲にあらずや、去れど愚暗迷信の排斥に務むる加

加波二教會
争論の性質

教會の如く切甚なるはなしと謂ふこそ至當なれ、之を加教會に嫁するは何事ぞ、是れ子弟の愚暗耻辱を見て、銳意之が教戒に従事する師父に其罪を歸すると何を異ならんや、勿論最も之を號哭するものは師父なり、然れども爲に之が罪人と謂ふべけんや、加教會の事亦全く此の如くなりと知れ、抑々同教會には代々の信徒絶わす新陳代謝しつゝあるを以て、未だ生れたるのみにて何を學ぶざる信徒の在る有るは申す迄もなき事なり、然れども同教會の教理教訓の中に如何なる誤謬、如何なる迷信の跡ありとすべきや、吾人は過去現在に於て其一も之なきを斷言し得るなり、吾人は茲に斯々の波教徒が、加教會の斯々の教義を不合理なりとする所謂彼の教徒一個人の説に就て云々するものにあらざるなり、何となれど同教徒の中に設令之を否定排撃する者あるも、之を是認承服して是れ合理的の教義なり、基督の教の中に明に含有せらるゝ教義なりと唱道する者をも亦同教徒の中に就て見出すことを得れどなり、蓋し波教徒なる者は相互に私意私見を逞うして、一方に之を拒否すれど、一方に之を肯定する等、相互に論駁撞突しつゝあるものなり、此の如き奇怪なる論駁撞突の中に、加教會の取る可き道は唯だ一つ、教祖傳來の教義を殘らず保存する即是なり、而して同教會は實際此道を取りつゝあるものなり。

加波二教徒
の優劣論

波教徒は常に愚昧迷信の四字を以て、加教會と加教徒とを嘲笑蔑視しつゝあれども、實際

に於ては波教徒果して加教徒よりも、有道賢明の君子なりと謂ふべきや否や、之が實驗は極めて易し、宗教家は古來屢々之が實驗を試みたり、其法左の如し、先づ波教徒と加教徒の身分畧ば同じき者を取り來りて、兩者信する所の如何を質せ、波教徒は往々之が間に困難を感じ、我宗派に於ては一定の信條なしと答へん、彼は少しく道德に就て語り、時に或は政治問題等を提出して語ることあるも、其信すべき教義に就ては一言をも出さざるべし、蓋し議論の上之が答辯に窮すべきを恐れとなり、若又彼自ら一の信條やうのものを立て、之を信奉するあるも、彼は敢て之を人に語らざるべし、何となれど同教者の中にも多く己と意見を異にする者あるを恐れとなり、同教者中に意見を異にする者あるを知らしむるは、畢竟己を攻撃せしむる道を示す所以なり、人若し之に問ふに何故斯く信じ、何故斯々の教義のみを信じて、他の教義の明に聖書中に含有するものを信せざるやを以てすれば、彼は『私の意見は斯々なり』と云ふの外他に答ふるの道を有せざるべし、是より以上は追窮する勿れ、窮鼠を追ふときは怒つて反噬するに至らん、『我は斯く思考す』の語は波教徒最後の語なりと知れ、若夫れ加教徒に至りては大に之と異なり、何を信するやと問へば、彼は間に應じて直に其信じつゝある所の信條を擧げて答へん、何故之を信するやと云へば、彼亦其信すべき理由を掲げて、斯々云々の爲め我は之を信すと語らん、蓋し加教會にては

信條は一定し、其之を信する理由は明に示證せられおれとなり、解釋なく、證據なきときは、加教徒たる者一言半句をも信せず、故に其人に答ふるに當つては毫も遲疑する所なく、毫も躊躇する所なきを得るものなり、信條等に就て問はるゝときは、答は早く既に口を衝て出でんとせるが如し、其行ふ所のものに至つては、日常鎖末の事例へを十字架の標を畫する事、跪く事、頭を垂る、事等に至るまで、一々綿密に其理由を掲げて答ふるを得るなり、偶自身自ら之に答ふることを能はざる者ありとするも、爲に怒り、爲に心亂るゝ等の事はなし、坦然之に答て曰く是れ加教會の信仰なり、慣行なり、古より然り、何處にも然り、其理由我今悉く答ふる能はずと雖、理由なく信するにはあらず、知らんと欲せむ、我教會の識者に質せ、我教會逐一之に答へん、本源より、原因より説起して一々周到綿密の解説を爲さん云々と、蓋し加教會に於ては事皆理あり、物皆則ありて、一舉手一投足と雖、理法のなきものはなく、而して人生必須の教義慣例等に至りては、萬口一致、些の異論反對のなきを能く知悉すれとなり、斯の如く記述し來れむ、愚昧迷信の訴へは、抑々兩教徒何れの頭上に歸すべきや、言を待たずして明ならん、此點に就て日本の波教徒たる者大に誤れり、彼等は深く事の實際を究めずして、單に皮想上の觀察を爲したる上、直に加教徒は愚暗なり、迷信なり、取るに足らず云々と曰ふ、是れ豈加教會を耻辱するの甚しきにあら

すや、否自己の不明を示すにあらざして何ぞや、若し真に兩者の優劣を知らんと欲せし、須らく先づ加教會の何物なるを知らざるべからず、之を知るに當りては波教者のみの記事を見て斷するを止めよ、日本に傳はれる書籍等は大半波教者の手に成りたるものにして、其多くは先入利害等の觀念に驅られたる者の作なり、故に加教會の何なるを知らんと欲せし、少くとも此等先入利害的の作者の書以外に求めざるべからず、否らすんを同教會に對して投する所言々皆不義ならざるはなし、然れども此點に就て亦一の注意すべき所あり、加教徒は何事に就ても波教徒より優等に位すと謂ふ能はざる事是なり、單に日本に就て語らんに、加教徒は世間的の地位、自然的の方道、及び金力等に於ては、波教徒より數層劣等に在るものとす、要せば世間的の人物なく、資産ある人物少しと謂ふべきなり、上流社會に信徒を有せざるは、同教は由來下より上に至るの順序を取れり、地盤を下に固めて而る後上部に至るを常とす、蓋し上流の者を嚴格なる道に入る、は、今の時勢に於て頗る危険なり、位あり、金あり、勢ある人が加教會の道德を守ることとは、極めて難事に屬するが如し、金満家の天國に入る、駝駄の針口を通するよりも困難なり、若夫れ同教の宣教師にして世の學術界に音なきは、此方面に従事する餘裕なきに因るなり、彼等は先づ第一に其天職を盡さんことをのみ憂慮す、其天職とする所は基督の教を布き、人生必須の眞理を教へ、眞

正奉教に志ある者に洗禮を授け、之と同時に出來得る丈け慈善の業を行ふに従事する事等即是なり、此等の點に就き鞠躬盡瘁して間然する所なくんことを、以て足れりとす、世の學問界に資するが如きは、餘力あつての事なり、且世には斯道學者の在る有り、又焉ぞ宣教師に待たん、宣教師は交典や文學等を教ふるが爲に派遣せられたるものにあらざ、故に此等の事を知らざるも宣教師たるに於て何を關せん、然れども實際之を知らずと斷するを止めよ、普通の知識は、如何なる無學の宣教師なりと雖優に之を有するなり、今日外觀をのみ一見するときは、加教の宣教師は學界の運動に毫も冷熱を感せざるもの、如しと雖、彼等の愚暗無識の爲に然りと思ふ勿れ、況んや之を以て加教會は學問の敵なりと思惟するが如きは大なる誤なり、個々の宣教師に就て如何なる感想を齎くも、そは人の自由なり、但だ加教會を以て愚者の集合と見做すなくんことを可なり、オグスマス、トマス、ボツスエ氏の如き古今獨歩の大知能、大天才は皆加教會の者たるを記せよ、現代の教王レオ第十三世の如きも確かに人物の一なるべし、日本人は多く英國のみを知つて其他を知らず、トマスの如何なる大學者にてありしやは知る者殆ど一人もなし、英國に就て若し其人を求めんと欲せば、余はワイスマン、ニウマン、マニング等を以てせん、二氏の事は余之を卷末に記さんと欲す、要するに加教會は世人の思ふが如く愚者の集合にあらざるなり、詳に其實際を探

らむ、世間の學者に比して數層傑出する者多く之あるを見ん、況んや波教會の所謂學者に比するをや。

ルイテルは
眞なる宗
教改革者乎

波教徒は愚昧迷信を以て加教會を目指すの外、尙他の弊害百端なるを以て痛く同教會を攻撃するを希とす、ルイテルを以て改革者として崇慕する所以のものは、此弊害を矯正したるが爲なりと云ふ、然れども是れ亦研究を要する所、漫に斯く信するが如きは、近眼者流の事のみ、何事も深く其實状を究めざる上は、是非すべきものにあらざるなり、請ふ余をして此點に就ても少しも語る所あらしめよ、余は前條に宗教界、政治界の刷新の必要缺く可からざる状態、少くとも必到避く可からざる時勢ありしを記述したり、彼のルイテルは當時偶之が導火線となりたるものなり、彼は其黨與と共に必要の境を逸出して改革を行ひたり、故に其改革は根本的にして、其勢の上より論ずるときは、改革と謂ふよりは寧ろ破壊と謂ふ可かりしなり、彼は一氣呵生、殆ど破竹の勢を以て當時の教界、政界を根本より悉く破却したり、然らむ彼は之を以て世道人心に如何なる貢獻を爲したりとすべき、世道人心の語は當を缺く、天下の人民に如何なる効益を興へたるや、蓋し今日日本に於て、政界の弊害を矯正すと公言する者と同一の利益ならん、今日政界の改革者は彼ルイテルと同じく民權と自由との至上絶体なる事を唱道しつゝあり、此改革にして行はれたらむ、如何

なる結果を社會に來すべきや、社會の局面と組織は無論是に由りて一變せん、然れども此が爲め其弊害矯正せらるべしと信じて得べきや否や、眞に日本の社會に盡瘁せんと欲する者は、此點に就て深く省慮せざる可からず、他國の實例備に存す、之を視て學ぶは可、之を踏んで學べんとするは危険此上なし、日本人民は賢明の民なり、他國に於て個人の自由主義を政界に應用して、之を實行したるときは、如何なる殷鑑を示したるを知るに難からざるべし、殷鑑果して如何、破却するは易し、建設するは難しと云ふ事、是れ其最も鑒む可き所なり、時によりて弊害の矯正是非ども破却を要することありとするも、切言せむ、先づ破却せざれば矯正するを得ざる場合之ありとするも、破却と矯正の間には大なる區別あるを忘る可きにあらす、夫れ弊害と云ひ、弊害と云ふ、抑々何れより起り來れるや、人間の弱點、私情、就中驕傲、野望、貪欲、淫逸等より起り來るものなり、此等は實に百弊萬害の因つて來る眞原因なり、故に眞個に弊害を矯正せんと欲する者は先づ此眞原因に藥を投せざるべからざるものなり、否らすんを百の破却も何の効あらんや、矯正と破却を同一視するは大なる誤なり、勿論破却も場合によりては矯正改革の準備とならざるにはならず、例へば舊屋を破却するは新宅建設の準備となるが如きはなり、ルイテルの破壊的運動の結果も亦此の如し、百害四出、流血淋漓、禍亂紛擾、實に目も當てられざる慘狀を呈したるも、

此等慘憺たる禍害の中より幸福なる成果の出で來れるを見るときは、亦是れ其準備をなしたるものと謂ひ得べきなり、然れども此が爲に其弊害を矯正したる者はルーテルなりとは謂ふ能はざるなり、彼は寧ろ自己の破壊的運爲より一層過大なる弊害の百出したるを痛哭するの止むを得ざるに至りたり、何となれを當時の君王、信徒、人民等が一たびルーテルの説に雷同して、加教會の羈轡を脱したるや、其殘逆、暴亂等前よりも一層甚しくなりたれをなり、史に曰く世の惡漢が一たび自由の空氣を呼吸するに至れるや、罪逆貫盈、殘忍なるパーバ教時代に於ても此の如き例は見るを得ざりき云々と、彼れルーテルの如きも其言るや必ず憤慨の氣を帯び、其動くや必ず粗暴の舉に出で、憤怒と罵言と亂暴とは須臾も其言動の上に顯はれざりしはなしと云ふ、是を以て觀るもルーテルの真正改革者にあらざりしは彰々乎として瞭かなり、然らば真正の改革は誰の手を以て行はれたるや、ルーテルの改革せんと欲したる加教會を以て行はれた、此時歐洲各國には戰亂紛擾、禍害鬱結、宛も暴風一過の後百事百物の頽亂朽敗するが如き狀にてありき、然れども加教會が漸次其故に復し、人民も出で、其禍亂の跡を疏くに至りたるとき、真正の改革、修繕、矯正は日ならず行はるゝに及びたり、乃ち加教會は此時トランスに公會議を開き、ルーテル一味の徒輩の變更し、破亂し、改廢したる教理を一々拾收して、之を集合し、之を定説し、之を明

快にして、又々公明正大の真理として發表するに至りたるなり、此時舊時の教規、制度等をも一々修正して新世紀に適合せしむるに至りければ、茲に初めて真正の改革刷新は行はるるに及びたり、此改革刷新の後に出でたる加教會は宛も墳墓の中より蘇生し、復活したるが如く、壯快に、活潑に、自由にして、一大飛躍を世界に試み、其天職を萬民に向つて盡すを得るに至れり、勿論同教會は歐洲に於て信徒の一半を失ふに至りたり、教理の純潔を保全するが爲には、勢ひ破壊黨を破門せざる可からざれをなり、然れども此等破壊黨の破門せられたる後、新たなる勢力順に加はりて、其羽翼を他の一方に自由に伸張するを得たり、諸を樹本に譬ふれば、惡枝亂條を切取したる後には、液汁津々として、一方の枝葉順に其勢力を増進するに至るが如し、加教會の事亦全く此の如し、舊世界に亂暴横生の條枝切られたるが爲め、新たに發見せられたる新世界、即ち亞米利加、オセアニア、及び亞細亞の諸國まで液汁津々たる新條新枝を發生萌起するに至りたり、海外宣教の一大事業は則ち此時に經始せられたるものにして、其事業は今仍立派に繼承して、加教會の統一と元氣を世界六合に證明しつゝあるものなり、此事たる當眼の一大事實、如何なる人も目以て直に之を睹るを得るが故に、百の誦辨怪論も此下には直に消失して、之を奈何ともする能はざるものなり。

畢竟するにルーテルの事業は一言以て之を説盡するを得べし、曰く彼は矯正すべし弊害を
 一も矯正せずして、却て矯正を要せざる信仰の一致を破却し去りたりと、言を爲す者あり、
 曰く、彼は人の精神を脱出せしめたりと、如何なる處より、教會の奴隸的服従より云々と、
 然り、彼は自由研究を信仰唯一の定規と叫びて、一舉に總ての權利を滅却したり、然れど
 も人の精神は此が爲に如何なる利益を受けたるや、自由と云ふ賜を得たりと、然り、思想
 言論の自由を得たり、然れども記せよ、ルーテルの宣言したる思想言論の自由は基督教の
 真理に一毫も損益せざるを、教理問題に就ては思想言論の自由は毫も關する所にあらず、思
 考し言論するの際に自由あれどとて必ずしも誤るの恐なしとは謂ふ能はざるなり、寧ろ其
 自由あるが爲に、我儘勝手に歧路に走るの憂あるにあらずや、自由主義は不可誤の確かな
 る定規にはわらざるなり、此自由主義により彼等は遂に其大切なる信仰の一致を失ふに至
 りたり、三百年來の經驗事實は明に證明して曰く、波教徒は其自由主義を改めざる以上は終
 焉相一致する能はずと、彼等の中に信仰意見の相異なる、職として皆茲に由るものなり、彼
 等は三百年來絶えず議論しつゝ、絶えず探求しつゝあり、而して加教徒は終始同一の言
 を反覆して之に語て曰く『若し聖書にして自ら明瞭ならん、若くは卿等皆之を解釋し得る
 光明を有すとせば、何故相互に一致せざるや、若し又到底相互に一致すべし謂はれなしと

波教徒の窮
 たる一致論

せむ、何故當初の活ける教傳に復歸せざるや云々』と、然れども一たび教傳を放擲して再び
 亦教傳に復歸するが如きは、彼等の意地にも出來ざる事なり、故に彼等教傳以外に何と
 して一致の道なからめやと工夫に工夫を凝しつゝあるものなり。

彼等は此が爲に一の新案を發明したり、乃ち基督の教の中より基礎的の信條を提出し、之
 を承認するに於て相一致せざれど、新教會の者にあらずとして、茲に大体に於て相一致
 すと装はんとせり、是れ一見すれば、一應理あるが如くに思はるれども、詳に之を檢覈す
 れど、奇怪至極の理屈となるなり、何となれば彼等の所謂神の言に就て、此の如き道を取り
 つゝ、一は基礎的の信條として之を採用し、他は主要の箇條にあらずとして我儘勝手に之を
 放棄するが如きは、神を翻弄し、神を蔑如する道と謂ふべきなり、一家に在りて其子弟が此
 の如き我儘勝手に撰擇を爲すあらん、如何なるれ心好しの父と雖も之を默任せざる可し、況
 んや上天の父をや、此の如き言動に出るは、取りも直さず自身を神の上の置ひて、己れ神
 を自由に裁判する權利ありとするものなり、加之ならず、彼等の主義に據れど、人皆自由
 なり、不羈なりと云へむ、其所謂基礎的の信條を定むる職權ある者は果して誰なりとすべし、
 他人に之を承認せしむる權利ある者は果して誰なるべき、知らずや、爾等は教理上に於け
 る總ての權利を放擲したる者なるを、權利の語は乃ち爾等の自由主義に正反對するものな

り、假りに斯會議に集れる學者皆相一致して、其所謂基礎的箇條を承認すとすも、此を以て直に一致行はれたりとするが如きは、兒戲のみ、設令一時一致行はれたりとするも、其一致は何時まで繼續し得べきや、彼等此時一致したりとするも、言論の自由は依然之を有するが故に、後日名論卓說出でたる時は、乃ち是れ其一致破たれる時なり、其破るゝに當つて、之を彌縫せんとするも、能はざる事なり、各自皆自由なれをなり、各自皆眼中に已あつて人なけれをなり、若夫れ同時の人をしも一致せしむるを得ずんを、焉ぞ未だ生れざる人を此一致の繩に繋くを得んや、同じ會議に列せる人々の間にさへ一致なくんを、況んや後代の人々との間に於てをや、嗚呼一致の如き好文字は卿等の主義と相容れざるものなり、人皆自由なり、思考するにも自由、言論するにも自由、信仰するにも自由、事々物々皆自由主義なり、亦焉ぞ一致を見るべけんや、是を以て其所謂基礎的箇條を定むるに當りても、異論百端、駁撃四出、到底一致すべし状なかりき、假りに信仰の宣言を爲して、烏合の一致を形成するも、分裂の現象は早や既に其時にも顯はるゝなり、信仰の宣言は蒐めて書となれども、都合主義によりて便宜に之を採否するの權は各自皆之を有せり、嗚呼此の如きもの何ぞ一致と謂はん、識者は之を一見して彼等の一致運動の茶番的なるを看取するなり、設令基礎的箇條を提供して、是れ主要なり、大切なりとするも、之を承認し、之を確保するの

波教徒一致の困難及其四分五裂

道依然『自己の意見』に在る以上は、誰か之に服せん、誰か之を信せん、彼れ自己の意見によりて之を主張せむ、我も自己の意見によりて之を排斥せん、自由主義は彼れの専有にあらず、我も亦之を有するなり、嗚呼波教徒たる者何ぞ其念の未だ茲に到らざるや、利巧なるが如くにして馬鹿なるは同教徒なりと謂ふ可し。

是に由りて之を觀れむ、波教徒の一致なるものは、其主義に徴しても行はれざるを知るなり、聖書のみを以て信仰唯一の法則となし、之を解説するには各人の自由研究を以てするが如きは、既に一致を成立せしむる基礎を失へるものなり、去れを新約聖書を解説實踐するに於て、幾百千萬の人々を一致せしめ、又其一致をして永く繼續せしめんとするが如きは、全く想像たるに過ぎざるなり、其實際に行はるべきにあらざるや論無し、若し之をも實際に行はるとせむ、吾人は「千萬の針を取つて偶然之を四もに散亂したるとき、其針一々一の中點に相鑽立して、鞏固拔く可からざるに至れり」と云ふ事の寧ろ行はれ易きを信せんと欲するものなり、彼等の主義に據るときは、確認と云ふ事の到底出來得べからざるを知る、既に確認なし、亦焉ぞ信仰あらんや、夫れ信仰とは誤り欺かるゝ等の恐なく、事を確然承認するに在る事、彼等の定義によりても知らるゝなり、然るに彼等の主義に於ては、人知の識得證明し得る事項（例へば誠命、性法等の如きもの）に就ての確知と、人知

の論理的に證明し得ざる事項（例へば基督教の機密主義等の如きもの）に對する私見との外あるべき道理なきものなり、是を以て彼等の多くは確乎不拔の信條を成立するを得ずして、遂に基督の教の中より人知の直接證明し得ざる所のものを悉く拔取放擲するに至りたるものなり、一見勇斷の所爲の如く思はるれども、其實或は絶望より出でたるものならん、彼等は茲に於ても、明かに背理の沙汰たるを免れず、何となれを總て宗教なるものは神と人、無限と有限との關係を意味するが故に、勢ひ機密なるものなかるべからざればなり、乃ち一方に於て人知の窺ふ能はざる事物に屬するを以て、此點に於ては是非とも機密なかる可からざるを見るなり、然るに彼等は此れを察せずして、何事も人知を以て律せんと欲す、是れ彼等の宗教の定義にも背反する所以なり、然れども他の一方より觀るときは、彼等にも亦一應の道理あり、彼等其知る能はざる所を信するが爲には、此點に就て誤り欺かるゝ憂なきを確認せざるべからず、而るに彼等は其主義に於て此確認を保する總ての權利を放棄したり、是を以て勢ひ議論と議論を重ねて永く半信半疑の境に彷徨せざるべからざるに至れり、然れども斯く何時までも議論のみ戦はして永く不安心を抱き居る能はざるが故に、如かず凡て機密に屬し、教義に係る事を斷然放擲し去らんにはと思考したる所以なり、ルーテルも畢竟此主義なりしかを、彼等は其始祖の爲に願ても自由に之を

行ふを得るものなり、是れ實に矯激の言動なりと謂ふと雖、其主義により言動するときは勢ひ茲に出でざるべからざるが故に、論理上非す可き點なし、試に思へ、各人皆自由、而かも自から不安心の境を出る能はずとするときは、一舉にして凡ての信仰すべき事物を排斥して、單に自己の理性に適從する外道なきにあらざるや、斯く立論するときは、彼等の言動も論理的たるを失はざるなり、去れを人之を奈何ともする能はず、此點に於て波教の極意を究盡するときは、基督教を否定排斥するものは即是れ波教の波教たる所以と謂はざるべからず、宜なる哉此點より偏理派、唯一派、宇宙派等種々の宗派の蜂起せるや、一部の波教徒は之を不信無教と見做すものわれども、是れ誤れり、此等は皆波教の子なり、兄弟なり、彼と云ひ此と云ひ、畢竟同源より出でたるものなり、同源とは何ぞ、自由研究即是なり。

彼等之に答て曰く、波教徒必ずしも此極端に失墜するものにあらず、今日に於ても多くの教會の信徒は其牧師に教へられて、古來信じ來れる所を固信して安心しつゝあり、故に波教徒たりと雖確認と信仰とを有するを得と、果して然らば、洵に賀すべき事なり、然れども其何故此の如くなるを得るやを究めざるべからず、蓋し此には理由の在る有り、夫れ如何なる教派と雖、其加教會を脱出するに當りて、基督教の眞理を残らず放擲したりと謂ふべからず、

偏理派を除くの外は、何れも皆多少の真理を保有せざるはなし、若し其保有する所の真理を堅く信奉するあらば、それだけ其信者の利益となるものなり、何となれを如何に不完全なる真理と雖、是れ亦一の賜なれを、宜しく天に向つて謝すべく、人に向つて慶すべきものなり、彼の波教徒と雖、日本の精神界、學問界等に多少基督教の有益なる真理を散布したることは、争ふ可からざる事實なり、國學者が如何なる曲辯を逞うするも、今日の日本が此等の真理によりて大に進歩發達し來りたるを隠蔽する能はず、然れども此等の真理が今仍波教徒の信奉する所なりとするも、彼等は其教の主義によりて之を信奉すと思ふは大なる誤なり、彼等の之を信奉するは其主義に反して信奉するものにして、謂はゞ幸運なる不合理的结果なり、請ふ其理を語らん、蓋し余の歴記したるが如く、人は本來の性質上人に教へらるべき動物なり、毫も人の教に待たざる事は、其性の容さざる所なり、如何に曲解せんと欲するも、此事實を蔽ふ能はず、蓋し性質は曲辨よりも力あるものなり、人如何に自由々々と呼ぶも、多くの人々は其信すべき所と其行ふべき所を他人の教に仰がざるべからざる地位に立てるを奈何せん、自ら計量し、自ら規畫して行ふ者は世甚だ稀なるを知らざるべからず、是を以て波教徒の多くは先づ第一必須の勢に逼られて、其牧師に就て教訓を仰がざるべからず、次に古來の習慣によりても知らず識らず茲に出づるに至るものな

り、何となれを波教の世に産出する以前には、教民皆司祭の教によりて其信仰を養ひたるものなれをなり、爾來此習慣因襲して、彼等波教徒も多くの處に於て、今仍會堂に集參して、牧師の教誨に接しつゝあること、毫も昔時に異なる所なし、蓋し外容のみを一見するときは、事局の上になしたる變動を見ざるなり、宜なる哉彼等の中に多くの信徒が、先入、習慣、教育、國土、利害等の觀念に司配せられつゝも、正直眞率に己れ眞正の教會に在りて、眞正の信仰を有すと信じつゝあるや。

然らむ此正直なる信仰は波教徒一般にありと謂ふべきや、又今後長く繼續すべしと爲すべしや、波教の性質を研究するに、思ふよりも一般に互れるが如し、一見するときは此の如き不合理的の事が永く合理的信徒の腦中に繼續すべしとは信せられざるが如しと雖、實際に於て此正直なる信仰が眞率なる教民、就中此點に就て研究する時と力と方法とを缺ける愚夫愚婦の間に廣く行はれ居るを見るときは、強ち理論のみを以て律すべからざるものあり、彼等の中其足未だ故土を離れず其目未だ他郷を見ず、生れてより死する迄、同一の天地に棲息し、同一の習俗に司配せられ居る者の如くきは、何れも皆此正直なる信仰を正直に抱懐しつゝあるもの、如し、此點に就ては彼の佛教徒と異なる所なし、今日佛教の説く所、行ふ所、多く正理の研究に堪ざるものありと雖、滔々たる同教の信者は、依然古來の

習俗に司配せられて、一念一たびも茲に到らざるもの、如し、然りと雖天下の人皆愚者ならんや、其中に知あり識ある人物もありて、其信する事物の性質と理由（何を信じ、何故信するやと云ふ事）とを研究せんと欲するに當りては、其心必ず異様の感に打たれて、從來の所信に疑を存せざるを得ざるに至るものなり、彼の生國を出で、他郷に到り、家族朋友を離れて、人情風俗の異なる人々に接する者も、他國の宗教信仰等を見て、自己の所信に思ひ到ることなしとせざるも、此等の人々の多くは自己の誤謬迷妄の發覺を恐るもの、如く、故さら茲に研究の勞を取るを避くるもの、如し、中には疑團起りても自ら之を氷釋して安心するを得ざる者あり、中心尙に憫む可きなり、信せざる可からざる命令的要求と知らんと欲する不安心の恐懼と、一身の胸間に相戦ふに當りては、如何ぞ安心するを得んや、安心するには、是非とも其立脚の點を認めざるべからざるものなり、但だ奈何せん良心之を命ずるも利害之を禁ずる者あるを、其中に利害の觀念を脱して、氷心一片真理の探求に従事する者あるときは、幸にして此不安の苦境を脱出するを得るなり、否らずんば一生胸中に苦痛を抱かざるべからず、古來有名なる波教徒は此苦痛の狀を吾人に描き示したり、今日も此苦痛の道中に在る者は、絶えず甲説より乙説に移り、舊論より新論に移り、轉々須臾も休止する時なし、彼等は毎度満足なる解釋を眼前に望みつゝ、終焉之を捕捉する

を得ず、今日種々の新説の日に月に案出せらるゝ所以は、職として茲に由るなり、然れども如何に新説續出するも、畢竟空理想像のみに止まりて、其目的は終焉達せられず、其實物は永遠求められず、遂に一生不安不確の苦境に呻吟しつゝ、信仰もなく安心もなくして墓所の土と化するに至るなり。

然れども或人は此不安心の苦境にも多少の益あるを主張して曰く、斯の如き場合に際しては真理要求の心一層切なるが故に、人々一段の熱心を以て之が追求に従事するに至る、且競争の如きも此際に起るものにして各派競ふて徳を磨き善を勵み、布教事業、慈善事業等亦翕然興起し、爲に幾多の宗教的社團の説あるを見る至る云々と、之れ實に負惜みの議論なり、資金は必用なるものに相違なきも信仰と良心の平安とを賭せしむるまでの理由とするものにあらず、彼の慈善的事業の如きも如何に賞賛すべき美譽なりとするも、以て信仰に代ふるに足らざるなり、若夫れ真理探求の熱心に至りては、如何に高崇なる偉業に屬すと雖、真理抱懷の幸福に比して同日の論にあらざるなり。

人心が其和平を得んが爲に絶えず追求しつゝある所のものは、即ち此真理抱懷の幸福に外ならざるなり、然り而して彼の波教徒は自教の主義によりて到底此幸福に達する能はざるものなるを知らざる可からず、是を以て同教徒中に知あり識ある者は、安心立命を求めん

と欲せむ、須らく同教以外に求めざる可からざるを看取し、今迄執り來れる自由研究の道を利用して、同教を棄て、加教に歸し、遂に其權利主義に就くの極めて簡單、極めて安心なるを認むるに至りたり、長く不安心の苦境に呻吟し、深く研究の勞を積み重ねたる人々は皆此の如き道を辿りて安心立命の地位に立つに至りたるものなり、此等の人々は何れも皆偉大なる人物にして、尋常人の上に一頭を抜き、學徳共に優に一世を歴し、彼の波教徒と雖其遺風を見て景仰欽慕せざる者なし、人若し近代に於て其人物を知らんと欲せむ、余は先づ指を彼のニウマン、マニング、フアバール等に屈せざるべからず、此數者は皆眞理研究の切なる心に迫まれて、遂に加教會に歸依するに至りたる者なり。

若夫れ眞理研究の時なく力なく又望みなき片々たる人間に至りては、波教徒間の紛々藉々たる議論の渦中に捲込まれて、其何れに適從す可きやを知らず、往々失望喪心の餘り、當に基督教のみならず、總ての宗教をも放棄して、遂に懷疑派に失墜するに至れるなり、其此の如く甚しきに至らざる者は、冷々淡々の心毫も宗教に顧慮せざるに至れり、然れども是れ既に宗教心を失ひ、道徳心を失ふ一の階段たるに外ならざれむ、極めて危険の道中なりと謂はざるべからず、今一步を進めむ即ち是れ人獸何ぞ擇むん底の境に失墜するなり、此の如き危険を避けんが爲に、波教徒は一の名案を想像したり、何ぞや其名案とは、他莫し、

自今以後信仰に就ては一毫も議論を戦はざる事即是なり、何れか是れ信すべく、何れか是れ信すべからざるや抔に就ては、決して問答せず、堅く沈黙主義を守りて、之を各自の良心に委する事とはなしぬ、此名案によれば、各自其信仰自由なり、神より心眼を開き貫へむ足れり、若し良心によりて信するあらむ、是れ神の眼前に於て義人なり、隨て眞正の教會に係る者なり、眞正の教會は即ち是れ此等義人を以て成立てるものなり、人の眼には見る可からず、神獨り之を知る云々と、嗚呼議論を止めしめ、良心を安んせしむる爲に、教會の無形にして見る可からざる事を以てす、實に誠に名案なりと謂ふべし、要は此事果して正理の言論に堪ふべき性質のものなるや否やにあり。

本論(中)

當眼歴然

眞正教會の
可見的特質

論ふ潜思黙考せよ、世に教會の數過多なるが故に、熟れか是れ眞なるやを知る能はずと言ひ、眞正なる教會は神の前に於ける義人を以て成立するが故に、吾人の目以て之を見る能はずと語り、信すべき箇條の何れなるを明瞭精確に言定むる能はざるが故に、信仰なるものは全く心中に在るもの、之を裁判する者は獨り神のみ、人は之を知るに由なしと論ず

るが如きは、如何にも狡猾なる遁辭と謂ふべきなり、一大難關を避けんが爲に、其言論茲に出づ、窮せりと雖亦惡むべきなり、勿論信仰は中心に在るに相違なし、其人の目に見る能はざることも言を待たず、然りと雖若し確立一定の真理にして明瞭精確に知得せらるゝものなくん心、焉ぞ信仰を有するを得んや、信仰の目的物となるものは正しく斯の如き確立一定の真理の明瞭精確に知得せらるゝものに外ならざれんなり、試に想へ、我若し信すべき真理を確知する道を缺かむ、果して如何なる性質の信仰を抱懐し得べき、神は毎回奇蹟を行ふて各人に其所信を啓示するものにあらざるなり、果して然るときは、我れ吾所信に就て誤るも、其罪我にあらずと謂ふ可きなり、然れども記せよ、爲に我が信する所眞なり、我が行ふ所善なりとは謂ふ能はざることを、何となれを若し果して此の如くなりとするときは、如何なる信仰も皆均しく眞なり、如何なる慣行も皆均しく善なりと謂はざる可からざるに至れんなり、隨て阿彌陀如來を拜む佛教徒も、若し其阿彌陀を以て救世主なりと信するに於ては、基督教徒と同じく真理の道に存する者と謂はざる可からざらんとす、又彼の罪障解脱の爲め冷水を頭上より被る隨信者も、洗禮を受くる基督教徒と同じく罪過の赦を得べしと謂はざる可からざらんとす、然るに波教徒は一人も之を首肯する者なからん、蓋し一たび其道を誤らむ、如何なる信仰、信任ありとするも、之を義とする能はずと云ふ事は、普通一般の

道理に徴しても知らるゝ所なれんなり、失路の人は如何に己れが正路に在りと信するも、歩いて其目的の地に到達し得べきものにあらざるを見む、蓋し思ひ半々に過さん、天下焉より賭易き道理なきに、多くの人が而かも己れの知慮に誇りつゝある人が、未だ茲に想到せず、信仰さへあれど必ず救靈の道に在りと思料するが如きは、頗る奇怪の現象と謂ふべきなり、其最も奇怪とすべきは、此主義今や凡ての方面に流行し、彼の哲學者すらも眞偽は絶體的のものにあらずと言ふを以て一格言の如く見做しつゝあるに至れり、眞と云ひ、偽と云ひ、吾人精神の外に在るべきものにあらず、隨て何事も我若し之を眞とせむ眞となり、偽とせむ偽となるものなり云々の言論は、今日多くの哲學者の唱道する所にあらずや、善惡に至りても亦全く之と同一の意見を以て解説しつゝあるなり、是れ實に不合理千萬の議論にして辨明するにも足らざるものなれども、種々の罪惡、種々の誤謬が此の如き言論によりて社會に蔓生し、其結果洵に言ふに忍びざるに至るは、天下國家の爲に痛哭流涕すべき事象と謂はざるを得ざるなり、蓋し本邦今日の大害は、人々一人として威權を以て『是れ人生必須の大真理なり、是れ國家存亡の繫がる大原義なり、信守せずんば民死し國亡ぶ』と明言する能はざるより甚しきはなし、各人皆理あり、其說何れも眞なり善なりとして、何事も對體的に解説するが故に、言論の一致破れて言ふに言はれざる渾沌界に失墜し、到底

人をも己をも救出すること能はざるに至れり、斯の如くして其生息しつゝある社會も一日に乖離分裂するに及ぶなり、論じて茲に到るときは、基督が人生必須の大真理を世界萬民に教へんが爲に、一の教會を地上に創立したりと云ふ以上は、是非とも其教會なるものは吾人の眼を以て見るべく、世界如何なる處に在るも、直に認め得べき性質のものたらざるべからざるは明々白々たる所なり、然り、如何に知慮を缺ける人にも、其教會の所在を知らしめ、何時にても就て其道を質し得る組織にせずんを、神は無用の教會を創立したりと謂はざるべからざるなり、彼の教義の如きに至りても明瞭的確に定義し、誰れの眼にも暗易からしむる性質のものになさずんを、有れども無きと一般何の効か之あらんや、彼等波教徒の唱道するが如く、教會をして眼以て見得べからざるものとせむ、肉と骨のみ人間多き此社會に取りて果して如何の効用あるべき、試に日本國民は見ゆずして存在し、見ゆずして統御せられ、見ゆずして統治せられつゝありと言はゞ如何、誰か其狂愚を笑はざる者あらん、然れども彼等波教徒の唱道する所は正しく斯の如き説なり、教會は吾人の眼以て見るべからずと、何ぞ其の説の奇々怪々なるや、請ふ聖書を徹始徹終せよ、見ゆざる教會の事は、何處に記載せりとするや、聞かまほしき事なり、日本の憲法史に就て、其見ゆざる國家を案出せんすと何ぞ異ならんや、見ゆざる國家なるものは何處にもなし、否有るべき筈もなし、教會

の事亦然り、何となれを吾人の今日教會と稱するものは、各人内部の心情を指すにあらざるなり、内部の心情の如きは、神にあらすんを知る能はざるは言ふ迄もなき事なり、眼に人の信仰を見んと欲す、猶は其愛國心を見んと欲するが如し、豈得べき理ならんや、蓋し人の心事を示すには、それ相應の言葉あり、教會に於ても國家に於ても其用語畧ぼ同じ、教會に於て信仰心ありと云ふが如く、國家に於ては愛國心ありと云ふ、日本にて言はゞ大和魂ありと云ふなり、此等の心ある人々の集合を指して、教會に於ては之を聖人の社會と云ひ、國家に於ては愛國者の教會と云ふ、然れども單に教會と云ふ時は單に社會と云ふ時の如く、其意此のみに止まらざるなり、即ち教會と云ふときは、同一の首領を戴き同一の法律に服しつゝある一國民を指すが如く、教會と云ふときは、同一なる基督の教法を信じ、誠命を守りつゝある信者總体を意味するものなり、然れども斯く言ふも其信者何れも皆完全なる信仰を有し、完全なる服従を爲す者なりと謂ふにはあらず、此は國家の人民が皆善良なる國民なりと謂ふ能はざると理同じ、然らむ其言何を意味するや、他莫し、教會に於ては、國家に於けると同じく其法律、其制度、其組織の一定確立するものなくんを、人々は基督の命じたる如く適當に教誨せられ、適當に統治せられ得べきものにあらずと謂ふまでのみ、然れども此の如くならんが爲には是非とも教會なるものは見る可きものたらざるべからざるなり。

請ふ譬を設けて語らん、今茲に誠意正心の人あり、英語を學ぶが爲にもあらず、生計の道を求むるが爲にもあらず、單だ基督の教の那邊に存するやを知らんと欲するが爲に東奔西走すとせむ、果して如何なる處に就て其教を請ふべきや、成程教會なるものなきにあらず、八百八街到る處に之あり、然れども其教ふる所の餘りに奇妙不思議なるを如何せん、余をして今一々其問答の狀を語らしめよ、前記の人先づ一の波教會に入り、懇慫に挨拶したる後、真正なる基督教の何物なるを問ふ、此時牧師らしき人出て來り、之に答て曰く、我意見を以てすれば、我が今弘布しつつある所のものは則ち是れ真正なる基督教なりと、無論其答他に出づべき筈なし、然るに牧師らしき人は尙語を繼て語て曰く、勿論此教は全く我心を満足せしむるとは謂ふにあらず、我要求に應せざる所は之あり、我れ是を以て少しく此教の改革に意あり、然れども現在に在りては我れ此教より良好のものを他に認めず云々と、此時訪問者之に答て曰く、貴師の言論敬服の外なし、然れども貴師の所説も亦全く我心を満足せしめたりとは謂ふ能はず、我は今何かを信せんと欲す、信仰の飢渴我を苦めつゝわれをなり、且我生短し、今後餘す所幾許なるを知らず、無論希望を以て我生の一日も長からんを欲すと雖、人生五十年、七十古來稀と云ふを奈何せん、故に早く其信すべきを撰んで之に就くは目下の急務と思考す、然れども信じて安心を得んが爲には、須らく先づ其信す

べきもの、何物なるかを明瞭的確に知得せざるべからず、然るに不幸にして貴師の言は曖昧模糊として、我胸中の疑團を氷解せしめず、遺憾なれども請ふ近隣の教會に就て教を仰がんと、辭して近隣の教會に入る、是れ亦波教會なり、寒暖の挨拶畢りて直に其問を發す、此時同教會の牧師茶菓を供し、鄭重に之を遇し、話頭多端に亘り、或は商業を語り、或は教育を談じ、或は又政治等を論じ、滔々として此等の問題に對する高見を吐けども、一言其大切なる間に就て答ふる所なし、真正なる基督教は如何と云ふ問に、空しく商業、教育、政治等の意見を聽くのみ、蓋し同教會の牧師と云ふは、博識多才、世故に長け、事務に熟し、經驗に富むの人、資性寛大にして、自己の良心を信じ、人の良心を敬ふ者、是を以て敢て自説を強行せず、取捨の事全く人の意に任ず、然れども布教上一段の勢力を添へんが爲に、他の六教會と交渉して、公然氣脈を通ずるに至れり、然れども所信の點に至りては各々相異なり、六教會の信する所を正直に語りたれども、採否の事を訪問者の自由に委したり、訪問者は太く其襟度の寛大なるに敬服し、再訪を約して出でたり、然れども訪問者今や感驚感歎の情に左右せらるゝ年にあらず、潜思熟考すること霎時、忽にして自己の間に満足の答を得ずして歸りたるを曉り、我れ今も尙は昨の如きを知りたり、已の訪問したる人々は人物として敬服すべきも、其意見に至りては十八十色、我若し亦別に一の意見を懐か

を、愈出で、愈多々なるに至る、此際何れにか適従すべき、甲説に従はんか乙説に従はんか、然れども彼説は何故此説より勢力ありと謂ひ得べき、須らく先づ比較研究せんにはと、是に於て比較したり、研究したり、然るに其結果己も亦個人的の意見に歸せざる可からざるに至れり、是れ其預期したる所にあらず、若しも宗教にして物品の如きものならしめむ、若しも教會にして商會の如きものならしめむ、自身も亦一個の意見を抱懐して彼の六教會に加入せん、然れども彼は他の商法を爲したり、其一生追求しつゝある所は、時勢の宗教、流行の信條にはあらずして、古賢の東奔西走して追求したる人生命運の真理、現世より來生に到る旅行免狀にてありき、既に頭上白雪を戴く年に達しければ、時非常に切迫し來れり、未來は眼前一步して到るべし、是を以て其良心愈益不安に堪はず、遂に又々出で、他の教會の門を叩くに至る、以爲らく今回は必ず安心立命の道を得んと、不幸にして又々波教會の門に入りたり、宣教師且は篤學好書の人なりと見ゆ、各種の書籍前後左右に或は散亂し、或は堆積す、其頭上は天光に照らされたるが如く、其語調は天啓を得たるもの、如く、嚴乎として語て曰く、吾人今や教義に就て區々の議論を戦はす時に在らず、況んや精神の自由の形式的縲紲に繋るべき時ならんや、今日は是自由の世界なり、獨立の天地なり、不羈の時勢なり、思を念々、語を言々皆自由ならざるべからず、今や凡ての勢力を總

合一致せしめて、新世紀の大事業に之を傾注せしむべき時なり、宜しく學術を以て人知の進歩を計り、道徳を以て風紀の刷新を謀り、福音を以て社會の改良を企てざるべからず、基督教會なるものは即ち此を是れ企畫遂行しつゝあるものなり、其信徒たる我々同胞姉妹兄弟は、宛も自由軍の如く、疾風迅雷の勢を以て、全地の上に破天荒の大事業を行はざるべからず云々と、語り畢つて意氣軒昂たり、訪問者は此滔々の辨に接し、其大言壯語に少しく巡逡したり、曰く學問を講き、道義を改め、社會を一變し、世界を一新する事、快は快なり、壯は壯なりと雖、此快舉壯圖は我れ不幸にして企つる能はず、否生前に見ることも能はず、蓋し是れ我々の子々孫々の事業なり、我の今訪問し來れるは、此の如き壯快の美舉を聽かんが爲にはあらず、極めて單純なる事なり、我は數年來歐米の正人君子に接したるに、其人々は皆一の宗教を信す、是れ或は其弱點迷信より出づる事、今日の時勢には後れたる事なるかは知らざれども、兎に角其正人君子たる事は衆目の視る所、争ふ可からざる事業、我の爲には是れ亦足る、善人たるを得む、我念願成就す、願くは此が爲に貴國の人々の信す可き所、行ふ可き所を聞かん、貴師幸に我が爲に諄々の教を垂れんことを、我の今日貴教會を訪問したるは此が爲のみ、貴師の如き賢明なる師に接するを得たるは、何の榮か之に如かん、宣教師之に答て曰く、貴君若し善人たるを望み、安心して此世より彼世ま

で到らんことを欲するならば、別に議論は要せず、尋常の信仰あれを足ると、訪問者曰くそれ其尋常の信仰こそ余の追求する所なれ、然るに未だ誰も之を我に教へたる者なし、之を教ふる教會果して何處に存在するや、高見承りたしと、是より區々の説起る、曰く彼ならん、曰く此ならん、然れども皆明瞭的確の教を垂るゝなし、各自其説を異にして、而かも各自皆自由主義なるが故に、絶体的に斷言する能はず、且教會なるものは真正なる信徒を以て成立する不可見のものなりと云ふが故に、愈以て其信仰を認むること能はず、遂には語る者も之を知らず、問ふ者も之を知らずして相別るゝに至れりと云爾、波教徒の「教會見る可からず」の議論によるときは、勢ひ茲に到らざるべからざるなり。

昔は有名なる波教信者ギュー氏、「教會何くに在る」の問題を解釋するに譬喩を設けて曰く、教會は何處にも在り、世界到る處に彌滿せざるはなし、十八世紀以來然り、基督は其根なり、當初の教會は其幹なり、爾來組織せられたる幾多の基督教的社團は其枝條なり、吾人は如何なる枝條、如何なる社團に屬するも、教會と云ふものゝ中に在るなり、何となれを基督の教理、精神は、樹木中の液汁の如く、根より枝に至るまで津々として循環し居りて、吾人は何れに在るも基督に交通し得れとなり云々と、此譬喩一見壯なるが如しと雖、惜い哉二個の要件を缺けり、其一は此等基督教的社團は先づ相互に一致を缺き、就中當初の教會

とは全く分離して、枝條の根幹に接續するが如きものにあらざる事是なり、勿論外觀を一見するときは、相互の間に一致の如きものなきにあらざれども、此は必要止むを得ざるより出でたる同盟にして、其實相互に分離獨立しつゝあらんことを欲し、就中當初の幹とは全く斷絶しつゝあるものなり、故に羅旬語にては之を「分派」と稱す、分派とは切斷せられたるものゝ義なり、其二は此等總ての社團切言せむと宗派は、設令今仍基督教的の字を冠すと雖、基督の液汁は最早や其性を變ずる迄疎遠になり居る事是なり、設令基督の根に接屬する枝なりと云ふと雖、神液の茲に來れるものは殆んど別物の如く變化し居れるなり、例へば基督の教理は其初め十個の要素を以て成立せりとせむ、此等の宗派は今や僅に其三四を存するのみ、豈之を以て教會に屬せりと謂ふべけんや、況んや他の一方より此等宗派自身すら獨立分離を欲しつゝあるに於てをや、去れを眞個に是れ當初の根幹より切斷せられたる枝條と謂ふべきなり、分派の語、誣ならざるを見るなり、彼等の今仍生存しつゝあるは其保有せる液汁の爲のみ、然れども前述の如く其液汁も非常に變性し居るが故に、最早基督教的生存を失ひたるものなり、其勢力あり活氣あるが如く見受けらるゝは、商業上、學術上、政治上等の方面より觀て言ふなり、宗教上、道德上より考察するときは、最早や何等の價値もなく何等の活動もなし、若しありとせむ、多少基督教的眞理を保存するに由るが

爲のみ、斯く論じ來るときは、右樹木の譬喩は加教會のみに適應するものにして、波教會杯には到底適合するものにあらず、夫れ加教會は舊教會なりと雖、其成立、其生存鞏固長久にして波教會の如く昨出今没するものとは大に其撰を異にするものなり、彼は波教會の産れざる前にも在り、波教會の滅する後にも在らん、彼は雷に大樹大木に比せらるゝのみならず、實は山上に建設せられたる一大市城と謂ふべきなり、世界の目は均しく之を瞻望しつゝあるものなり、瞻望者の感情の愛憎如何に係らず、之を雲烟過眼視する能はざるなり、愛する者も憎む者も均しく其視線を此一大市城に聚中す、日本に於ては其位地未だ高からずと雖、早晚其頭角を抜くべきや必せり、其發達の速かならんを望む勿れ、大器晚成は人の皆知る所なり。

彼の波教徒は教會議認の大問題を避けんが爲に、往々左の道に出づるを常とす、即ち彼等先づ聖書を取り、之を人に授けて曰く、子若し讀むことを知らむ、請ふ此書を執れ、閱讀再三するとき、自ら其意を了解し、其信す可き所、其行ふ可き所自ら之を知るに難からざらん、彼の教會と稱するものは畢竟聖書研究の爲に相集まる知友の會合に過ぎず、此集會に於ては相互に意見を吐き、議論を戦はし、以て其眞意を共通するものなり、替言せむ、外部の可見的結合なるものは聖書あるのみ、其他に在るべき理なし、萬民均しく承認する

波教徒の可
見的特質に
對する口實

唯一の連鎖は聖書を除て更に物なし云々と、勿論聖書の貴重なる事、必要なる事は之を否定する者なし、設令其中に意義不明にして詳細の解釋なきときは到底了解し得ざる條章あるも、又中には如何なる目的、如何なる精神を以て記されたるかを知了せずんば、人を驚かしめ、人を躓かしむる等の性質のもの之ありとするも、其他は皆高尚玄妙の眞理にして、其奇なるは愚夫愚婦も之を聞て了解し、碩學鴻儒も之を讀んで玩味すべき性質のもの多く含蓄せらるゝ事はなり、去れど其有益有効なるは勿論の事なれども、さりとして此が爲に聖書のみにて一の宗教を創立し且之を人間社會に持續せしむるに足るとは、到底承服し難き所なり、聖書如何に効力ありと云ふと雖、此の如き力はあるべきものにあらず、アリストテレスの政治書、ホッスエの政治書は實に世界の名著、人の皆感歎措かざる所なりと雖、此書爲に人民を開明に進めて以て一の社會を成立せしむるに足るとは謂はれざるなり、若し日本の新法典にして、裁判所もなく、裁判官もなく、隨時紛起する所の疑問難題を立派に解説し得とせむ、洵に都合好き經濟的の話なれども、此の如きは實際に出來得べからざることを明瞭なり、天下公衆の稔知するが如く、書は死文字なり、人之に生命を與へずんば、自ら活動の勢あるものにあらず、書は自ら語らず、書は自ら防かず、書は自ら辨護せず、金科玉條の法典と雖、之を施行する大權なきときは、無力の書たるを免れず、之を應用する可

法官なきときは、自ら裁断する力のあるものにあらざるなり、法典其書をのみ出さむ、人之に反對することも得、之を排斥することも得、又之を粉摧することも得、片々断々にするも自由自在なり、聖書に於けるも亦此の如し、如何に玄妙の道理を載するも、如何に高崇の神言を記するも、畢竟是れ一の書のみ、自ら語る力あるもの、あらざるなり、ルーテル以前に在りて、二百四十八派の異宗ありたり、是れ皆當初の使徒傳なる教會より分離したるものにして、各派共に其分離の原因たる傲慢、嫉妬、野望等を隠蔽せんが爲に、何れも皆聖書の條章に基て口實を作りたり、ルーテル以後に至りては、宗派の産出一層甚し、其幾百千派あるや枚擧に遑あらず、蓋し今日に在りても尙日々産出しつゝ、あれをなり、而して此等の宗派も又々皆口を聖書に藉きて、己を義にせんことを務めざるはなし、是に由りて觀るときは、聖書を以て教會に代ふる能はざるや彰々乎とす瞭かなり、且又若しも見ゆる教會の古來永續せるものなくんむ、聖書の世に存するなきこと既に久しかりしならん、波教徒の手に存する聖書は同教徒より日々片々断々にせられつゝあり、何となれを彼等は自家の意見に適せざる所は自由氣儘に之を減少し若くは之を排斥しつゝ、あれをなり、去れむ彼等の議論に材料を提供するが爲にも、見ゆる教會、活ける教會が彼等の外に立つて、聖書の全文を保存せるもの、存在必要なるを見るなり、何となれを此の如き教會若し世に之

れ微つせむ、彼等は議論するが爲めにも聖書を缺く可けれをなり、況んや彼等の語るが如く信仰唯一の法則として之を手にすることを得んや、彼等は聖書に記載せらるゝ所を悉く信する意さへわれを足れるが如く見做し、若くは此書不思議の道を以て、無言の中に萬事を明瞭的確に教ふるが如く思考すれども、若しも教會によりて其聖書の保存せられざりしを心果して如何ぞや、要するに見ゆる活ける教會以外に如何なる計畫を爲し、如何なる運動を爲すも皆無用徒勞にして、到底權利を以て教ふる教會を省くこと能はざるなり、且他の一方より觀るに、斯る計畫運動を爲して以來三百年後の今日に至るまで異論紛然、自家撞着しつゝ、千變萬化し來れるときは、彼等の或者が痛悔涕泣しつゝ、『否聖書は信仰唯一の法則にはあらず、單に學術の淵藪たるに過ぎず』と結言するに至りたる理由を知るに難からざるなり、此徒の言に據るときは、此一大古典を精讀するときは、高崇なる眞理、有益なる思想、斬新なる意見、尊貴なる感情、珍奇なる文辭事象等を處々方々に認め得るが故に、精神を養ひ、才能を磨き、識見を高め、心田を耕し、襟度を寛うし、言辭等を飾るが爲め此書の如く良好なるもの天下に之なしと云ふ、故に彼等は古代の遺書を繙くと同一の心を以て之を讀み、知識上の滋養となし、學術上の美文良材となさんが爲に使用しつゝあるなり、如何にも聖書中には道徳的觀念、詩歌的言辭、文學的文字等多く之あるが故に、苟も歐語に通

する者は必ず先づ聖書を讀み、此書を以て歐洲文學の淵藪と認め、多く其中より美なるもの粹なるものを借用せんと欲すれども、單に此の如き意を以て聖書を讀むに至れるは全く波教徒の精神より出でたるものにして、現時日本人の中にも波教信者若くは波教賛成者たるものは、聖書を斯の如き意味を以て採用しつゝ、世の知識界、文學界を補益せんことを務めつゝあるなり。

勿論斯の如き意味にて聖書を用ふるも、其益鮮少にあらざるは言を待たざれども、斯くては最早や其中に基督教的信仰は其影だに見ゆるに至れるなり、斯くの如くんを聖書も孔夫子、プラトン、シセロ等の遺書と異なるなし、設令其中より個人的の阻勉によりて拔き得たる教理を以てて基督教なりと稱するも、其所謂基督教なるものは一の學問たるに過ぎず、即ち歴史的哲學的文學的學問と謂ふべし、宗教とは謂ふを得ざるなり、距今二百五十年前、有名なるボツヌエ氏之に就き夙に論理的の言を放つて曰く、波教徒が其自由主義より出發するときは、其歸着の點は純然たる偏理説即ち總ての信仰を破らす否定する説是れなりと、千古の知言と謂ふべし、今日波教徒の多くは最早や基督教的信仰を有せず、隨て最早宗教上の信仰を失ひたるものなり、彼の宗教と迷信とを一視混同せんと欲する者の如きは、之を以て一大進歩と見做し、人間の精神は總ての恐怖、總ての迷信を破却したりと得々誇稱す、然

れども又其中の或者は人間に取りて一大缺陷は信仰なきに在りと見做し、道理に基ける確乎たる信仰なきときは、心を安んずるに足る希望を懷く能はず、而して希望なきときは、人として此世に生存する能はざるものなりと主張す、果して然りとせば、道理に基ける確乎たる信仰、吾人の所謂合理的信仰と稱し來れるもの、必要缺く可からざるは、彼等の言に據りても瞭かなり、然らむ則ち其合理的信仰の有るや無きや、有らむ何處に存するやを研究するは、人生必須の問題と謂ふべきなり、吾人請ふ之が研究に従事せん、讀者姑く堪忍せられよ、順を逐ふて歩々相進まん。

本論(下)

普遍常住

人文進歩に就き、五十年來一の奇説流行せり、此説や初め歐洲に行はれ、次に日本に傳はり、今や世の學者頗る之を珍重すれども、古人の全く知らざる所にして、今人の中にも其多くは未だ之を知らざるべし、現世紀に至るまで人々人文の進歩に就き多く語りたり、又多く働きたり、然れども當時の人々は進歩するものは單に吾人々間のみなりと思へり、即ち其知識、其學才、其技藝、其德行、其力、其富等の古より増進する程度に従つて、之を小に

昨是今非の
譯論

しては個人、之を大にしては國民なるものが進歩すと信じたり、勿論其時にも學術、技藝、道德、福利等の間接に進歩し來れるを認めざりしにあらざ、何となれを未知の事物多く知られ、傑作のもの多く出で、善徳の業多く行はれ、幸福の道多く發明せられたるを以てなり、然りと雖個々人々を其形体其支体となす人類と稱する一大全一の者が、天性固有の力を以て、自ら必然の進歩を爲し、而して其進歩の性質たる、思想をも眞理をも變化せしむる力ありて、昨の是今の非、古人の眞今人の偽と云ふが如き事象を現するものなりとは、夢寐にだも想像せざりしなり、此説や現世紀の中心に當り、獨逸の學術的雲霧の中より出生し、今や斬新なり、珍奇なりとして頗る流行す、古人の眼を以て見む奇怪此上なけん、昔人の言に據れむ物皆思想と眞理とによりて進歩するものと云へり、眞理其物が進歩の發展力に服すと云ふが如きは、昔人の腦を逸したる新説なり、吾人は今此新説を駁論せざるべし、事全く無用なるを知れむなり、蓋し此新説を渴仰する者の眼には、吾人の奇怪とする所も極めて合理的と映するが故に、之に就て議論するは愚の至りなり、彼等の所謂進歩發展と吾人の所謂進歩發展とは未だ同一の點に在らず、是れ或は彼等が吾人よりも進歩發展せるが爲なるべし、阿々。

眞理の特質

此新説の一般の輿論となるまでは頗る長久の歳月を要することなるべけれど、余は姑く從

來一般人民の正意誠心に基て吾人の議論を繼續せんと欲す、其正意誠心に基て立論するときは、眞理の性質たる東西共通、萬古不磨のものたり、洋の東西によりて渝り、時の古今によりて變するが如きは、以て眞理とするに足らざるなり、眞理は故郷なく歳月なし、故に到る處に異域物せらるべきものにあらざ、何れの處何れの時に至りても始終同一なり、人々此に就て區々の議論を戦はし、或は之を識認せざるも、或は之を識認するを欲せざるも、或は又之を蔑如せんと欲するも、眞理其物に於て何かあらん、然らむ眞理其物は畢竟何ぞや、苟も考慮を有する者ならむ、三尺の童子と雖之を知らん、何となれを眞理とは事物を有りの儘に知了する事なれむなり、是故に苟も事物にして其性質を變換せざる限りは、其之を識認したる知了も變更すべき理なきものなり、知了にして變更するあるは、初めより事物を有りの儘に識認したるにあらざりし證なり、白日に白色の花を見るが如し、其花にして色を變せずんば、何時までも白色ならん、之を白色ならずとするは、觀者の眼に病あるに由るなり、病眼を以て之を觀る、宜なる哉他色のものと見、若くは全く之を認むる能はざるや、眞理に對しても屢此の如き事象あり、吾人の眼病めり、故に或は之を認めず、或は之を認むるを欲せず、或は之を知るを恐るゝことあるなり、理由明なり、一たび眞理を知るときは、之に準じて行を律せざるべからざれむなり、然りと雖若し吾人が正意誠心以て

眞理の前に對するあらた、嗚呼是れ何等の樂ぞや、就中今日吾人の身に感じつゝある喜怒哀樂の情杯が、二千年乃至三千年前の昔に在りて、早や既に希臘、羅馬、漢土等の學者の口より立派に言顯はされぬるを見るべきの如きは、何事の快心をや、現今の自稱進歩學者は此等古人の遺書を讀みたることなく、漫然以て陣腐と爲す、抑々以て區別して論すべきなり、學術の發明發見杯に就ては、勿論彼等古人は退歩し居たり、彼の偉人物ニウトンすら其天才智能如何に深遠なりとするも、今日より見れど學校の一年生にも及ぶる所あらん、孔夫子は如何に大聖人と稱せらるゝも、今日の新聞記者より見れ、随分と退歩せる人間なるべし、其時より今日に至るまで事局大に改變したりとするも、其間に一毫も損益せざる眞理あるを知らざるべからず、人間社會に在りては其風俗、習慣、法律等亦大に其面目を改めたりとするも、人性其物に至りては依然同一にして、古人の遺言は明に之を證明するを見ん、此點に就て考ふれば、三千年以前の昔に眞理とせられたる所は、三千年以後の今日に至りても同じく眞理たるを失はざるを見るなり、今日吾人日常の經驗は明に教へて曰く、人の生るゝ、人の苦む、人の死する、其誘る、其貪る、其嫉む、古今全く同一轍に出づと、異なる所は單だ其名稱、言辭、被服のみ、人間の人間たる所以は千秋萬古同一なり。若し人あり茲に除外の議論を爲すあらん、余は之に答ふるの愚を學せずして、單に歴史を

見よと言はんと欲す、答は其中に歴然たれどなり、若又古今人種を異にすと唱ふるが如き論者あらん、直に人類學上に於ける古來の著書を繕けと言はんとす、其中には人相、知識、道德等の事象詳に記載せられぬれど、今日より一々比較研究するを得るなり、然らんと則ち余は斯る事柄に遮断せられず、直に以て斷言するを得、曰く人類の爲には眞誠なる宗教は古今同一なるべしと、何となれど古人も今人も其性質異ならず、其運命も亦隨て殊るべき理なければなり、此議論は波教徒の宗教を時勢に適合せしめんと欲する者の議論よりも一層正理に適合するものにあらざるや、彼の國土により、時代によりて各々特種の宗教なかるべからず杯と唱道する論者の如きは、思はざるの甚しきなり、今茲に三人ありとせん、均しく其國を同らし、其家を同らすとせむ、其性質、其人種の同一なるや明かなり、然るに其三人の中甲は死後高天が原に到るべき説を採り、乙は地獄極樂説を信じ、丙は死後萬事休す、靈魂と稱するものゝ如きも一片のガーズと消失せん云々の主義を執るありとせむ如何、三人の中眞理は果して其誰に在りとなすべきや、之に反して四海同胞、世界一種、故に萬民其運命を同らすと説く者あらん、是れ豈一層單純にして而かも一層合理の説にあらざるや、此點に就ても各自自由主義を執るべしと云ふ口實の下に、各人其好む所を氣隨氣儘に信するを得と言ふあらん如何、そは勝手なるべけれを何んとも言ふを得べし、好まむ深淵に身

を投ずることも得、蓋し是れ又自由なれどなり、然りと雖如何に自由なれどとて、誤りば誤りなり、死後の運命に就て一步を誤らば、其誤りや終焉挽回の道なきを知らざる可からず。

教會の天職

余は茲に於て又々吾人の宿論を繰返さる可からず、曰く若し上天の神が、世界萬民に人生終焉の目的を指教して、其之に到達する方法手段を明示せんが爲に、一の教會なるものを地上に創設したりとせむ、同教會は神の指教明示したる所を一毫も改變損益し得べからずと云ふ事は彰々乎として瞭かなりと、蓋し自由任意に之を改變し之を損益するあらざれば、既に神の教たるを失ひたるなり、人間は如何なる大人物と雖、神の教の要理を變更する權利なきものなり、況んや新たに一の教を創立するが如きは、尙更其權内に在らざるものなり、蓋し此が爲には先づ其性質と其運命とを改更せざるべからず、然れども自己の性質運命を變更す、豈人間の能くすべき所ならんや、千萬の人々が相集まりて、今後人間は永久不滅なるべしと決議すとすも、今日實際に不滅物ならざる時は、斯る決議の爲に永久不滅となるべきものにあらざるなり、若又今日實際不滅物なるときは、今後は人間も死後消滅して其跡を絶つに至るべしと議決するも、其議決の爲に果して消失すべきものと爲り了すとは謂ふべからず、教の要理、信條等亦全く此の如きものなり、人間の議論杯によりて改

損益せらるべきものはあらざるなり、是故に一教會の代表者が來りて吾人に教ふるに當りては、吾人の之に開口第一に質問すべき所は、其人の意見如何と云ふにあらざり、其人物の價值如何と云ふにもあらざりして、神の吾人に教へたる所如何と云ふに在るなり、蓋し教理問題は人の如何ともする能はざる所、賢者の意見も此點に就ては愚者の意見と異なるなし、人の意見の用を爲す所にあらざるなり、神の人間に教へたる所を知らんと欲するに、道唯だ一、其教へたる當時に遡源する事是なり、替言せば、當初より今日に至るまで東西到る處に信奉せられ、遵行せられたるものは何ぞやと云ふを追究するに在るのみ、若し世に眞誠なる宗教ありとせむ、若し世に神より設立せられたる教會ありとせむ、其特質宜しく當さに此の如くならざるべからず、其宗教にしても其教會にしても初より世界共通萬古一貫の性質のものならざるべからず、去れど教會の教の吾人に採用信奉せらる、所以は、其創立者の教にあらざりし所は、一毫も之を承認せずと云ふに在るなり、時勢國情等によりて變更増減せらる、もの、如きは、人間より出でたるもの、神より出でたるものにあらずと云ふ明徴なり、而して其創立者の果して神なりしや否やは、歴史問題なり、事實問題なり、余は『事跡以後以後之歴史』に於て詳に之を論じたり、既に此問題にして一決したる

加波二教會の眞理に對する態度

以上は、其教會の教を信するは、即ち是れ其創立者たる神を信するなり、其教會の掟に従ふも、同じく是れ其創立者たる神に従ふなり、故に其信仰も其服従も合理正確なり、何となれを神を信じ神に従ふは、正理に適合することなれむなり。

加教會の主義と波教會の主義とは正反對す、前條記載せる如く、波教會の主義は自由主義なり、加教會のは權利主義なり、波教が現今の時勢に適合し、現時の青年子弟に歡迎せられ、就中矯激なる自由論者に贊同せらるゝものは其主義に由るなり、然れども其教會の統一を缺き、接續を缺き、持久を缺く所以のもの亦其主義の爲なり、同教が其自らをも定義する能はざるも、亦是れ其自由主義に職由せざるをからず、波教其物は如何と其實体本質を定説することは殆ど不能の事なり、之に適切なる語を求めむ、それ或は渾沌か、何ぞ其相互に紛々たるや、否自家一身に取りて考ふるも、前後左右に何を其撞着の多さや、加教會は之に反して元來權利主義なるを以て、教理に就ては當初より世界到る處に信奉遵守せられたる所の外、一毫も改變損益せず、然れども其今日の人々に歡迎せられざる所以は正しく此權利主義に由るなり、同主義は之を一見するときは、今人の熱狂する進歩主義に反對するが如く見受けらる、然りと雖進歩の何物たるやと眞理の性質の如何を詳に講究するときは、加教は其主義如何に權利的なりとするも、決して眞正の進歩に反對するもの

にあらざるを知るなり、同教は人生必須の大眞理の改變に反對するに過ぎざるなり、此大眞理を増減損益せんとする者あるときは、一步も假借せざるなり然れども之を以て進歩の障害なりと謂ふべけんや、余は『學理無能論』に於て之を詳論したるが故に、茲には蛇足を添へず、眞理の性質に至りては本書に於て畧記したる所を見ても充分ならんと信す、要するに加教會は其主義によりても眞理の特質を示すものなり、何となれを世界偏通、萬古同一と云ふは同教會の主義にして、是れ亦正しく眞理の眞理たる所以なれむなり、是故に加教を通稱して加教的眞理と云ふを常とするなり、今日基督教會の名を以て世に立てる幾多の教會の中に、今仍基督の教の全さを保持するものは、獨り加教會あるのみ、其主義を見ても、之を知るに足るなり、何れの國、何れの代に至りても基督及び其使徒の教へたる所を一步も枉げざるは、加教會の主義なり、基督の渾然たる教にして、若し同教會にあらずとせば、吾人は其何れに在るやを知らざるなり、故に曰く權利主義も亦是れ一の明證を爲すものなりと。

上下幾んど二千年を隔離すと雖、加教會と基督との接近は極めて密なり、故に病める人の眼は加教會に接するや否や、直に神の尊前に出でたるが如き心地して、驚怖惜かず、宛も病眼の人が赫々たる太陽に面したるときに如く、其光を遮断せんが爲め、隠蔽せんが爲め、

加教會は教
理を變更せ
ず

種々の障礙物を提供す、種々の障礙物とは何ぞや、露骨に之を言へど、加教會に對する幾多の難題、詰問、口實等即是なり、余は既に其大半を辨明答解したり、今又本篇の問題に關するものを辨解せんと欲す。

言ふ者あり、曰く加教會は其教理を變更せずと云ふは、偽りなり、今日に至るまで絶えず新たに教理を定義し、信條を増益しつゝあるにあらざるや、國土により時勢によりて幾多の式例を變更したるにあらざるや、祈禱文、虔信、否時として迷信的慣行の日に月に増加し來れるを忘れたるか、加教會にも爭議軋轉等あるに想到せざるや、加教徒の異教異端と稱する所のものも亦是れ其教會より産出したるものにはあらざるや、古今同一、世界共通、萬世不易と謂ふ所以、吾れ其意を丁せざるなり云々と。

此等の難問に答辨するは極めて易し、請ふ余をして簡言以て之が辨明に當らしめよ、先づ第一に注目すべきは、其新たにする所のものは教理にはあらざるして、其定義のみなる事はなり定義するは發見するにもあらざれば、改變するにもあらず、又増益するにもあらず、單に經界を畫する迄のことのみ、然り而して經界を畫するは、既に在る事物の上に就てのみ行はるゝものなり、無き事物を經界することは出來得べからざることなり、地主が隣人の不義を防がんが爲に、其土地の經界を畫するとも、爲に其土地を改變増長したりとは謂ふ

式例の變更
は教理に關
せず

能はず、單に其境界を一定したる迄のみ、界線なるものは何れの處より何れの處まで自家の所有に關するやを定めて、他人の權利の停止する所を明にする爲のものなり、加教會が教理を定義する亦全く此の如し、人生必須の教理は神より授托せられて其所有物となれり、之を保持するは其分なり、然るに人來つて或は之を否定せんとし、或は之を改變せんとし、或は又之に自己の私説を挾まんとして、教會と爭端を開くに當りては、教會は直に定義と云ふ界線を畫して其所有に係る神の教理を保有せんとするものなり、即ち何れか是れ神の教理にして何れか是れ人の説なるかを確定辨明して以て、其遺産を完全に純潔に守らんことを務むるなり、然れども此が爲に其所有の實を改變損益したりとは謂ふ能はず、定義は決して改變損益の意にあらざるなり、教會の意も亦其所有の産を増殖するにあらず、若し其教理にして人の攻撃する所とならずんば、加教會は必ず之が界線を畫して定義するが如き事を爲さざらん、同教會が定義を新たにして、多々益々辯するに至るも、畢竟新たなる攻撃が四方八面より起りて之に迫るが爲め、止むを得ず益に出づるものなり、然れども其多々ならしむるものは教理其物にあらずして、其定義のみなるを忘る可きにあらざるなり。

若夫れ式例の變更に至りては、詳しく之を辨明するに及むず、抑々先づ式例とは何ぞや、

言動若くは他の記號を以て、心中の思念、感情等を言顯はす事のみ、其目的は如何、宗教上に於ては二あり、信仰の見えざる容体を眼前に歴然たらしむる事はれ其一、信仰其物及び其他の心情を言動の上に發露する事はれ其二、是に於て乎一考を要す、宗教的思念心情を發顯表白するには、是非とも唯一の記號、唯一の方道のみを以てすべきものなるや否や、人間の感情を顯はすに於ても、吾人は其方道の千萬なるを見る、獨り宗教的のものに至りては唯一のに限らざる可からざる理由何くに在るや、然らば則ち式例の多々なるは教の同一を守るに何の妨が之あらん、種々様々なる外容の下には内部の思念感情は依然同一なり、果して然りとせば、民の風俗習慣等時勢に伴れて變換し、往時の式例等最早や其意を失するに至り、若くは往時の如き尊敬を惹起す意を有せざるに至るとするも、教其物を改良するには及せず、式例のみを改變すれば是れ亦足る、波教徒は此點に就て大に誤れり、彼等は時勢に應じて宗教其物を改變せんと欲す、故に宗教を視る宛も衣服の如き奇想を懐くものなり、思はざるの甚しきもの、謂はざるべからず、然りと雖波教徒は式例を省く主義なるが故に、彼等に就て式例を説くは無用なり、余は但だ時勢によりて改變すべきものは式例にして、宗教其物にあらざるを以て、一言彼等に注目せしめんと欲するのみ、式例を改變するも、他の信仰、他の感情を表明するが爲にはあらず、同一の信仰、同一の感情を他の方道に

祈禱文及皮
信的慣行増
加の辨

によりて表示する途のみ、是れ亦彼等の留意す可き所なりとす。

彼の祈禱文、虔信上の慣行等に至りても、式例と同じく論すべきなり、此等祈禱慣行の目的如何を究むれば事自ら瞭かなり、如何なる宗教にても斯の如き祈禱慣行はあるものなり、何となれば一の宗教を信仰するものは、其信仰の如何に係らず、神を一の實在的の者と見做して之を尊信するものなり、而して祈禱文は即ち是れ尊信の義務を竭す爲に設けられたるものにして、慣行の之に隨伴するは、尙一層祈禱文を歴然有効ならしむるが爲なればなり、蓋し人間は自然此舉に出るものなり、純然たる精神のみの者にあらざるを以て、其思ふ所、其感ずる所、必ず之を外部に發露せざるべからず、設令務めて之を蔽隠せんと欲するも、天性之を容れず、自ら發露するに至るものなり、思ひ内に在れを、發して外に顯はる、は、蓋し天性自然の情なりと謂ふべし、而して他の一方より之を見るに、内部の心情も外部の言動によりて發表せられつゝ、あらずんば、永く繼續せられずして早晚冷却するに至ること、是れ亦日常の經驗によりて、公衆の普く知る所なり、我は精神的に神を信すと云ふと雖、其信日々言行の上に顯はされざるべきは、遂には消失するに至ること、人々自ら身に省みて驗するを得べし、凡て此の如く、憤怒と遺恨とを除くの外、多くの心情は皆外部の行動に繰返されて、益其熱を高うするに至るを記せざるべからず、憤怒遺恨と雖、往々は此の如し、

但だ此二者は他の心情と異なりて、外部に發露せずして、永く胸中に潜め置くことを得と謂ふのみ、去れど外部の祈禱慣行等は内部信仰の證據ともなり、支柱ともなるものなり、今茲に人あり、君に忠なり親に孝なりと雖、其忠と孝との行に發すものなくんを、君たる者親たる者焉を之を信せんや、人の眼に見ゆる神に對しては、最も其然るを見るなり、果して然りとせむ、忠孝の言動が忠臣孝子に必要なが如く、虔信的言動の人間に必要なこと言を待たずして明なり、而して彼の祈禱慣行は即ち是れ虔信的言動なりと知らずや、加之ならず、今之を人性と道理とに照して考ふるに、極めて能く之に適合するを見るなり、論者は之を以て迷信と混同視するが如くなれども、迷信とは大に異なり、迷信は正しく人性と道理以外、若くは之に背反して行はるゝものなり、此の如き行動は人々相互の間にも日々顯はるゝものなり、其意を解せずして之を行ふは、盲者の禮讓に外ならざれども、人は毫も之を咎めず、獨り神に對して少しく其影跡の見ゆるあれを、直に迷信々々と叫んで止まざるは何ぞや、人間相互の間に其尊敬を言顯はすの道一にして足らず、一定の法令によりて規畫せられたるものと、習慣によりて行はれつゝあるものとの外に、奸知に長けたる精神、温厚の心、必要、諂諛、及び詐欺術策等が人の心を釣り、人の氣に召され、人の情を惹かんが爲に日々工夫案出する所の方道果して幾許ぞや、然らむ則ち神と人との關係に於

けるときのみ、何ぞ其れ此の如き酷評を下さんとするや、人様を敬ふときには幾多の禮讓ありても可、神を拜むに當りては斷じて其多きを許さずとは、餘りに酷ならずや、否是れ實に人性に戻るの注文なれを、到底實際に行はるべきものにあらざるなり、加教會が其習例と其制令とによりて、信者相集りて神を尊拜するとき、之に一定の祈禱慣行を命ずるは、毫も怪むに足らず、人性に適合する事を命ずるのみ、世上に行はるゝ所を命ずるのみ、苟も人と人との間に此の如き慣例の多々なるを見む、神と人との間に多々益増出するも、亦何ぞ咎めんや、世に於ても君王に拜謁する、自ら一定の禮あり、教會に於て神に拜謁する、豈亦一の公式なからんや、是れ即ち祈禱慣行の因つて起る所以なり、然り而して此等祈禱慣行等は太古より大改變を経て多く易りたるものにわらず、勿論時勢に應じて多少の改變は行はれたれども、其改變たる終始教理に適合せるが故に、基督教の大本に毫も關するものにわらず、諸を日本國に譬ふれを、明治維新以來朝廷に新たなる式例入り來れりとするも、爲に日本臣民忠君の心に毫も損益せざるが如きなり、然りと雖如何に九重雲深き宮廷と雖、御親子御皇族方の間に毎々嚴然たる威儀格式のみ行はるとせず、時としては御打ちとけ遊むされ御恐悅あらせらるゝこともあるべし、其節は單に御尊嚴に觸るゝ事なく、御無禮に當る等の事なきを心掛け居るを以て足れりとするが如く、加教會に於ても亦之と同一

の事あり、神を尊拜し、神に奏上するときには、無論鄭重莊嚴なる一定の公式ありと雖、其外に又信徒が隨時個々別々に神に拜謁することあり、蓋し其身に必要なものあり、若くは其心に信念の起るありて然るなり、其時には必ずしも一定の敬神の道に頼るを要せざるなり、其所念、其方道等必ずしも教會法令の命する所あるを要せず、單に上天帝の尊嚴に觸る、所なく、下正理に適合せざる所なきを以て足れりとす、此點より觀察するときには、加教徒の慣例に多く迷信の跡あるが如く思はる、ことありと雖、此は皮想の見を以て裁するが爲にして、裁者は其慣例の意義、本源、目的等を究めざるに坐するなり、斯る事柄に就ては、裁判を下す前に、須らく慎重の注意、周到の講究あらんを要するものなり、此に就き加教會の規定は即ち左の如し、事信仰上の教理に關せんか、一字一句たりとも其理由を掲げずして人々に信せしむることなし、事道徳上の行動に關せんか、是又正當の理由なくして一事をも人々に命することなし、否一事をも行ふを容れざるなり、是れ豈迷信とは正反對にあらざるや、若しも萬一新奇なる慣行の偶然入り來りて信徒の間に行はる、が如き事あらんか、是れ固より信徒の愚暗、迷信、不用意より起ることにして、加教會は之を認むるや否や直に之を非認し、排斥し、教理と正理との名を以て、裁斷を行ふるに躊躇せざるなり、諸を日本帝國に譬ふれば、眞正愛國忠君の人士は、彼の矯激なる愛國心、頑陋なる愛國心、及

加教會の異
教離教に對
する處分

び忠君々々と呼び過ぎる諛諛的迷信的尊王心の却て國家に害あるを見て、之を拒否排絶するが如きなり、加教會が信徒の宗教心に就て裁斷する事亦全く此の如きものなり。論者の言には加教會に於ても争端絶えず云々といはるは、是れ事實なり、吾人毫も之を否定せず、蓋し斯る争端は今後も永く絶ゆる期ならん、何となれば人の教會に入るや、爲に言論の自由を失ふものにあらず、其己れの善とする所、是とする所あらん、自由に之を主張することを得、此が爲に教會は當初より今日に至る迄如何なる影響結果を蒙りたるやと云ふに、無論屢揺動せられ、屢擱殺せられたるに相違なければども、爲に其教理の全体が缺損せられ若くは其幾分が改變せらるゝ等の事ありたるやと云ふに、斯の如き事は毫も之なし、宗教上の問題に於て異論異説の起りたるとき、加教會は一定不變の定規によりて之を裁せり、神の眞理の全きを純潔に保有するは、同教會の主義なり、天職なり、同教會は此主義天職に極めて忠實にして、新たなる異説の起りたるときは、必ず先づ其受托せられたる東西共通古今同一の大眞理に協合するや否やを尋究す、其尋究の結果愈二者投合せざることを確定したるときは、其新説首唱者の如何なる人物に係るとも、斷然之を排絶す、是に於て乎離教異端なるもの起るなり、然れども記せよ、此離教異端なるものは最早や加教會内のものにあらずして、加教會以外のものなるを、又記せよ、之を産出したるものは加教會其物

にあらざることを、加教會は寧ろ之を否定排斥して打消したるものなり、諸を有機体に譬へんか、宛も吾人の肉体が不消化物若くは害毒物を採入せずして直に之を吐出せんとするど毫も異なる所なきなり、加教會は渾然神の眞理を以て成立する者、之に適合せざる異端邪説入り來るときは、直に之を吐き出すものなり、不思議なるは加教會の組織成立の堅牢鞏固なる事なり、權勢隆々、生力津々、活氣躍々として、此等分裂乖離の原因となるもの掘起するも、優に之を排斥するの力あるものなり、勿論多くの異端は其初め加教會の懷の中に起りたりとするも、之を以て其罪を同教會に嫁する能はざるなり、一國の中にも政黨政派の分裂すること屢あれども、國內に生れ出でたりと云ふを以て、其罪を國家に歸する者はなし、加教會の中に産出する離教異端に就ても、亦全く此の如きものと知れ、此等が加教會より分離して社會に隱然一の教會を形成したるときは、設令加教會より出でたりと云はるとするも、加教會之を産したりとは謂ふ能はざるなり、此等は既に加教會より切斷せられたるものなり、破門せられたるものなり、何ぞ之を以て罪を加教會に嫁するを得んや、論者は加教會のものにあらざるものを引き來つて、強めて加教會を攻撃せんと欲す、誤てるなり、若夫れ彼の波教會に至りては、事狀大に之と異なり、同教會内に起る異論分派等は、加教會に於けるが如く、同教會の主義に反對して起るものにあらず、却て其波教主

義に原因して起り出るものなり、波教主義は自由主義なり、而かも個人的自由主義なり、隨て各人皆已に適合せざる所を排斥するの自由あり、而して波教なるものは其全体に就て考ふるときは、自己の教會に起りたる分派異論等を拒否するの權利なきものなり、何となれを自他何れも皆同一の自由主義より出づればなり、自由主義を提供して、同主義より發出するものを排撃せんと欲す、是れ何ぞ原因を置て結果を答むると異ならんや、萬一其主義に原因せずして、個人の傲慢、野望、貪欲、淫逸等に原由して起るありとするも、此等の原因を隱蔽するが爲に、口を自由主義に藉くことは極めて易き事なり、又此時は自己の發生の當時と同一の主義より起れりと云ふを見て、勢ひ之を奈何ともする能はざるなり、斯く論じ來るときは、吾人の前述したる所は、論理的にも歴史的にも愈明に證明せらるゝに至るものなり、曰く加教會は其主義によりて東西共通、古今同一の特質を有す、何となれを公然認定せられたる權利を以て、教理の全さを保持すれをなり、之に反して波教會は同じく其主義によりて渾沌定りなく、變遷極りなきものなり、何となれを一定不變の教理もなければ、萬民公認の權利もなければなり、權利主義と自由主義は、其簡單なる語を以て萬事を裁斷す、加教會と波教會の區別全く茲に在り、兩教會の根本的相違全く茲に在り、世の近眼者流は權利の二字を聞て壓制を夢み、自由の二字を耳にして快哉を呼び、而して

其想ひ未だ曾て茲に到らず、悲むべきなからず。

是を以て今日の人々は多く被教徒の精神に鼓吹せられて、痛く加教會の主義を排斥するものなり、彼等は言宗教上の道理に涉るとき、權利の二字を語るを容れざるなり、宗教的權利の語は彼等の爲に言論自由の大敵と思はるゝなり、故に權利の二字を耳にするや否や直に壓制と呼び殘忍と叫ぶを常とす、是れ亦論理上是非斯くの如くならざるべからざれども、彼等は此事に想到せざるもの、如し、彼等が言論自由、言論自由と叫ぶは、其言論を吐くに適度を守る能はざるに職由する事を考へざるもの、如く然り、加旃ならず彼等は自由々々と叫びつゝ、自由主義の大崇拜者なるにも係らず、自己の説を飽迄も主張せんと欲して、成るべく多數の人に之を採用せしめんことを是れ務むるは、洵に奇怪なる現象と謂ふべきなり、自ら自由を重せむ、何故人にも自由を重せしめざるや、爾等自由ならず、人も亦自由なり、爾等は人に自己の説を採用せしむる權利なきものなり、夫れ世界に幾んど三億に近き人々が、人生必須の大問題に就て、東西相一致協合するあらむ、何故之を譴責して、其一致を破らんことを務むるや、此等億萬の加教徒も亦皆見る所ありて、自由に一致したるものど知らずや、爾等或は曰はん、是れ壓制殘忍によりて斯く人々を一途に束縛するもの、固より其意志にも、亦其理性にも反背する所云々と、是れ大なる誤なり、寧ろ却て其理性明に

照されたるが爲め、人生必須の大真理に就ては、是より外に明瞭的確の道なしと識認して、遂に茲に一致するに至りたるものなり。

論者或は曰ふ、加教徒は容易に人を容れず、寛裕の雅量に乏し云々と、此は區別して論せざるべからず、説を容れざる事か將た人を容れざる事か、若し人を容れざる事なりとせむ、敢て問ふ、加教徒は誰を容れずとする、同教徒は誰に悪言を放てるや、此點に就て加教徒と波教徒とを兩々相比較せむ、其罪せらるべきものは前者にあらずして、確に後者なるを認めん、加教徒は如何なる人にも尊敬と親愛とを失はざるなり、如何なる不幸薄命の者と雖、鄭重親切に之を遇す、舊怨宿敵に對しても、敬愛の道を忘れざるなり、若し又説を容れざる事なりとせんか、然り、加教徒は反對の説を容るゝが如き愚を學ぶざるなり、此點に就ては、波教徒と大に其見を異にす、同教徒は有るを有りとし、無きを無きとし、眞を眞とし、偽を偽とす、有無を同一視し、眞偽を混同視するが如き事は決して之を爲さず、其真理なりと信する所は飽迄も之を主張し、其偽なりとする所は、飽迄も之を拒否す、彼の波教徒一輩の如く都合によりて隨意に之を肯否し、任意に之を否定するを得とせず、肯定すべきものは、萬古肯定すべく、否定すべきものは、永遠否定すべきものと固信す、是を以て其真理として信する所は、言語を以て行動を以て公然之を發表す、其發表や亦絶

加教會は果して人を容れざるの雅量なき乎

体的なり、其信仰は確立一定し、其思想は明瞭精確、其言辭は天然固有、若夫れ異教異信の人と相交るや、凡て自家の所信所説に正反對するものは、悉く之を避くるを常とす、是故に信條は形式のみと云ひ、眞偽は見倣のみと云ひ、教義の一致は一事に就き同時に然りと諾する人と否と拒む人との間にも行はるべきものと云がふ如きは言論は一切採用せず、蓋し此の如き事は奇怪千萬、不合理至極にして、嘗に眞正なる信仰と相容れざる而已ならず、普通の常識にも相合はざる事と思へんなり、然り、一事一物が同時に有りて無きことを得ざるは、哲理上第一の公理なれをなり、此點に就ては加教徒たるもの如何に寛裕の量に乏しと叫ぶるも、之に同意すること能はざるなり、無理なる事には同意せしむるべからざる頑固者なり、有を有とし、無を無とし、肯定すべきを肯定し、否定すべきを否定するを主義となし、其信する所の宗教的眞理を己の爲にも人の爲にも固く執つて動かざる者は加教徒なり、蓋し此の如くならずんを、假定論、任意説のみにして早晚眞理なるもの、無きを斷言せざるべからざるに至るを知悉すれをなり、今日の人々の知識は薄弱脆柔にして場合によりて眞偽をも混同し、都合によりて善惡をも同一視するに至るに當り、獨り加教會のみ毅然其中に立ちて眞偽善惡の區別を斷言公證しつゝ、人知を精的ならしむるものなり、此點に就ては加教徒たるもの決して時勢に伴はず、流俗に諂はず、若し之を以て人

を容れずと言はば、余は斷乎として然りと答へんのみ、蓋し是れ論理なれをなり、普通の常識によりても宜しく此の如くならざるべからざるなり。

今又之を他の方面より論ずるに、若しも加教徒が其教義、原理に就て、此の如く執らずんば、替言せむ、基督教の眞理を金城鐵壁の中に保全するを務めずんば、波教會の如き片々たるものは果して如何に成り行くべきかを考察せざるべからず、波教會には一定不變の信條あるものにあらず、各自皆隨意的信仰を講きつゝあるものなり、總ての教會の相共に一致すべき信條なるものは一もなし、若しありとせむ、相共に一致して加教會に反抗せんと云ふ信條のみ（若し之をも信條なりと云ふを得む）、彼等の一致する所正しく茲に在り、彼等畢生の事業は、加教會の保全する教理を攻撃して今日其一を抜き、明日其二を倒さんと企圖するの一事に在り、此際若しも加教會が彼等の望むが如く、其教理を固執せずして、彼等の所謂寛裕の雅量を懐かんか、彼等の片々たる教會は直に一大敵を失ふて、相互の間の爭論軋轢のみの爲め、日ならずして全滅の悲運を見るに至らんのみ、其片々たる教會ながらも、辛ふじて此世に生存し居るを得るは、全く加教會と云ふ大敵彼等の眼前に在りて、其片々たる團體を一致せしむるに由るなり、若しも此大敵にして彼等を容るゝに至らん、最早波教會なきに至るなり、隨て基督教も滅亡し了するに至らん、然らむ則ち波教をも活かし、

基督教をも保全するものは、却て加教會の『人を容れず』と訴へらるゝ所に在るを見るべきなり、加教會が波教會を此世に生存持續せしむとは、奇怪の事と思ふ人あらん、然れども其實全く然るなり、何となれを加教會より假り得たるものを以て、同教會に反抗しつゝ、生活すれをなり。

加教會の國
家人民に與
ふる一大補
益

尙一步を進めて論ぜん、余は前條に加教會は眞偽善惡の大原理に就て、時にも伴はず人にも係らずして、推移と云ふ事を知らざるを論じたり、然るに此事は人知に取りても社會に取りても一大補益、一大貢獻たる事を考へざるべからず、其故は何ぞや、請ふ先づ社會の何物に基立すべきやを考一考せよ、少しく思を潜めて考ふる者は、其少數の原理の上に基立するを認めん、之を基礎的眞理と云ふ、蓋し人間社會の大基本なれをなり、而るに此大原理は果して何處より來るべきものなるや、其大半は國民教育より出で來るものなり、人生れながらにして人生必須の眞理を胸中に懐くと雖、此眞理や教育によりて照らされ確められずんば、自ら明瞭的確とするものにわらず、茲に於て乎教育の最も必要なる部分は直接人の理性に關するものなるを知るなり、西人之を『原理の學』と稱す、哲學即是なり、哲學は國民の精神界に流通する思想の本源なり、民識らざるも此に頼りて活く、百事百物の日に月に改變する日本國に於ては、哲學最も必要なり、同國の精神界も道德界も日々其必

要を呼びつゝあり、何となれを斯民如何に知賢なりと雖、其中に自ら考ふるを知る者極めて尠少なり、大學校より降り來る思潮に抗抵し得る力のある者に至りては尙更鮮し、然るに同國の將來は總て皆（政治までも）、現今の精神界道德界の状態如何に係れをなり、然らば則ち現今日本に於ける哲學教育の状態は如何、哲學は國家の精神上最も偉大の影響を及ぼすものなるに係らず、斯學に従事する人員の鮮少なるは、洵に遺憾なりと謂ふべし、今日或る一部の人士の斯道に従事する者ありて、多少哲學的知識を有する者なきにあらざれども、其所謂哲學なるものは如何なるものなるやと云ふに、之を定義すること極めて難きなり、其學校に教へらるゝものと書冊に記さるゝものを見れば、彼の學者先生なるものは單に東西哲學者の主義遺言を紹介するに過ぎず、而かも之を紹介するに當りて順序もなく連結もなく、混乱極まるが如きは、大に學ぶ者の了解に苦む所なり、此等の學者先生に就て學を、設令其講義を幾千回聽問するも、又設令其筆になれる雜誌を熱心に閱讀するも、其益する所果して幾許ぞや、勿論此の如くして三四年も學ばば、世界の哲學者が何を語り、何を記したるやの事柄を多く知るに至らん、然れども此等の説を多く知りて、自らは如何にすべきやと云ふに至りては、茫乎として自らも知らず、學びたる後も學をざる前も毫も異なる所なくんば、果して何の益ぞや、今日の通弊は東西哲學者の説を知らざるに

あらず、自ら確乎たる主義原理を有せざるに在り、今日の如くにして學ぶも、長き歳月を経ずして、古今東西哲學者の説を悉く知り盡して、最早や新たに學ぶべき所なきにも至らん、然れども自ら之に就て如何に考ふべきやを知らざることは、單に混雜極まる物識りに過ぎざるなり、是れ自家胸中に一定不變の原理なきが爲なり、若し自家胸中に一定不變の原理を缺かむ、紛々たる哲學諸説の中何れを採り、何れを捨つべきや、甲論乙駁、互に相反對する哲學主義を見て、已れ其何れに適歸すべきや、古來哲學者は多くありたり、然れども多くは皆區々の異論のみを戰はして、二人相一致したりと云はるべき點は殆んど之なきなり、甲之を肯定すれど、乙之を否定し、我れ彼れの説に基けむ、人は亦他の學者の權利に據りて論せんとす、我れ自己の理性知識によりて説を立つれど、人も亦自己の理性知識を以て他の異論を之に挑まんどす、此の如き狀勢に當りては、人々安心して先生に就て學ぶを得ざるなり、先生も亦他人の説を紹介する外他に爲す能はざるなり、自己の説を挑むときは、反對の説は忽ち生徒の口よりも發して之を如何ともする能はざるに至る、是を以て今日の師弟たる者は亦彼の希臘の哲學者と同じく、人の説を攻撃するには力あれども、自らの説を建設するには何れも皆無能力なり、然りと雖人には必要缺く可からざる真理なるものはあり、人知は是非とも之を知らざるべからず、然るに今日の哲學は二千年以前の哲學と同

じく、到底之を知る能はず、今や既に失望落魄の境界に沈淪せるが如し、少壯學者の言に曰く『我は世に生息するに倦怠厭忌のみを感ず』と、少壯學者の言に似合はしからぬ言にはあらずや、又曰く『我は世に望なし、故に世は我に空虚無味の如く思はる……吾人青年子弟の要求する所のものは、議論にはあらず、吾人は諸子百家の説を皆聽けり、今や既に疲れたり、吾人の必要とする所のものは、一の人物にあり、吾人に充分信任の心を吹込み、真理茲に在り、看よ真理、と明言確定し得る一の人物にあり』此言は是れ實に現今哲學者の失望落魄を立派に表明するものにあらずや、勿論今日凡ての學者が此の如き言辭を吐くとは云はず、其多くは蓋し其不幸の境界を感せざるもの、如し、然れども今日の學者如何に其不幸の境界に想到せざるも、原理なき教育の結果は、不幸なる論理の勢によりて、必ず全社會に呈出せらるべきや必然なり、今日の教育は申すに及むず、法律にも、政治にも、道徳にも、學術にも、經濟にも、凡てに於て原理基本の缺如せることは、明かなる事實なり、然りと雖人間社會なるものは之が基礎となる原理なきときは、必ず覆滅の厄運を免る能はざるものなり、教育上學理のみを以て萬事を裁するに足るとなすも、決して人の希望する好結果は生ぜざるべし、設令學術の水平が上昇せざるまでも、低下するなくんと、幸ならん、社會の燈臺となるべき大々的學校が自ら先づ轉覆して、國の粹なるもの、美なるも

の、善なるものをも共に破却するなくんぞ、大なる幸運ならん、然れども余の此言は今日に至りては老人の杞憂ならん、此言の實際に證明せらるゝまでには、多くの歲月を要することならん、今日の人は恐くは余の言に首肯せざらん、但た首肯するもせざるも、論理は人よりも強きものなり、若しも教育を始め、社會萬般の事物に永遠の原理の基本を置かざんぞ、人間社會は必ず基礎を缺ける家屋と同一の非運に遭遇すべきや、知者を待たずして知るべきなり、然らむ其所謂永遠の原理なるものは何ぞやと云ふに、他莫し、加教會が基督教の基礎として保有し來れる所のもの即是なり、論じて茲に到れむ、加教會が神より授けられたる眞理を忠實に保存するの一事は、人知にも社會にも一大補益、一大貢獻たる所以の理由、喋々を要せずして瞭かなり、人知には明瞭的確なる原理を呈し、社會には堅牢鞏固なる基本を呈するものは、即ち是れ加教會にあらすして何ぞや。

此結論を見るときは、讀者必ず其念頭に左の概念を浮ぶるならん、曰く、然らむ則ち加教以外以前には人知は原理なく彷徨し、社會は基礎なく動搖し居たるや云々と、何ぞ此言あらん、余は彼の人知を照らし社會を堅うする所の永遠の原理は加教會の初めて發明したる所なりとは謂はざるなり、余は單だ加教會は此原理を忠實に保存して、之を精確に傳教し來れることを語りたるものなり、此原理は決して新たらしきものにあらす、人間の精神の中、

良心の内に初より在りたるものなり、多少明晦の別こそありしなれ、誰か之を有せざるものあらん、靈肉の區別、善惡の區別、將來の有無等此れ皆永遠の原理の存する所にして、世界到る處に法律を支撐し、道徳を維持しつゝ、人間社會の基礎となりたるもの、萬民皆之を知悉したり、但だ今日に至りてのみ國民教育の任に當る者出來得る丈け此原理を國民の精神より拔取し、少くとも成る可き丈け之を晦まさんことを務むるが如し、若し今日の教育家にして茲に成効するあらむ、人間社會は基礎の抜き去られたる家屋と同一の非運に遭遇すべき事、豫言者を待たずして知るべきなり、若しも日本社會に於て昔時斯くも鞏固なりしもの今や日に月に衰滅に歸して、危殆の厄運刻々進み來るあらむ、其原因之を他に求むる勿れ、原理の基礎抜き去られつゝあるに歸するものなり、加教會は此原理を保有すと雖、日本社會を危殆の厄運より救済すること今や甚だ難し、何となれむ其教理は未だ日本人民多數の者の精神に銘刻せられざれとなり、不幸にして社會にも充分混入せざれと、未だ以て國の一大勢力となる能はざるものあり、加教會は寧ろ却て人の輕蔑を受け、衰弱爲すなきもの、如く思はれ居るの姿なきにしもあらす、然りと雖加教會は創立以來幾んど二千年の星霜を經過し來り、今日まで幾多王國の盛衰興亡を實驗したるが故に、其過去の經歷に據りて、明に將來の運命を預測するを得るものなり、蓋し人間世界を治むる法則も、物

質世界を持するものと同じく、萬古不變、永世不易のものなり、是故に彼の波教主義が社會の萬事を破却し、彼の唯物無神等の主義が其最後の結果を呈出するに當りては、社會滅し萬事休せん、單だ舊き教會と稱せらるゝ、加教會のみは仍且持續して、其忠實に保存する所の原理の上に再び新たな社會を建設し、將來の事局を一新するに至らんとす。

結 論

余は本編を終結するに臨み、現時屢余の耳朶に達する一の問題を解釋するは、頗る好機の事と信ず、問題は偉大なる人物が續々波教より加教に歸信する事に係れり、余が前文に記載したるニウマン、マニング、及び之と畧ば功業名聲を同うする幾多の人物が、五十年來年々波教會を脱して、加教會に入り、今仍年々陸續歸誠するもの擧げて數ふ可からず、夫れ波教とし云へ、多くその人の説に據りて、新たな教、改革の教、世界到る處に文明と進歩とを齎す教の如く思はるゝ、之に反して加教と云ふときは、少くとも日本多數人民の爲には、陣魔の教、愚暗の教、頑固極まる教と見做さるゝが如し、然るに歐米に於て、而かも彼の波教國に於て、幾多の大人物は全く之と意見を異にして、今日續々此の舊き教會に歸依するは何ぞや、是れ實に研究を要する問題なり、此等の大人物を以て學識知能の足らざるが爲に此の如く歸依するに至るとは、假定し難き所なり、此の如く歸依したる者は何れ

改宗者の學
德及其匪爲

も皆碩學鴻儒として歐米社會に仰景せられたるものなり、然らむ名利の爲と謂はんか、是れ尙一層假定を容さざる所なり、其中の或者は大資産家、大金滿家なり、加教信者となるも金錢上利する所毫も之なし、寧ろ加教を其國に擴張せんが爲に寄與する所の多きを見るなり、或者は又波教を遺棄したるが爲に名聲爵位をも棄て、將來有望の地位をも棄てたるものあり、多くの人々に取りては加教者となりし事は自らを貧困にし、自らを窮屈にしたる事にてありたり、若夫れ彼の名譽の如き、大古の時代に於てこそ尊重せられたれ、今日の世とありては之を貴重するの心大に減少し、金餘利慾を棄てしむるまで貴重する者今や甚だ稀なるを見む、蓋し思ひ半々に過ぎん、加教ならず余の今語る所の大人物は、名利の點に於ては、改宗の必要を見ざりし人々のみにてありたり、波教徒たりし時にも、加教徒となりし後にも、名聲更に異なる所なかりき、加教徒となりて後に之を尊重したる者は多くは是れ皆波教徒たりし時に之を尊重したる知己朋友なりき、若し加教徒となりて身に受くる所ありとせむ、多くの親友に別れ、多くの教友に離るゝ苦痛にやあらん、然らむ則ち其歸依の眞原因は如何、他莫し、眞誠の基督教を加教會に認めたるに由るなり。

先づ第一此等の人物は基督の神なる事を固く信じ、其信仰を以て宗教信者は狂愚暗昧の者のみにあらずと云ふ明證を示したるものなり、今其中最も有名なる者を擧ぐれば、二人

あり、ニウマンとマニング即是なり、其知能を以て、其學識を以て此二人に顔顔する者は無神唯物論者の中恐くは一人もあらざるべし、若夫れ其操守功蹟に至りては、無原理、無信仰、無光榮の學者の遠く及ぶ所にあらず、其品格の高き、其徳行の完き、其愛國衷情の深きに至りては、到底無宗教の人物と同日の論にあらざるなり、蓋し彼と此とは天地懸隔、之が比較すら彼を侮辱するの太甚しき事ならん、二氏は衆に先だつて歸誠の道を開きたる者、其歴史他の歸誠者のと少しく異なる所なきにしもあらざれども、大体に至りては畧ぼ同じ、所謂大同小異なり、二氏は基督の信仰を發足點として、基督の創設したる真正教會を認めんが爲に、精確なる論理の道を辿りつゝ、遂に自身の預想せざる、希望せざる、而して又到達するを恐懼したる加特力教會と羅馬教皇とに歸着するに至りたり、請ふ其如何なる行歩を取りたるやを左に記せん。

西曆一千八百三十年(距今幾んど四十年前)、誠實なる信仰を懐ける宗教家は歐洲に於ける基督教の狀勢を見て、基督の真正なる教法教會の何くに在るやを尋究したり、此時一方に於ては波教は千宗萬派に分岐して、異論紛々、變遷定りなく、遂に個人的宗説の姿となりけれど、基督の真正なる教法教會は無論此の如きもの、中に在るべき理なしと思はれたり、他の一方には加教ありて其成立も一層古く其信徒の數も一層多かりしかども、幼少より波教

の教育を受けて先入主となりたる者は、教友の間に加教會が悪人の社會、愚者の集合、誤謬、殘忍、及び百弊萬害ある教會の如くに言做されたるを聞きつゝ、痛く之を嫌棄したり、故に同教會が基督の真正なる教會なりと云ふが如きは、彼等の念頭にも浮び出でざりき、去れど彼等皆其心に以爲らく、真正なる教會は必ずや我等の属する所の英國教會ならんと、而して彼等は此事を真正に信じ居たり、但だ奇怪なるは同教會が基督の教會の理想に合はずして、屢衝突する所あるの一事なり、先づ第一其名稱の立教會と云はるゝは、其現在の組織、信條等の何人より來りたるを餘り明に知らしめたり、故に其起源に就て先づ第一に疑は懐かれたり、何となれを少しく眼を開くときは、其現在の制度組織が明にヘンリ八世とエリザベスより來りて、基督よりせざる事を看取するを得たれをなり、此事大に教會の權利に關したり、次に設令三十九ヶ條の信條明に決定せられあれども、同信條と個人的信仰との間に屢衝突ありて、同一の教會にても一致と云ふは單だ名のみにして、其實乖離分裂して拾收すべからざる状態にてありたり、尙其上に同教會は全く政權の中に在りて、國王は自由自在に之を左右したれど、此等の事何れも皆基督の制定したる教會の理想に合はざりき、基督は教會を政權の外に立てたり、時に或は國王をも譴責するを得せしむるの組織になしたれど、王權の下に服従するの一事は其品位にも其自由にも背反したり、是に於て

乎余の前記せる人物は、先づ其教會(英國教會)に當初の教會(使徒時代の教會)の有したる一致と品位と自由とを回復し、且其教會の基督より來れしを示して、其教權に鞏固なる基礎を興へんが爲に、正直に辯策を廻らしたり、其目的や賞すべく、其企圖や嘉すべく、正直なる波教信者を救済する。於て、是より良好の道はあらざりきと謂はざるべからず。

率先之が企圖に従事したる者は、有爲勇敢の青年にして、其多くはオックスフォールドのオリエ校出身の者にてありたり、故に其名稱の如きもオックスフォールドの運動と云はれ、爾來今日に至るまで其計畫事業は同名を以て稱せらる、其中にニウマンは最も著名の一人なりき、其母はユグノ教徒の逃避者(二世紀以前佛國より追放せられたるカルウヰン教徒)にして、氏は多年福音教會に在りて成育したる者なり、此時(紀元一千八百三十二年)に當りて、氏は未だ波教の先人に司配せられ、羅馬と云へる腐敗の焦點、教皇と云へる基督の仇敵と見做し居たり、去れを其著『時論』を公にする時に當りても、羅馬教會を不俱載天の敵と見做し、真理を混亂せざるまでも確かに之を阻碍するものなりと言ひ、其權利の濫用、其潜越、其迷信等、波教起りて之を否定し、毀傷するに至りたるも、強ち以なきにあらずと論じたり。當初の教會と一定不變の信仰とを發足點として論歩を進めたるニウマン氏は、是に於て教界の二大勢力即ち加教と波教とを共に疑ふに至り、二教何れも基督の真正なる教にはあら

ニウマンの
宗行及其教

ず、畢竟二個の相異なれる迷謬に過ぎずと見做すに及べり、去れを氏は右二教の間に一の中道を畫するを得と信じたる而已ならず、氏の眼中には彼のアングリカン教會こそは實に真理の専有者にして、渾ての真理と悉く抱懷せる一種特別の教會として映じたるなり、此點に就きランシス、ブレサンサー氏(波教徒)は語つて曰く『理想的天才の奇怪なれども而かも高崇なる幻影なる哉、彼れニウマン氏は其愛する所の教會を擁護するが爲に良好の道を追求したり、若し基督の教會が果して世に在りてせむ、同教會の必然(論理的に)有すべき諸特質を究めて、之を自己の教會に歸せしめんとするよりも確實にして且簡易なる道は他に認むるを得ざるなり云々』と、若しランシス氏の言にして、其所謂諸特質を并有するものは、疑なく真正なる教會なりとの意なりとせむ、其言や實に真理と謂ふべきなり、然れども此の如き特質をアングリカン教會の如き一國的にして、島國的にして、世界より孤立し、政權に服従し、新教の教理儀例に浸染したるものに歸せしめんと欲するは、到底其奏功を期し得ざる事なり、真正教會の特質と云へど、余が本書に記述するが如く古今同一、東西共通、常眼歴然、萬古不變と云ふ事を云ふなり、此等の事を以て彼のアングリカン教會に適合せしめんとす、ニウマン氏及び其教友如何に知あり、才あり、熱心ありと雖、吾は其企圖の全く徒勞なるを認むるなり、否其企圖は全く反對の目的に達するに至るべき所以

なりと思ふなり、而して實際に於て果して其反對の結果に立至りたる事後條を見て明なり、氏は同志を糾合して其畫策を行はんとことを決したり、乃ち先づ前記せる『時論』と題せる定期發刊の冊誌を公にしたり、ニウマン氏自ら之が天啓者となり、校閲者となり、又時々は原著者となりたり、同冊誌の成功は豫想外に出でたり、同志會の組成したる翌日、ニウマン氏は直に其會主と仰がれ、其名聲高く、其勢力著しかりき、而して其勢名は日一日に加はりたり、經る未だ十二年を出でずして、英國人民の視線齋しく氏の一身に聚り、無位無爵の教會員は忽にして大軍の將師となり、同志の首領となり、學校の託宣となり、無數の悔悟者の良心を司配する者となりたり、此時に當りて多くの著名なる人物は深く氏を信任し、『我はニウマン氏に信す』と云ふ信條の語を適用するまでに至りたりと云ふ、其大學教堂に於ける演説は幾萬の聽衆に渴仰せられ、其オリエの私室は聖堂中の聖所の如く思はれて、其闕を踏む者一人として感歎の情に動かされざるはなし、其一語一默、一舉一動も、獨裁君主の綸言の如く、無可誤教皇の勅令の如く奉戴服膺せられたり、精神界、道德界の專制主宰者となりて其權勢を揮ふの榮を得たる者、氏の時代にも其前後にも絶つて見聞したることなし、嗚呼氏も亦光榮の地位に達したる者かな、然りと雖茲に吾人の最も同情を表すべき事は、氏が斯く光榮の地位にありて、萬民の崇拜する所となり居たるにも係らず、

氏自らは此時最も激甚なる苦痛疑惑の中に懊惱したる事はなり、基督の教會に就て畫ける氏の理想、氏の意見、氏の言論等は實に雄大なりき、高崇なりき、明快なりき、故に其心の苦痛を知らざる民は皆拍手喝采して之を感驚し、之を嘆美し、之を歓迎したり、但だ氏自身は論理によりて其何れの處に到達すべきやを見て獨り憂慮したり、喫驚したり、何くに達すべきぞ、氏の希望せざる所に達せざるべからざるに至れり、氏の辨護せんと企てたる所はアングリカン教會にてありき、然れども氏が真正なる教會に就て畫ける理想は愈益其愛する所の教會に遠からしむるに至れり、氏は宛も大山に向つて進行したるもの、如く、歩一歩つゝ其足を進むる地を縮めたり、大山に面接する期日一日に近きたり、大山とは何ぞ、基督の創設したる當初の教會是なり、詳言せむ、基督が萬民に教へ、萬民に洗禮を授くるの天職を與へて創設し、爾來連綿たる教統によりて基督の遺言を傳承し、萬國萬代に到りても其信仰教訓の同一を失はざる真正の教會即是なり、理性の眼を以て觀望せむ、蓋し是より絶勝絶景の大觀、奇觀、壯觀、美觀はなかるべし、不幸にして氏の理想は其愛する所のアングリカン教會には合はざりき、其處々方々に於て辻褄の合はざるを認めたり、氏は實に其教會の爲に適用せられざる衣裳を仕立てたるものと謂ふべきなり、是に於て其理論を一變せんか、其教會に合はざる所を一々抜き去らんか、己の企圖に反したる所を悉く放棄

せんか、然れども氏は此の如き變節變見の人物にあらざるを如何せん、利害の觀念によりて真理を曲ぐるが如きは氏の爲には餘りに都合好過ぎる事なるを如何せん、氏の人と爲る實に此の如き性質の者にはあらざりき、真理を斯くまで立派に理想しつゝ、此に到つて初めて之を改變毀傷せんとするは、自家撞着の甚しき事と彼れ明に知悉したり、然らむ茲に歩を収めて進行を停止せんか、論理の行歩は駸々として來り進むを如何せん、彼は論理の勢により遂に大山まで接近したり、其理想したる古今同一、東西共通、當眼歴然、萬古不變たらざるべからざる教會は、極めて新らしく極めて狭きアングリカン教會にはあらずして、極めて舊き加特力教會なることを認めたり、同教會のみは萬國萬代に至りて毫も變更なく、毫も間斷なく、基督よりニウマンまで、セルザレムよりロンドンまで傳はり來れることを識認したり、是に到りて彼れの精神は初めて波教的先入の軛を脱せんことを務めたれども、年來の惰性一朝にして拔き難く、其心情其想像等尙未だ壓束せられたるが如き心地せり、彼は其激しき心中の苦戦に於て、其多年教養せられたる教會に最後の二撃を與へんとしつゝ、あるを夢みたり、初めは其教會の頭上に眞正なる教會の王冠を置かんとして、今や忽ち自らの手を以て之を脱去せんとするが如く感じたり、其眞率なる虔信は深く氏の心をアングリカン教會に連結して、母子管ならざるの情ありたり、而して他の一方よりしては、己の

多年不俱戴天の敵と見做したる加教會の首領羅馬教皇の前に行て跪くが如き事は、念頭に浮ぶるさへ怒らざる得ざりしなり、然り、彼れの眼中には此事卑怯なる降伏、不義なる謀反、親殺しの所業と映じたり。

ニウマン氏は此の如き心中の苦戦に悩まされ、省察又省察、憂慮又憂慮、左せんか右せんか、進まんか退かんか、胸中一日も閑日月なく、獨り自ら處決に苦みたりしが、偶此時政權が信仰上の事に干渉する出來事ありしかを、此事氏をして斷然アングリカン教會の眞正なる基督教會にあらざるを曉らしむるに至りたり、是より氏は苦痛の床上に呻吟すること五年、羅馬の天を睨めて、基督の代理者の足下に降伏するの難きを想像し、其懐古の情、其教育の恩、其一生の事業を放擲するの悲痛、家族の係累、朋友の情誼、己の廢教を訴ふる正直なる教民を躓かしむるの恐患、己の遺棄せんとする教會に於て受けたる恩誼の追想、就中己を攻撃して偽善的に深意を隠しつゝ、加教に入るの準備を爲せりと詰問する人々の罵詈讕謔に答ふるの困難等、想ひ來れど千感萬感一時に胸中に湧出し、心緒亂れて糸の如く、之を奈何とも能はざりき、氏の書簡及び其他の記事を讀むときは、當時氏の胸裡に行はれたる事の如何をかり苦しかりしやを察するに餘あり、氏の如き知見高く宗教心の深き人物が、眞理の前に接して、其先入と良心とを致一合同せしめんが爲に、如何なる方道を工夫し、如

何なる悲劇を繰返したるかは、殆ど吾人想像の外に出づ、然れども此等の爲に案出したる企畫は皆水泡に歸せり、氏の心や正直、其精神や論理的なりしを以て、勢ひ論理的の結論に到達せざるを得ざりき、氏は沈思黙考して一意専心に己の改宗を阻碍する原因を探究したりしに、良心の憂慮、理性の疑惑、内部の心情等よりは寧ろ首領たる地位を失ふの恐れ、師主の面目を損するの憂、將師たる名譽の敵に移るの患等にして、一言せむ、理論上の問題にはあらずして全く自愛心より出づると云ふ事を明に自覺したり、是に於て乎其決心は遂に抜く能はざるに至りぬ、此時より氏は過去の情緒係累を一々脱解するを始め、オリエ校の教坐を辭し、大學管内の住職を譲り、『時論』冊誌の事は既に監督の命によりて之を中止し、『英國評論』雜誌を管理する事をも他人に委任して、遂に己はオックスフォードの隣邑リトレンコールに退き、自ら建設せしめたる茅堂に潜み、一隊の青年子弟に擁せられて、二年間殆んど行者的生涯を送りたり、同所より心靜に天下の形勢、世運の變遷、思潮の推移、事局の改變等を視察したり、時に波教會の部内に乖離混乱日一日に甚しく、アングリカン教會も亦其餘波に動搖せられたれど、氏の決意をして愈益挽回すべからざるに至らしめたり。

一千八百四十五年の秋、永き心中の苦戰愈其終局を結び、其數年來の決意遂に實行の緒

に就くに及べり、同年十月八日氏は愈其教を癡棄せんが爲に、愈加教會に入會せんが爲に、伊國人なる「パッシオニスト」司祭の下に到りたり、同司祭は元と羅馬の田園に牧童たりし者、固よりニョマン氏の如き學識才能ありたるものにあらざれども、此時基督の眞正なる教法、眞正なる教會を代表したり、由來加教會に於ては信教の實際人物の力量杯に重きを歸するものにあらず、單だ其人の基督の正系を引ける者なるや否やを考ふるものなり、正統の司祭ならむ牧童何ぞ關せん、偉大なるニョマン氏が牧童たりし者の下に首を垂るゝは頗る奇觀なりきと謂ふべし、然れども想ひ回らせむ、茲にも亦多少の緣因なくんぞあらず、蓋し「パッシオニスト」會は彼の徳名高かりし聖人ポール、ドラ、シロア（一千七百七十五年）が種々の方道を回らして、英國民の加教に歸誠せんことを計らんが爲に祈り、働き、且苦むの目的を以て創設したるものなれど、五十年來改宗の運動に最も貢献したる此大人物が、同聖の弟子たる一司祭の手を以て加教會に歸依するに至りたるは、理の當さに然るべきものなりき。

ニョマン氏今は既に一個の加教徒たり、心安んじ氣平かに、餘生を學問と修道とに送り、既に眞理を胸中に懷きたれど、其幸福日に月に加はりたれども、樂を獨りするの不可なるを以て、其幾多の苦痛、幾多の心戰を賭して捕捉し得たる眞實を同胞兄弟にも分たんが爲に

又々大に鞠躬盡瘁したり、之と同時に其學殖、其知能は英國の全土を照らし、其名聲、其師範、其記述等、常に英國の誇稱する所となりたる而已ならず、歐洲各國亦皆深く之を感嘆稱讃し、其名は遠く新世界(米國)にまで馳するに至れり、氏は天年を全うして終り、其死に至るまで英國の知識界、道徳界に寄與したる所鮮少にあらざるなり、幾んど六十年の久しき同國精神界の覇權を握りたりと謂ふべし、若夫れ氏が偉大なる人物に歸誠の道を開きたるの功に至つては、今後永く没す可からざるものあらん、此等大人物が氏の師範に則りて陸續加教會に歸依するに至るを見るときは、彼の片々たる波教徒は漫に加教會を罵詈譏諷するの耻しさに堪へざるに至るなり、日本人は思ひ未だ茲に到らず、波教徒の漫言を聞て、直に加教會を以て殘逆者愚昧者の集合の如く見做す者あるは、洵に悲むべきなり、加教會果して此の如きものならん、ニッマンたる者何を苦んでか茲に入會するを爲さんや、ニッマン氏の改宗は實に波教徒の口を閉ぢて加教會の爲に大々の辯護をなすものなり。

ニッマン氏の死後數月を出でずして、又々他の偉大なる人物起りたり、そを誰と爲す、マニング氏即ち其人なり、氏はニッマン氏に優るとも決して劣りはせざる者、其英國に貢獻し、教會に寄與したる事、亦ニッマン氏の下に出でざるなり、余の前記したるフランシス、ド、ブレサンセ氏は此二大人物に就て語つて曰く『羅馬聖教會のカルチナル(樞機教

マニングの
性行及其改
宗

官)なる此二大人物は、信仰なき現世紀に當り、宗教改革時代より以來一致の中心點(羅馬)より分離せる國土に於て、基督教の光榮を回復して、現時精神界の勢力中最も強盛なる權利威力を之に歸與せんが爲に、與つて大に力ありたる者と謂ふべきなり』又曰く『英國の波教徒、アングリカン國教徒、就中教皇反對黨等は、常理を以て律すべからざる意料外の大一飛躍を以て、同國の宗教上、政治上に於て慣用する彼の兩端主義、中間主義の大敵たる此二大人物を尊崇慶祝したるは奇と謂ふべし云々』、精神の直なると心胸の寬なるとは、それ此の如く國民の同情感嘆を博するものなり、ニッマン及びマニング二氏の改宗は實に十九世紀に於ける英國歷史上特筆大書すべき一大事にてありたり。

マニングは英國貴族の出、其父は保守黨派の代議士、十五歳より十九歳に至るまでハローの學習院に學べり、同院はエトン、ルグビ、ウインチェストルの學校の如く同國貴族の入學すべき所、貴顯紳士と稱せらるゝ者は皆此諸費より出づ、マニングは一生の間又總ての方面より見て「セントルマン」たるを失はざりき、ニッマンと異なる所は正しく此特質に在り、ニッマンは其門閥より云へばマニングと同等、其知識の點より云へば或は之に優りたるべしと雖、マニングの如く右華族學校に入りて貴族的教育を受けたるものにあらず、マニングは二十歳になりてオクスフォード大學のバリアル校員となる、其大望、其抱負等は、氏

が『第一席を占めずんば、退かんのみ』と云へる語を見ても知るべきなり、蓋し氏は一躍して同社會青年の第一流に立たんことを欲したり、此時校生の演説會なるもの『ユニオン』の名を以て創設せらる、是れ實に一小貴族院(上院)とも謂ふべきなり、同國の貴族は多く其席に列せり、彼の有名なる虞翁の如きも亦辯を學べんが爲に茲に到りたり、マニングは同會に於て多く語り、又能く辯じたり、其論する所上は政治上の大問題より下は家政の綿密なる所まで亘れり、氏がグラドストーンと友誼を結びたるは此時なり、爾來死する迄相提携せり、勿論二氏各々其仕ふるの道を異にせり、グ氏は政海に游泳し、マ氏は教界に馳奔したり、善し國民の靈魂を司配するは、政權を握りて民を治むるよりも、國家に貢獻する所多かるべしと信じたれをなり、諸務多忙なれども、活潑々地の氣象を以て、當時の精神界に紛出したる百般の問題を解説したり、識見高遠、資性真率、アングリカン教會の熱心なる擁護者にして、當初(使徒時代)の教會の一致、權利、品位等を同教會に回復せんことを務めたり、此の如き人物なれを、曖昧摸稜の主義を執つて世に處すること能はざりき、是非とも明瞭に精確に定義せられたる原理を必要とせり、其思想たるや觀念的想像の上に浮ぶ白雲の如きものは大に異なりて、行爲の基礎、言動の標準たる性質のものなりき、其信仰初めは波教的なれども、後日加教的となりたる時の如く真摯なりき、當時羅馬の大反對黨なりしかども、其

反對は眞誠なる心より出でたり、其アゼ氏に送りたり書中に、同氏の著作中羅馬に反對なる箇條の多きを見て、大に之に同慶賀を呈し、且加教徒が童女マリアに呈する尊敬の奇怪千萬なることを語りたり、氏自らも有名なる著書を以て大に時事を論せり、其著『教會一致論』の如き、グ氏に献呈する文を載せたるものにして、忽ち「アングリカニスム」の傑作として珍重さるゝに至りたり、著名なるヒルポスト氏は語つて曰く「吾人は三大人物を有す、政界に於てはグラドストーン、法廷に於てはホーア、教界に於てはマニング」、ホーア氏も後日マニングと共に加教に歸依したり、マニングの反對家テニソン、モリス氏すらも語つて曰く「現時氏よりも良好なる、賢明なる司教を何處に求むべきや、吾之を知らず」と。此時に當りオックスフォールドの運動はアングリカン教會に一大打撃を加へたり、當時同教會を救済する者はマニングにあらずして誰ぞとまで叫ばれたるを見を、氏が時人より如何に重きを置かれたるかを知るに足る、ニウマンの改宗したる時、氏は尙未だ波教の信仰を堅く持したり、ニウマンの改宗を見て、大に之を非難し、一大罪逆、一大謀反をなせりとまで叫びたり、然るに氏も亦潜思熟考してニウマンの改宗を促したる理由を一々研鑽するや、自らも眞正教會の特質とアングリカン教會の現状との間に解釋すべからざる衝突あるを看取したり、氏の眼は明かなりき、故に之を見ざるを得ざりき、氏の心は直なりき、故に之

を認めざるを得ざりき、是を以て五年の間痛哭しながら、自己の教會に年數、論理、明快、秩序、權力、一致等の缺乏せるを譴責したり、氏は其教義の空く紙上に死せるを見、其儀禮の一般に放棄せられざるを見、又其教會自身と世俗人との分別乖離せる状態等を見て、痛く慟哭したり。人は氏の口より『我は未だ羅馬加教徒たらざれども、最早やアングリカニ教徒にはあらず』と云ふ語の屢進るを聞けり、種々の思念案に取捲かれて、身は宛も網中に在るが如く、而して其網の目は愈益狭少となれりと自ら語りたり、種々困難なる事情内外四邊より起り來りて、容易に改宗の運に至ること能はざりしも、其心中よりは早や既に『爾加教徒となりて死せん』と云ふ誓聞せたり、自らも己の將來を案じ、二年の後我は如何なるべきぞと獨語したり、又曰く五年前には彼のニョマンは如何なりしぞ云々と、去れ心アングリカニ教を擁護する事は日一日に不能の事業と思はれたり、然れども他の一方よりは到底其教會を遺棄する能はざる緣由情緒に纏綿せられたり、故に氏自らも最も死に近き境界なりと語れり、曰く『門地、血族、紀念、情誼、利福、及び總て人心を拘束する誘惑物は我を驅つて現在の信仰に持續せしめたれど、之を疑ふは乃ち是れ凡ての愛着すべきものを疑ふと同じく、若し之を遺棄せんか、我として既に死せるが如けん云々』と。然りと雖マニングは如何に其教會に愛着すと雖、其言動は日一日に加教的となれり、己を

慎み人を修むるの熱誠は日々其度を高め來り、自らは加教徒の如く懺悔し、信徒の告白をも聞き、頗る嚴格なる意見を加へて之を指導したり、是を以て其反グラドストンの如きもマニングの語るが如き嚴格なる性行なかるべからずとせむ、余の如きも疾くよ官職を辭せざるべからざらんとて、太く其過酷なるを譴責したりと云ふ。

然れども氏は已に對しても嚴酷たるを失はざりき、彼は如何なる時季にても祈禱の時刻を規定し居きたり、觀念、讀書、良心の糾明等亦皆一定の時刻ありて、嚴く之を守りたり、少くも水曜日、金曜日毎に齋式したり、聖書を讀むには(懺悔の詩篇を誦するに)跪て之をなしたり、其外にも特別なる小齋を期定し之を守りたり、一千八百四十七年よりは車馬の乗用をも廢したり、是れ實に波教徒の生活にはあらずと謂はざるべからず、氏の如き貴顯なる人物が、其行動茲に到れるを見て、多くの波教徒は其腦力疲憊の結果なりと思惟したり、氏は同一の心事よりして、官廷の副司祭の榮職をも辭したり、然れども同職は氏が將來顯要の地に立たんが爲に好個の踏臺にてありしなり、同年の春氏は大病に罹りて諸務を離れ、死を眼前に臨みて永遠の眞理を觀想するの機を得たれど、此事氏の精神的修正を爲すに好機會となりたり、因て氏は回顧して過去の行蹟を調査し、神の前に其總ての思念、及び總ての言動の眞因を衡量したり、是に於て平氏は道德上非常の進歩を爲して、精神の上

に一大新局面を開きたり、茲に吾人の注目すべき現象は、氏が道德の進歩をなして愈神の聖に近くに從つて、愈羅瑪に接近せざるべからざる必要を感じたる事是なり、總ての改宗者は皆此の如くなりき、故に氏は其病より出るに當りて、醫士に大陸行を勧められたるに、翌一千八百四十八年の春まで大陸に滞在し、其間最も氏の心念に懸れる加教の事を四方八面より研究し、其組織、其尊拜、其習例等一々檢覈したり、氏は就中羅瑪に滞留し、時の教皇ピオ第九世に面謁すること前後二回、(四月九日と五月十日)、同教皇は當時其胸襟の寛大なるを以て聞かたるもの、氏と熟談多時、英國の美擧善事等に就て種々對談ありたる後、左の言を遺して曰く『人善業を行ふとき、神は之に恩寵を降すものなり』と、言未だ畢らざるに眼を天に揚げ、靦望夢時、忽ち又語を繼いで曰く『愚老日々英國の爲に祈るを忘れず』と、嗚呼是れ實に波教徒より不俱戴天の敵と見做さるゝ、羅瑪教皇の心事なりとす、同教徒が到る處に殘忍壓制の標本となし、傲慢剛愎の怪物となす所の人は、其實此の如きものなり。マニングの英國に歸るや、其心緒大に亂れたり、氏の一身は二個に分離せられたるが如くなりき、斯る境界に在りて自家撞着の言を爲すも、毫も怪むに足らず、蓋し氏は最早一人にあらす二人の如き姿にてありたれをなり、故に或時は甲の一人語り、或時は乙の一人語ると云ふが如く、氏の言動知らず識らず二様に出でたり、一日アングリカン教の一青年、氏と

同じく疑惑中に彷徨し、自ら進退を決する能はずして、氏の下に來り、如何に處決すべきやと氏の意見を叩けるに、氏之に答て曰く『加教會の總ての教理を信する人の居所は無論加教會に在るべし』と、然れども人を加教會に入れたる氏は、其身未だ加教會に入らざりき、氏は凡て其正直なる性質に適合する手段方法あらむ、悉く之を執りて以て其良心を撫せんと務めたり、然れども其成效を期する能はざりき、良心は容易に慰せられざりき、氏が最後の決心はニッマン氏をして其去就を決せしめたるものと同一の觀察によりて行はれたり、即ち國家が教會の上に首權を有する事是なり、アングリカン教徒は常に此點を隱蔽して人に顯はざらんことを務む、理論上にては如何にも其言論加教徒のと異ならず、彼等も亦公なる教會に就て語るなり、會議、信條等に就て語るも亦加教徒の如し、然りと雖彼等は此等の事は皆純理、否空理なることを忘却せり、實際に於てはアングリカン教會の信仰する所、宣言する所、否其信仰宣言すべき所のものは、皆是れヘンリ八世の欲したる所、エリザベスの定めたる所、ウィットリアの持する所のものに外ならず、純然たる宗教問題に就き、女王の名を以て開かれたる私會議の新決議は、實際派の硬派を慰撫せんとせり、然れども此等の迷妄を排除すれむ、アングリカン教會なるものは全く人間的創設に係るものにして、其首領は女王、其信仰、其信條、其秘蹟、其教訓、其入會式等全く政權によりて裁する法官

の意に在るものなり、グラドストーン一日病床より起立してマニングに語て曰く『若し何等かの勇氣によりて救治せられずんば、英國教會はそれ失却せん』と、然れどもマニングは終りまで抗議を繼續する勇氣なかりき、数月の間氏は宛り揖を執る力を失ひたる舟子の如く、空しく舟中に坐して日和を觀望するのみ、然るに幸にして機會は到來したり、一千八百五十年の終末に當り、教皇ピオ第九世は英國に於ける加教の階級を再定して、ヘンリ八世が其妻と加教會とより離婚したる以前の如く回復せんとしたり、此時一般の波教徒就中アングリカン教徒は太く憤激したり、マニングは乃ち此時斷然其決心を顯はし、波教を遺棄して加教に歸依するには、機失ふべからずとなしたり。

是に於て氏は遂に最後の訣別としてアングリカン教會に到り、グラドストンの傍に於て跪坐したり、同教會はハッキンハムの小會堂にてありき、當日演説したる牧師は是れ又耶蘇會の司祭に爲るべき準備をなし居たり、頓て晚餐式の始まるや、マニングは起つてグ氏に語つて曰く『我は最早アングリカン教會に於て晚餐する能はず』と、グ氏愁然たり、一千八百五十一年四月六日マニングは其友ホープ、スコット(前記せる人物)、即ち相共に提携を約したる人と共に、廢教式を爲し、告白を爲して、プロウヒール司祭の手より要件附の洗禮を受けたり、時の教堂はヒール、ストリートの教堂なりき、是に於て乎年來の疑雲はブ

司祭の門を開くと同時に忽ち消失し去りて、心氣快然となりぬ、次の日曜日(四月十三日)樞機教官ウィスマン自家の教堂に於き親ら二氏に堅振聖体の兩秘蹟を授けたり、嗚呼マニングも亦既に加教徒となりぬ、其友ホープと共に。

余はニウマン、マニング二氏の改宗始末を故さら詳細に叙述したるもの、以なきにあらざる、日本に於て人々多く加教の何物たるを知らず、加教會と云へば殘忍の集合、愚暗の土塊の如く思ふ者あり、設令斯くまで思はざるまでも、一種恐るべき秘密會の如く見做す者は確に之ありて、吾人は此輩に向ひ、來りて調べよと呼ぶも、彼等は恐れて來らず、曰く氣味惡るしと、因て余は方法を一變したり、世人の最も耳目に觸れたる人物を擧げて、加教會の何物たるやを知らしむるに如かすと、同教會には古來大人物は多く輩出したり、彼のプラトンに優り、彼のアリストテレスに優る人物は僕指に堪へず、然れども世人の未だ之を知らざるを如何せん、蓋し今人は往々皆近眼考流なり、古代に如何なる人物ありたるや抔と云ふも、其眼茲に到達せず、其遺書尙存するも、其力之を讀むに堪へず、故に止むなく最近の人物二人を擧げたり、之を英國からも波教會より改宗したる人物の中より引き來りたるは、聊か此には意味あるなり、嗚呼英國の事狀を能く知れる日本人よ、加教會を愚者の集會の如く言做す波教徒よ、今や此二大人物を見て如何なる言をか爲し得るぞ、加教會は

決して愚者迷信者のみの集合にはあらざるなり、二大人物は之が證據人なり、之にホープをも加入せむ、三大人物とならん、彼のヒルボストの言に據りても、マニング、ホープはグラドストーンと共に現時の三大傑と稱せらるゝにあらざるや、蓋し最近世紀に於て上下殆んど五十年の間英國の爲に鞠躬盡瘁して其光榮を楊げ、其邦家に大功勞を樹てたる、此三氏に及ぶ者なけん、不幸にしてグ氏のみは三氏の跡を追ふ能はず、加教徒となるに及むずして死せり、然れどもグ氏は永くマニングに忠實なりき、其政治上の大策、愛蘭土の自治案等に於ける功蹟は、多く其友マニングの高見大識に原因する事は、知る人ぞ知る。

マニングは加教徒となれり、加教徒の生活を以て天命を全うすべき者なりき、氏も亦斯く自信したり、氏は無論加教徒の司祭たらんことを欲したり、然れども其希望は茲に止まれり、豈其上に榮位を望まんや、司祭になるを得む、心靜に餘命を送らんと思ひたり、氏は永く暴風の中を經過し、遂に心海の和平を認むるに至りたれど、自ら其意中を記して曰く『我には他に望なし、一たび歸依したる道に永く持續するのみ、嗚呼如何なる幸運の歸依ぞ、曩には我れ致命の苦を嘗めたり、今や何等の樂ぞ』と、一千八百五十二年「タイムス」はマニングのアングリカン教に復歸するを報じたり、氏之に答て曰く『我は加教會に於て我の先きに追求したる所悉く之を認めたり、否入會以前に在りて追求すること能はざりし事

までも認むるに至りたり云々』見る可し其決心を、氏豈片々たる浮萍漢ならんや、瓦となりて全からんよりは玉となつて摧くべき人物なりき、一たび眞理を抱けり、眞理を抱て死せんのみ、嗚呼彼は實に退歩すべき人間にてはあらざりき、義を見て勇なき者にてはあらざりき、眞理を認めつゝ利害の觀念に司配せらるゝ卑怯漢にてはあらざりき。

余は氏が一千八百五十一年より一千八百九十二年に至る前後四十年の生涯を叙するの意なし、其生涯は無論加教的にして、凡ての善舉、凡ての美事に富めるものなり、若し日本人にして基督教國の歴史を知らずして、漫に基督教は國家主義に反す、愛國の精神に戻る等の語を爲す者あらむ、吾人はマニングの四十年間の歴史を讀まんこと推薦す、答は實に其中に在り、同歴史を讀まむ、唯だの一人なりども眞個に福音の精神に鼓吹せられなむ、四十年間に如何なる事を行ひ得るやを知るに至らん、マ氏が國民の教育道德の爲め、不幸薄命者の慰撫の爲め、及び其他凡ての需要必要に應ずるが爲め、四十年間一日も間斷休止せずして行ひたる所は、知る者皆一驚を喫す、氏が國家の凡ての方面、國民の凡ての階級に及ぼしたる響影効果は實に信すべからざる程なり、『英國に於ける加特力教會の司教マニング』の語は、如何なる事を示すかを見よ、彼は實にロンドンに於ける加特力教會の司教たりき、大司教たりき、教皇ピオ第九世の親友たりき、遂には羅馬教會の樞機教官となりたり、讀

者若し明わらむ、氏が大基教徒たるに従つて、大英國民となりしを見ん、蓋し人は其心に
よりて量らるゝものなり、而して基教徒は寛大の襟度、其歌々の赤誠、彼の唯物主義利己
主義等の徒輩の期する能はざるものを有す、マニングの心は其有名なる語中に全く含蓄せ
り、曰く『小兒一滴の涙も拭はれされを、地に流さるゝ血よりも、一層高き叫び聲を神に到
達せしむ』と、斯る深き感情は乃ち其寛大なる襟度、其歌々たる赤誠を與へたるものなり、
氏が一生の精神は全く茲に在りたり、蓋し氏に取りては其感したる所其思ひた所は忽ち其
行になりたれをなり。

氏が加教より吸み取りたる大感情の中、其第一に指を屈すべきものは氏の愛蘭土に對する
愛心なり、同國に對しては氏の心は加教的信仰に開けると同時に忽ち仁愛にも開かれたり、
氏は同國を聖人の島、致命者の地、英國が三百年の間流血淋漓たらしめたる聖土として、
深く之を尊重したり、彼のグラドストーンが議會に提出して斯くまで美譽仁譽の名を博した
る自治案の如きも、氏先づ之を其良心に浮べ、次に愛蘭土に對して提供したるものなり、
故に愛蘭土の人民はマニングを神として拜するなり、英國は植民地に對して寛大の方針
を取るものなり、去れを自國に於ける不幸なる愛蘭土に對しても、殘逆なる待遇を廢し
てマニング及びグラドストーンの二氏の美譽を稱揚し、二氏が此一大不仁の舉に終局を結は

しめ、以て同國の上より耻辱を排除したるを感銘するに至ること期して待つべしなり。
人は云ふ、大人物は常に一意見の人なりと、此言マニングに就て見るに頗る當れり、氏の
一生を司配したる意見は何ぞ、曰く基教は眞理なり、天下重要の問題には明快なる解答を
與へ、之を大にしては社會の、之を小にして個人の凡ての不運、凡ての要求の慰撫となり
供給となるものなりと云ふ事是なり、氏は此見を以て到る處に滿腔の力を盡し、有らざる
方法手段を執りて、其精神を貫徹せんことを務めたり、氏は此目的を達せんが爲に、就中
子弟の宗教教育、國民の道德問題、教會員の養成、及び凡て人の稱する社會問題と云ふもの
に力を盡したり、勞働者の地位を上げ、工主と工夫との間を和解する等其尤なるものなり、
而して是れ皆福音法の道を以て行ひたり、貧者富者との相互の尊敬、總じて正義と仁愛、是
れ實に氏の一生實行せんことを理想したるものなり、余今茲に氏の寛大の心、滔々の辨を
以て弘布したる經濟、道德等の主義の著作を一々紹介する能はず、然れども茲に書籍より
も言論よりも一層吾人の感驚すべきものあり、氏が國益民福の爲に鞠躬盡瘁したる勇膽豪
氣即是なり、氏は仁愛の一事を以ても極めて平民的の人物となりて、英國政治社會に於て
も亦極めて勢力ある人物となりたり、同國の政府は之を嫉視せざりき、何となれを基教的道
徳教命の遵奉せられたる所には、爲政者手を拱して安んずるを得たれをなり、嗚呼英國は

半世紀の間に氏よりも偉大なる好個の國民的人物を他に有せざりきと謂ふべし、氏が其邦家に盡したる功業偉蹟の中其最も較明瞭著なるものは、ロンドンの造船所に於ける同盟罷工に對して手腕を揮ひたる事是なり、事は一千八百八十九年八月の交に行はれたり、工夫は給金の増加を逼りたれども、雇主は之に應せざりき、此時同盟罷工者の數極めて多く其勢極めて猖獗にして、處分一步を誤らば由々しき内亂に變性するやも測られざりき、マニングは此時之が處分を一身に引受けたり、工夫を残らず集合したり、事頗る奇觀なりき、氏は工夫に三ヶ月の猶豫を請ひたり、激昂せる獅子同然の者に三ヶ月の日子を請ふ、豈易事ならんや、工夫をして同盟罷工中に嘗めたる艱苦の外に、尙此猶豫を忍むしむ、是れ其人心を收理するの威徳ある所以、蓋し氏は理の工夫にあるを明に看取せりと雖、之が勝利を得るには、待望せしむるより外他に良好の道なきを認めたり、何となれど工夫の激動するに當つてや、雇主の之に應せざるを知れとなり、且此際に事を行ふは極めて危険の道なるを知りたれとなり、マニング此時八十三歳の老齡に達せり、此老翁工夫及其家族の利福を辨護し、滔々五時間の長演説をなしたり、言々平易なりしと雖其辨や皆活動せり、氏は理勢の力と工夫に對する同情の爲に、木強漢の眼中より滂沱たる涙を流さしめたり、其辨護は勝利を獲たり、工夫は皆感激したり、嗚呼此老司牧、斯る場合に平和の福音を布て以て基

督と國家とに盡さんとせる者、今や此教養なき精神、硬強にして鍊磨を経ざる心をして、遂に其凱歌を奏せしむるに至る、眞個に是れ奇跡と謂ふべきなり。

氏は其後、世に生存する僅か數月、日一日に桑榆晚景に近きたり、氏の觀想も自ら將來の世界に向ふしたり、之と同時に過き越し方を顧みて、其長き生涯の間に行はれたる功罪を一一々糺明したり、氏は格別其生存中に眞理の圓滿なる光を認むることを得たるを以て、深く上天の神に感謝したり、時に生を厭ふの心なきにしもあらざりしかども、死を恐るゝが如き心は毫も起さざりき、氏曰く『人々の中には其最後を語るを好まざる者多く之あり、我は之に反して、屢之を語るを愛す、蓋し是れ自らを準備せしめて、凡ての悲歎、凡ての恐懼とを脱去せしむる道なれとなり』然り、正人君子に取りては墳墓以外の世界に想を馳せて、同界の光明と美觀とを觀望するは、實に最大快事なり、吾人罪惡の者と雖、時々思を茲に回らすときは、有益なる教誨を得るものなり、現世より來世に轉宅するの希望を吹込むものは實に茲に在り、氏は斯の如き希望觀想を以て安然瞑目したり、時正に一千八百九十二年正月十四日なり、此八十の老翁の隠るゝに當りて、國民擧つて悲慟したるは、無理ならざりき、ロンドンの工夫、平民、貧人等皆其孤獨を悲むに至りたれとなり、氏が樞機教官の紫赤の衣を着けたる遺骸に向つて、一週日の間陸續引きも切らざりし雲霞の吊客を一

見するも、此顯名なる死者が民の心を收攬すること如何に深く、當代人物の尊敬重望を博すること如何に大なりしかを知るに足るなり、葬儀は同年同月二十一日を以てプロウツンの教堂に於て行はる、會葬者は教會の各代表者を始めとし、貴顯紳士、政治社會、有權有爵者の各代表者等屈指に遑わらざりき、而して其最も注目すべきは、堂外に於ける光景にてありき、道程はマ氏の生前恩誼に預りたる内外四邊の人民を以て空際なく満たされたり、今其重なる者の氏名のみを擧ぐるも、一頁に餘る紙白を要せん、此等雪霰の人民は教堂より墳墓に至るまで間斷なき長大の生垣を築きたり、要所々々に悲哀なる葬時の進行曲奏せられたり、其柩の過ぐるに當つてや加教徒たると波教徒たるとに係らず、彼の社會黨、破壊黨に至るまでも或は跪坐し或は低頭して莊重なる吊禮を表したり、是を以て當日は此偉大なる基督の僕の眼れる棺に向つて、官民朝野の上界と下界は共通の悲電に打たれ、相共に手を擁して泣涕に咽びたるを以て、彼の物質的文明論者は此時一大打撃を食せられて一敗北の能はざる挫屈を蒙りたり、余の以上記述したる所は皆是れフランシス、ド、ブレサンセ氏の書中より引用したるものにして、往々は原文其儘を應用して、毫も私意私言を挾まず、氏は斯の如くマニソンの葬儀を記し畢つて、一語を附し語つて曰く『現世紀は是よりも華美なる葬式は見たり、然れども是よりも感動すべものは見ず』と、國民的會葬とは此等を是れ謂

ふならん、氏は他に吊文を要せざりき、活ける民の涙は乃ち其吊文にてありき。

余や茲に到り一言以て氏の珍らしき生涯を概括せんすとす、氏は一片の誠心を以て真理を尋究したり、多くの若楚艱險を拂つて遂に其真理を買求めたり、其初めて真理を認むるに當つてや、凡そ人間の心を愛着せしむる百事百物を残らず犠牲に供して願ざりき、何ぞ其勇なるや、其必然の論理、其真理の饑渴は遂に氏を驅つて、否氏の心を強めて、信仰の誤りなく溢らざる受托者たる、擁護者たる羅馬加特教會に歸依すしめたり、其一たび真理を認むるや、一意見、一精神を以て、國益民福の爲に之を應用したり、嗚呼此竟にして嚴なる、酷にして愛ある、所謂恩威兩がら全き人物に向つて吾人何をか言ふべき、嗚呼此權利を愛せる、而かも之を利用して國家に多大なる貢獻を爲したる好人物に向つて、吾人たるもの如何なる言辭を呈すべき、聖經は吾人に適當の文字を呈出して曰く『嗚呼是れ偉大なる司祭』と、然り『偉大なる司祭』の語は、氏が一生を褒美しつゝ、其如何なりしやを追想せしむるに足るなり。

余や愈本書の終局に逼れり、附記すべき所他に之なし、『加教會は人物の上に基立せず、基督の上に基立するものなり』の語にして讀者に了せらるれを足る、同教會は人物に基かず、故に人物の生死によりて興亡するものにあらず、人は經過す、同教會は萬古依然として屹立

す、然れども人々經過の際教會を隆昌にせる事は没す可からず、ニヤマン、マニングの如き蓋し其人なり、然れども此が爲に此二氏が加教會に新たなる眞理を教へたりとは謂ふにあらす、同教會の信仰と道義とは二氏の以前に在りしこと尙其以後に在るに異ならず、但だ他人の眼中に、此二氏の改宗は加教會の眞理を立派に證明したりと謂ふに過ぎず、知能の深き彼の如く、徳名の高き彼の如き大人物が、心海の和平を他に求むる能はずして、加教會に於てのみ之を得たりとするは、是れ豈眞理の一大表證にあらすや、勿論波教會が此偉大なる人物を産出したるは、以て誇るに足る、然れども之を失ふて加教會に奪はれたるは、以て遺憾とすべきにあらすや、無論波教會より加教會に歸依したる者は此二氏のみならず、三百年來幾多の改宗者が如何にして歩一歩づつ、加教會に近づき來れるやは、彼等波教徒の實地經驗するを得る所なり、即ち善人君子となるに従つて加教徒となり來りたるものなり、吾人此が爲に波教徒中の凡ての正人君子が加教に改宗したりとは謂はず、單だ波教徒中に其知能其徳行を以て同教の光榮となりたる者は、最も加教の信仰道徳に接近するものなりと謂ふのみ、是れ蓋し事實なり、争ふ可からざる事實なり、愈波教に遠かれ愈良好の波教徒となるとは、奇怪なる衝突の如くなれども、是れ實際なり、否是れ亦理論なり、果して然りとせむ、波教と加教との同盟は何故行はれざるや、余は既に之を言盡せり、兩

教の主義相異なれどなり、一方は自由主義なり、異論と争論と紛々絶ゆるなし、他の一方は權利主義なり、服従と和平とあるのみ、自由主義と權利主義は相矛盾す、争ふと服するとは、正反對す、如何ぞ二者相一致同盟するを得んや。

教界の權利主義と自由主義 畢

5/34

明治三十一年六月二十八日印刷

明治三十一年七月七日發行

著者

リギヨル

全 東京市京橋區新榮町六丁目卅五番地

譯者

前田長太

全 京橋區木挽町一丁目十四番地

發行者

石川音次郎

全 京橋區銀坐三丁目十五番地

發兌元

文海堂

全 京橋區築地二丁目二十一番地

印刷者

河本龜之助

佛人リギヨル氏著
新版廣告

古 事 新 論 全
 事 跡 以 前 以 後 之 歷 史 全
 哲 學 論 綱 全
 國 家 盛 衰 之 原 理 全
 照 闇 之 燈 全
 希 露 離 教 論 全
 處 世 哲 學 全

郵 正	郵 正	郵 正	郵 正	郵 正	郵 正	郵 正
稅 價	稅 價	稅 價	稅 價	稅 價	稅 價	稅 價
四 二	四 十	二 十	二 八	四 二	六 三	二 八
錢 十	錢 五	錢 錢	錢 錢	錢 十	錢 十	錢 錢
錢 二	錢 錢	錢 錢	錢 錢	錢 五	錢 錢	錢 錢

愛國の眞理
 黒衣婦人
 トラヒス
 日本主義と世界主義
 警醒時論
 唯物論と靈性論
 學理無能論

發兌元
 東京橋本區
 三丁目十五番地

文海堂

郵正	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
二十	二十	二十	二十	二十八	二十	二十
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

81
81

